第４節　旧石器時代

後期旧石器時代の遺構・遺物はⅣ層からⅧ層にかけて出土した。前述したようにAT（Ⅶ層）より上位の層は混在した状態で出土した。

遺構・遺物を確認した最下層はⅧ層であったが、その他に炭化材集中区をⅨ層中で検出した。

炭化材

E4Gr.のⅨ層上部中から１㎝前後の炭化材小片が、50㎝四方に集中して検出された。精査を行ったが、掘込み等は確認されなかった。炭化材は土ごと採取し、アルミ箔に包み持ち帰った。

これについて古環境研究所に委託し、年代測定と樹種同定を行った。年代測定はAMS法で、補正14C年代26,630±160年BPとなり、樹種はコナラ属コナラ節と同定された。約19,000BP以前は歴代補正外の値であるが、通常暦年代は14C年代より、おおよそ2,000年程度さかのぼることから、約28,000年前後になる可能性が高い。この炭化材の測定年代は、MB3に対比されるⅨ層の年代とも近いと考えられる。

１　旧石器時代（Ⅷ層）の調査

AT直下であるⅧ層上面から約850点に及ぶ石器が出土した。そのほとんどはE・F～4・5Gr.に密集していた。第３節に記述したように、出土した石器には爪ではじいてもとれないほどATが付着しており、水洗作業を行っても完全に除去することはできなかった。石器を傷つけるおそれがあったため、無理にとることはしなかった。これは水分と熱の影響により、火山灰中の成分が石器に密着した結果であると考えられる。

また礫群が４基検出されたが、それらは石器ブロックとは重ならず検出された。SI42はトータルステーションでドットのみ記録した。礫群と認定した礫の密集部以外は上位層に比べ、礫の分布が散漫であった。そのため、礫群としての名称を付すのが容易であった。

Ⅷ層出土の遺物を発掘調査終了後に図化したところ、ドーナツ状に巡っていることに気づいた。SI35とSI36の周囲を囲むように、大きく二つの円弧を描いている。年代は新しいものの環状ブロックの可能性を想起させた。

接合関係をみると集中区２と４は明らかに関係性を持っていることがわかる。３と４・５も同時性が認められる。また集中区７と８も同様である。集中区10は単独で存在していた可能性が高い。同時に近接するSI41の形態がSI35・36と異なることも注目される。大きく二つの円弧をA、Bと名付け互いの関係を見ると、３点ほど接合している。距離にすると15ｍ前後である。この環状に巡る石器集中区については、第６節で環状ブロックの可能性を含め考察したい。

【遺物】

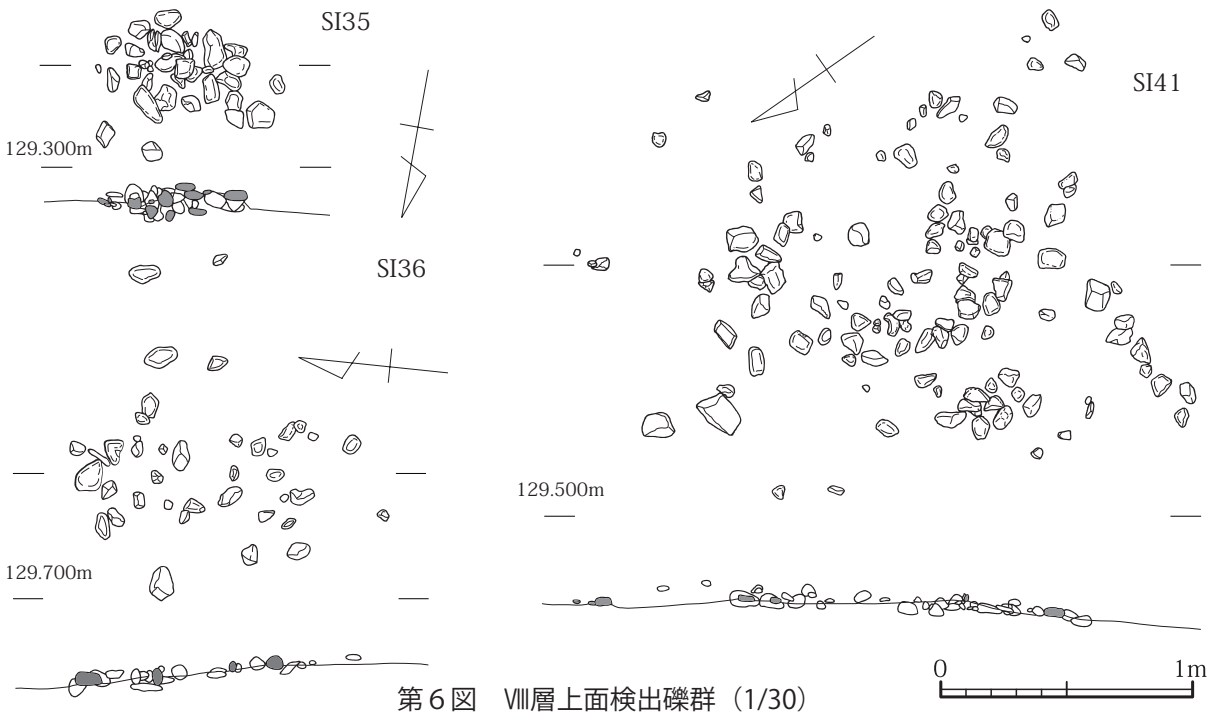
遺物は小形のナイフ形石器と掻器の生産に関連する資料と礫石器が出土した。

石材は流紋岩とホルンフェルスが大半をしめる。残りは、尾鈴山酸性岩類、頁岩、チャート、黒曜石、砂岩等である。AT下位から出土した黒曜石は不純物の多い日東産と推定されるものである。これらはAT上位からは出土しなかった。

１～31は流紋岩１（Ryu1・黒色系流紋岩）製である。１～６はナイフ形石器である。いずれのナイフ形石器も素材剥片からの改変度が大きいものの、稜の数条とおった比較的端正な縦長剥片を素材としたものと推測される。ナイフ形石器は鋭い先端部を持つ細身の三角形に仕上げられる。３・６の先端は欠損する。

７～10・16は二次加工ある剥片である。定義如何によってはナイフ形石器とするべきかもしれない。ナイフ形石器の未製品の可能性も残す。

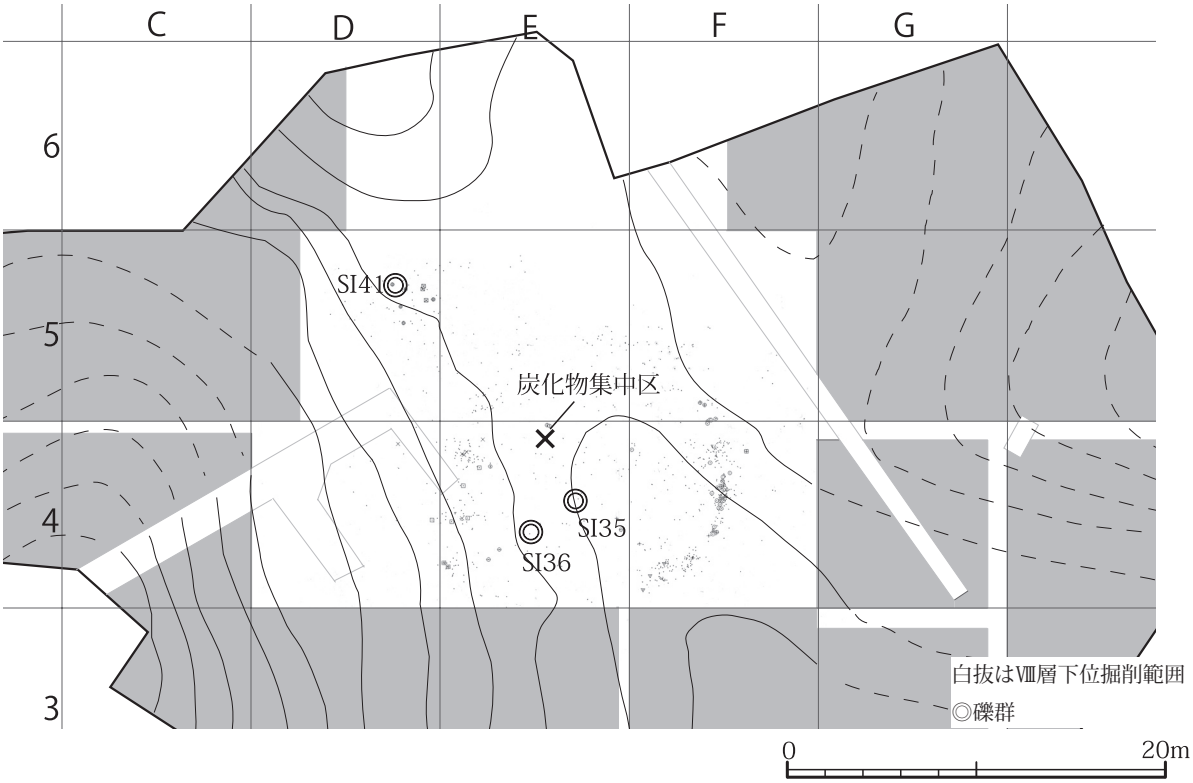
11～14はスクレイパーならびにそれに関連する接合資料である。11は入念な打面調整の上剥離された縦長剥片素材である。右側縁に弱い抉りがみられる。13はスクレイパー（12）とそれに接合する２点の剥片の接合資料である。剥片２点はスクレイパーの素材剥片生産に直接関わるものではなく、スクレイパーの素材剥片が剥離された面を打面に新たに剥離されたものである。12は入念な頭部調整の上剥離された縦長剥片を素材とする。剥片側縁から末端にかけて刃部を設けている。特に下端の刃部は刃角が90°に近い。14は頭部調整の上剥離された縦長剥片



第６図　Ⅷ層上面検出礫群（1/30）

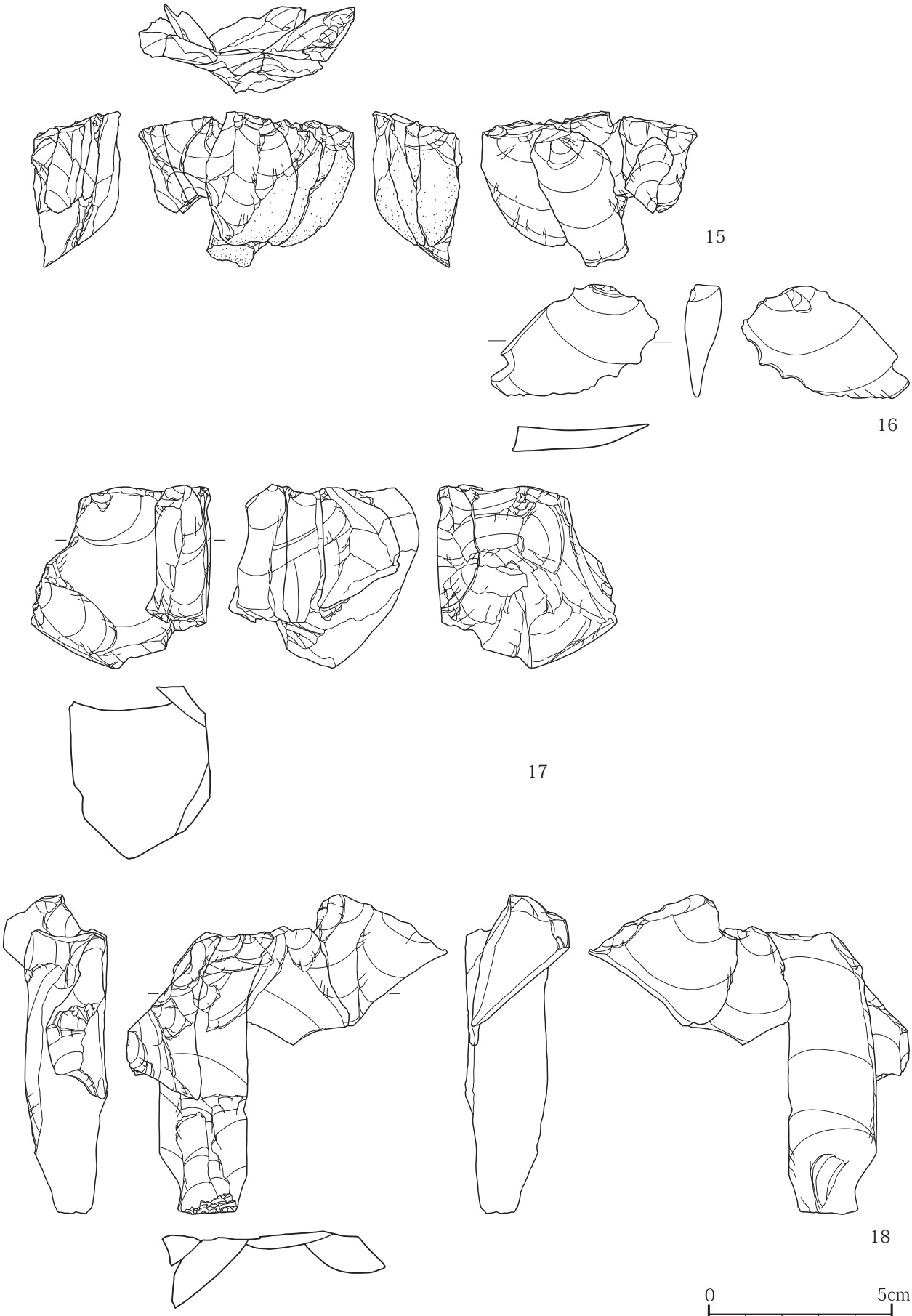
第１表　Ⅷ層検出礫群観察表

遺構名	Gr.	検出層	最大長（m）	最大幅（m）	掘込（m）	礫重量（g）	礫の状態	その他の所見
SI35	E4	Ⅷ	0.70	0.60	－	14,427		
SI36	E4	Ⅷ	1.25	1.35	－	8,081		
SI41	D5	Ⅷ	2.50	1.90	－	27,703		
SI42	D5	Ⅷ			－	3,956		点データ

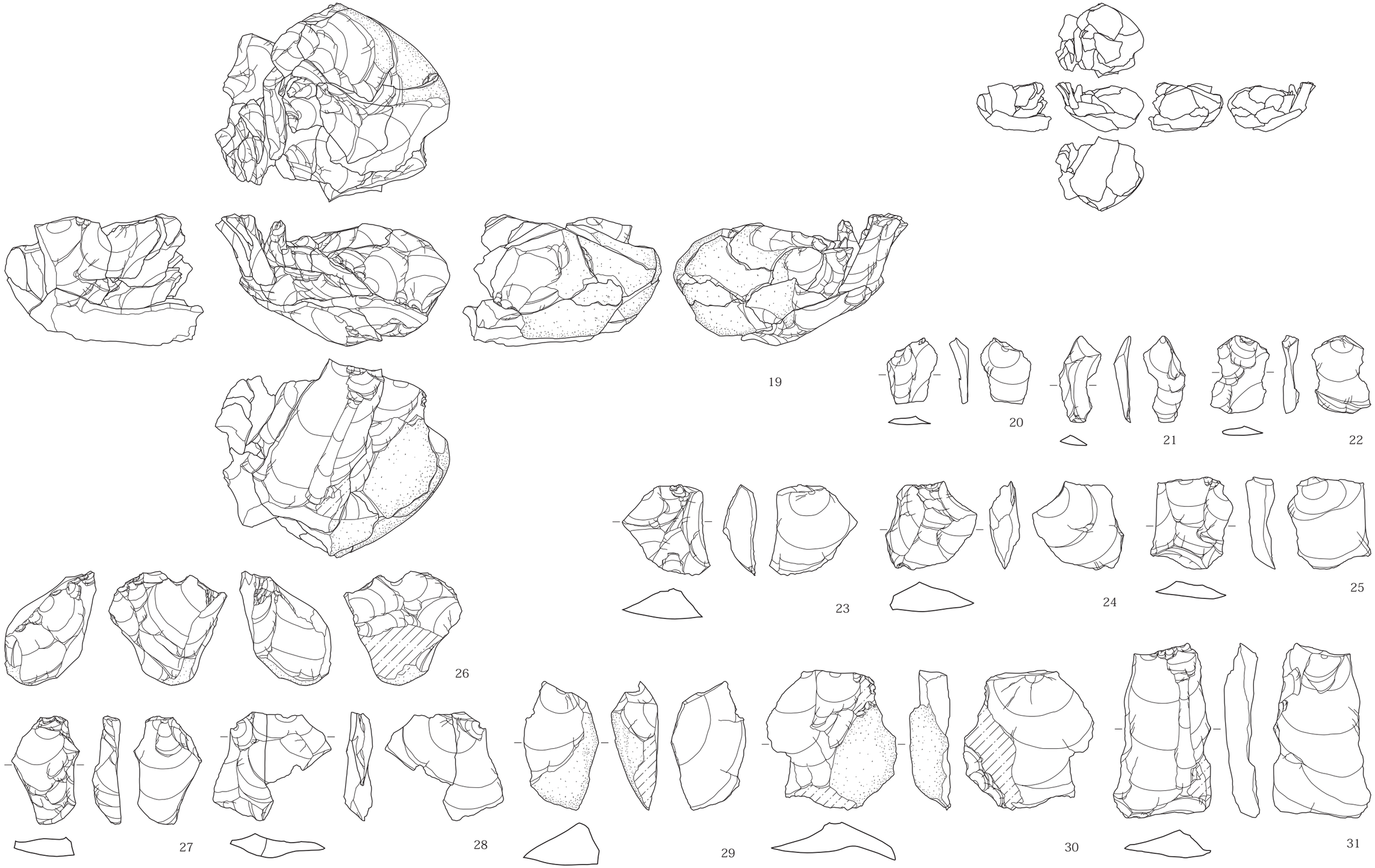


第７図　Ⅷ層上面遺構・遺物分布図（1/400）

第８図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器１（2/3）

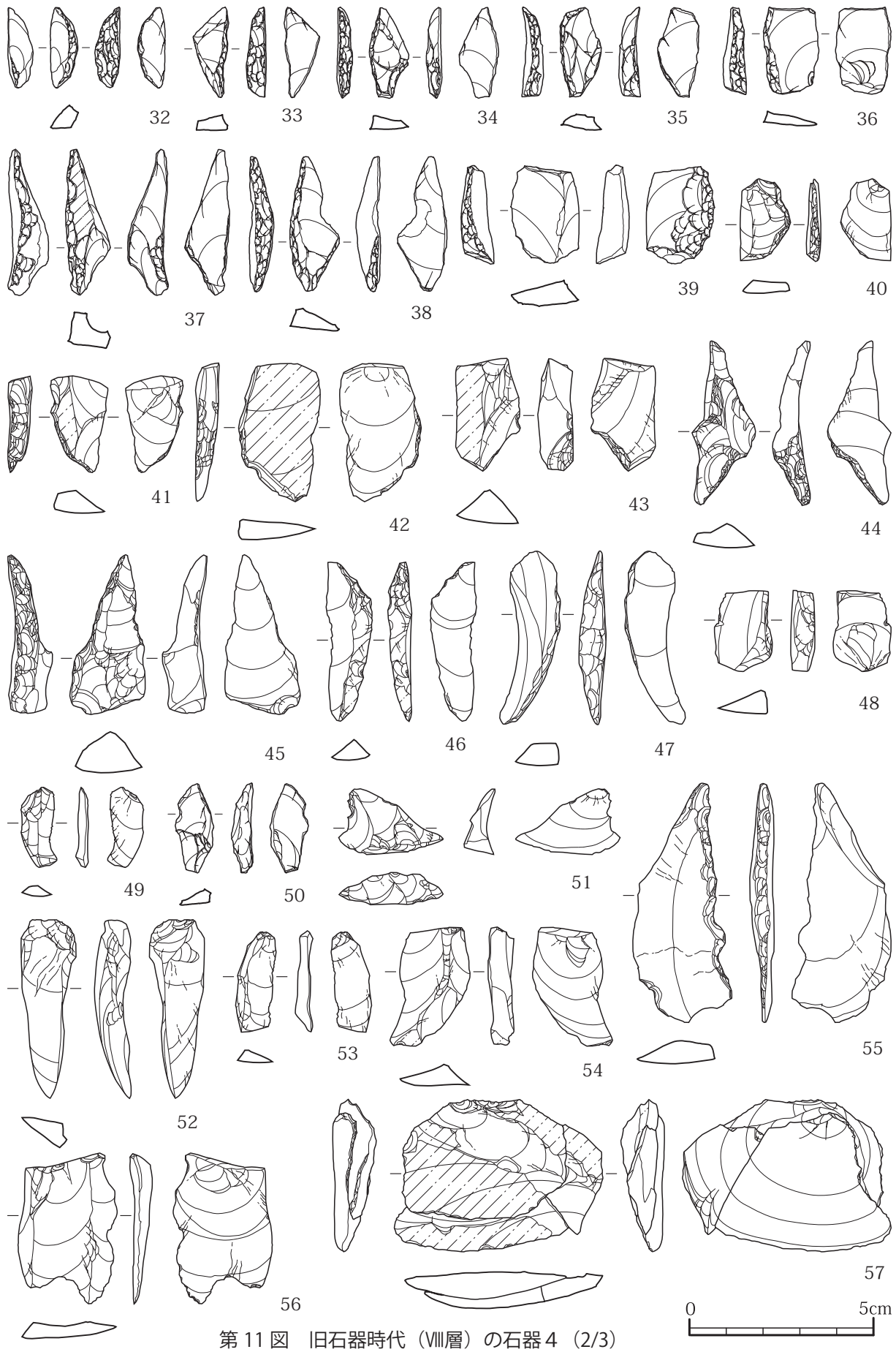


第９図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器２（2/3）

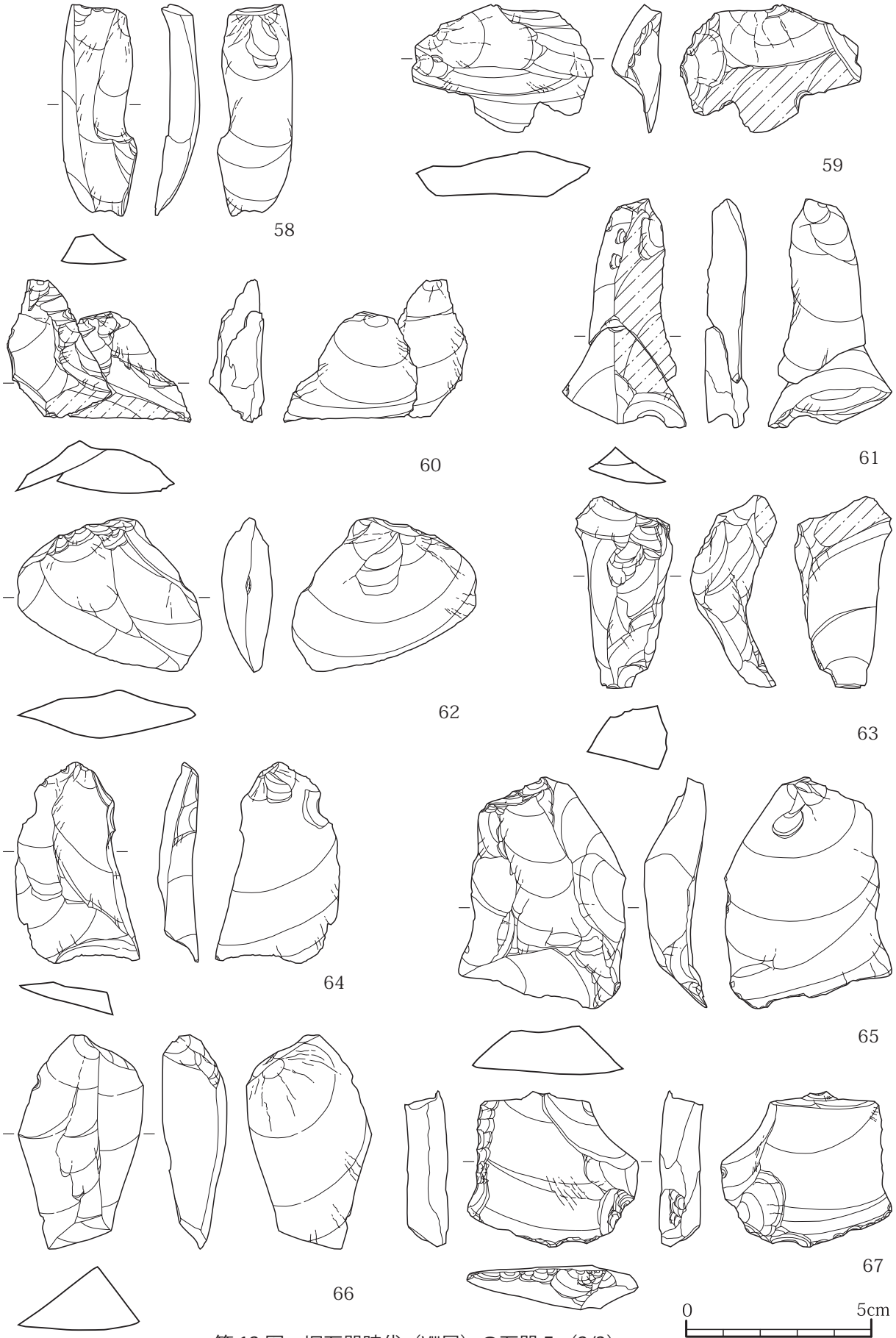


第 10 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 3（2/3）

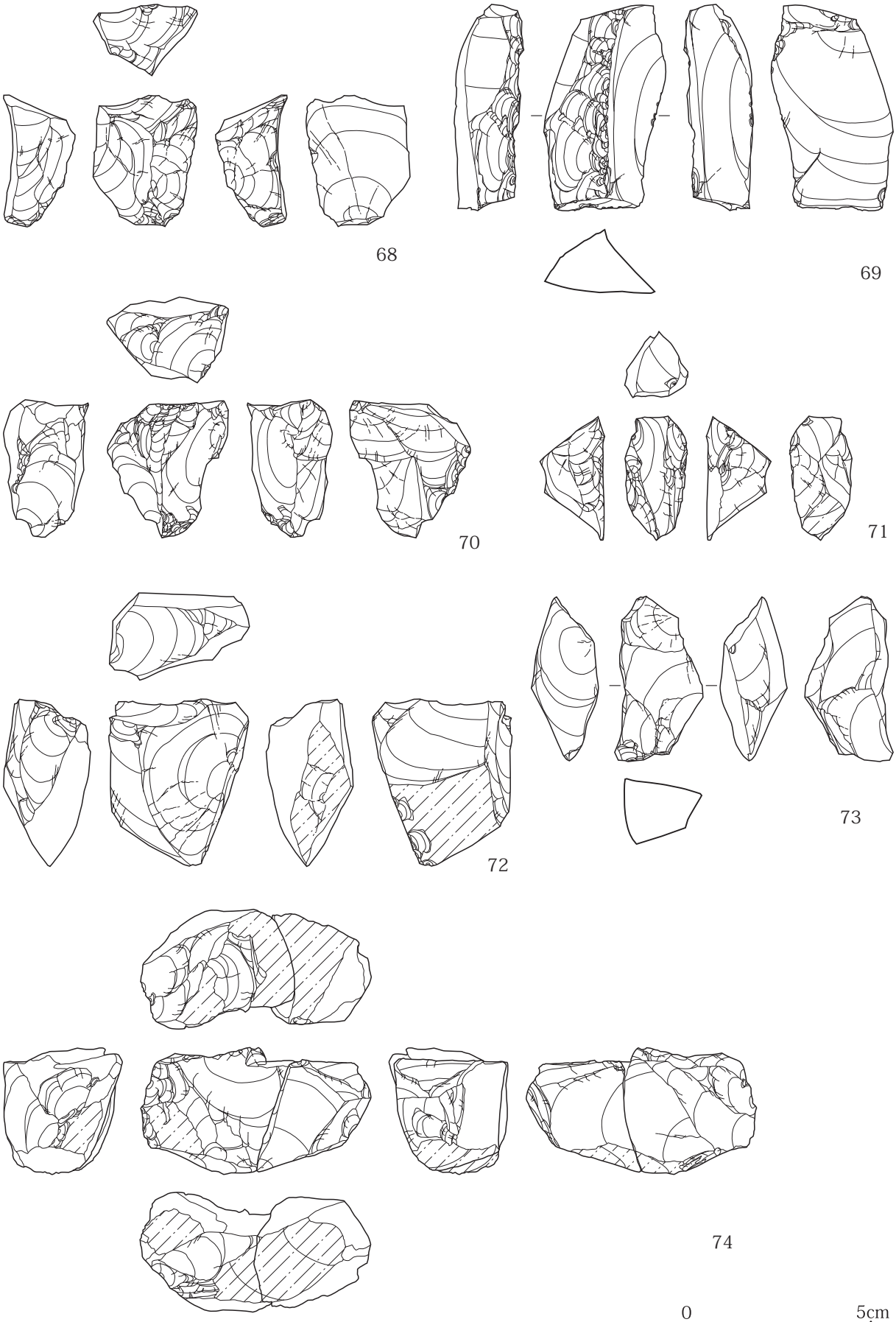
15 ～ 16



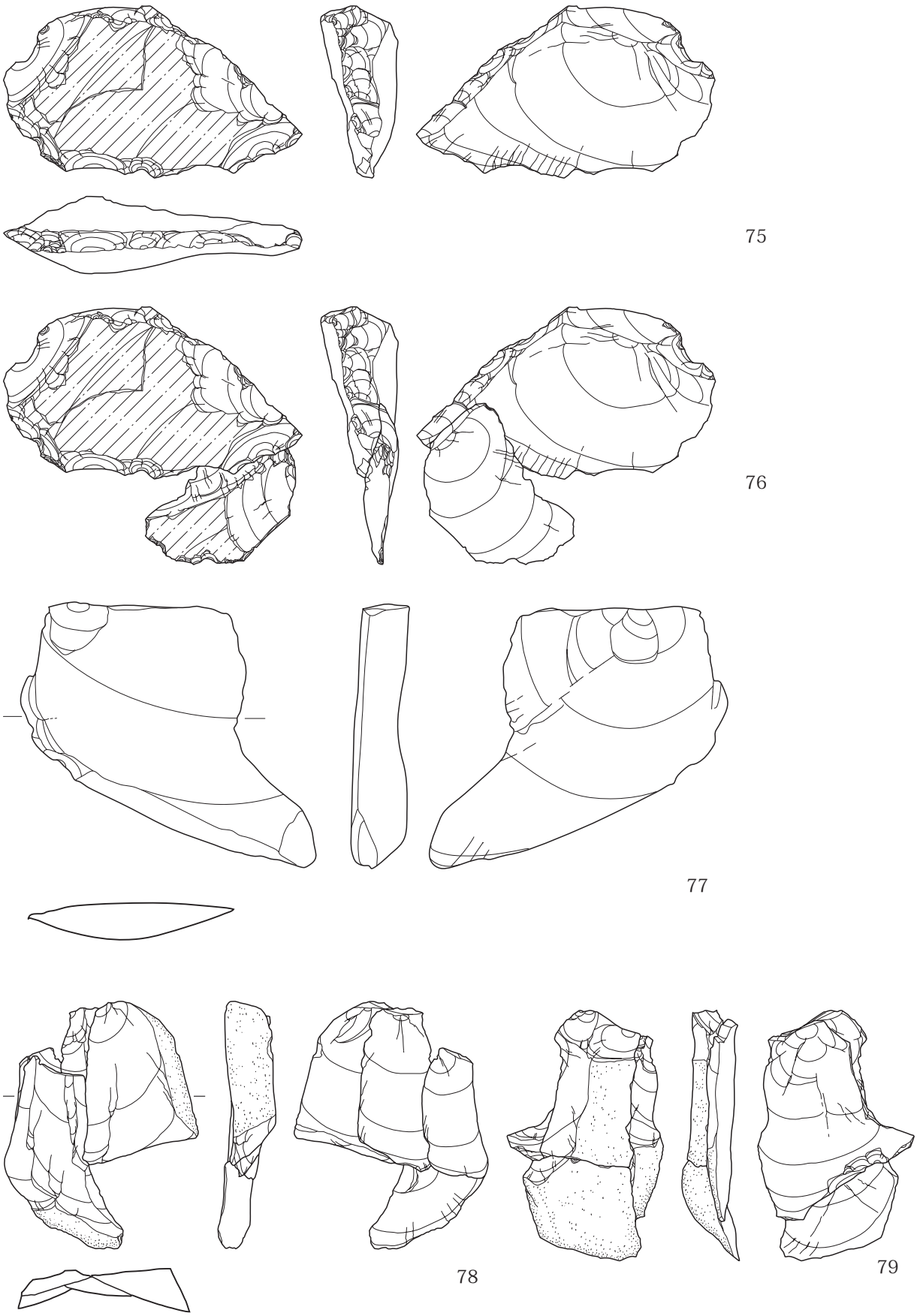
第 11 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器４（2/3）



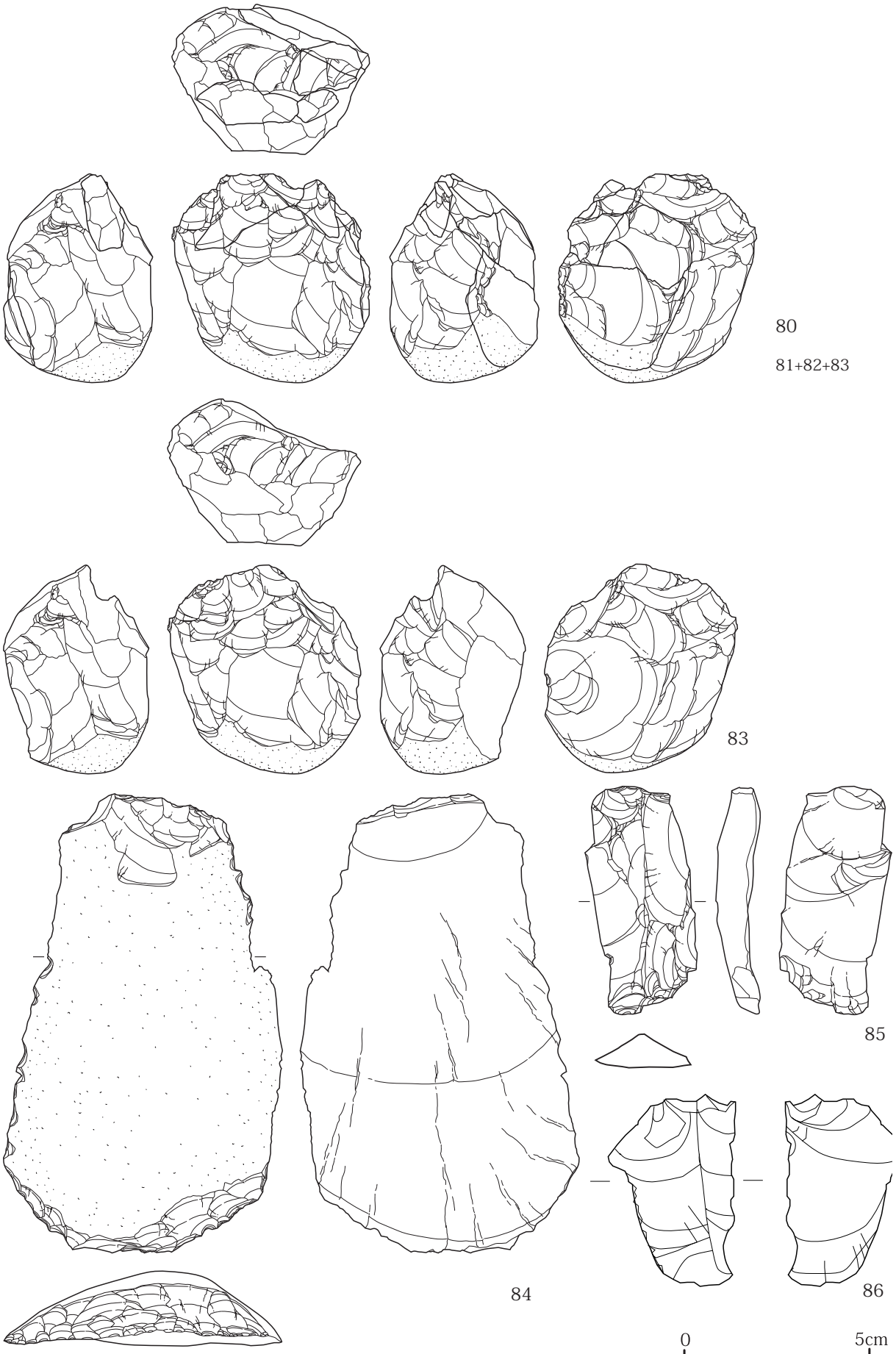
第 12 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 5 （2/3）



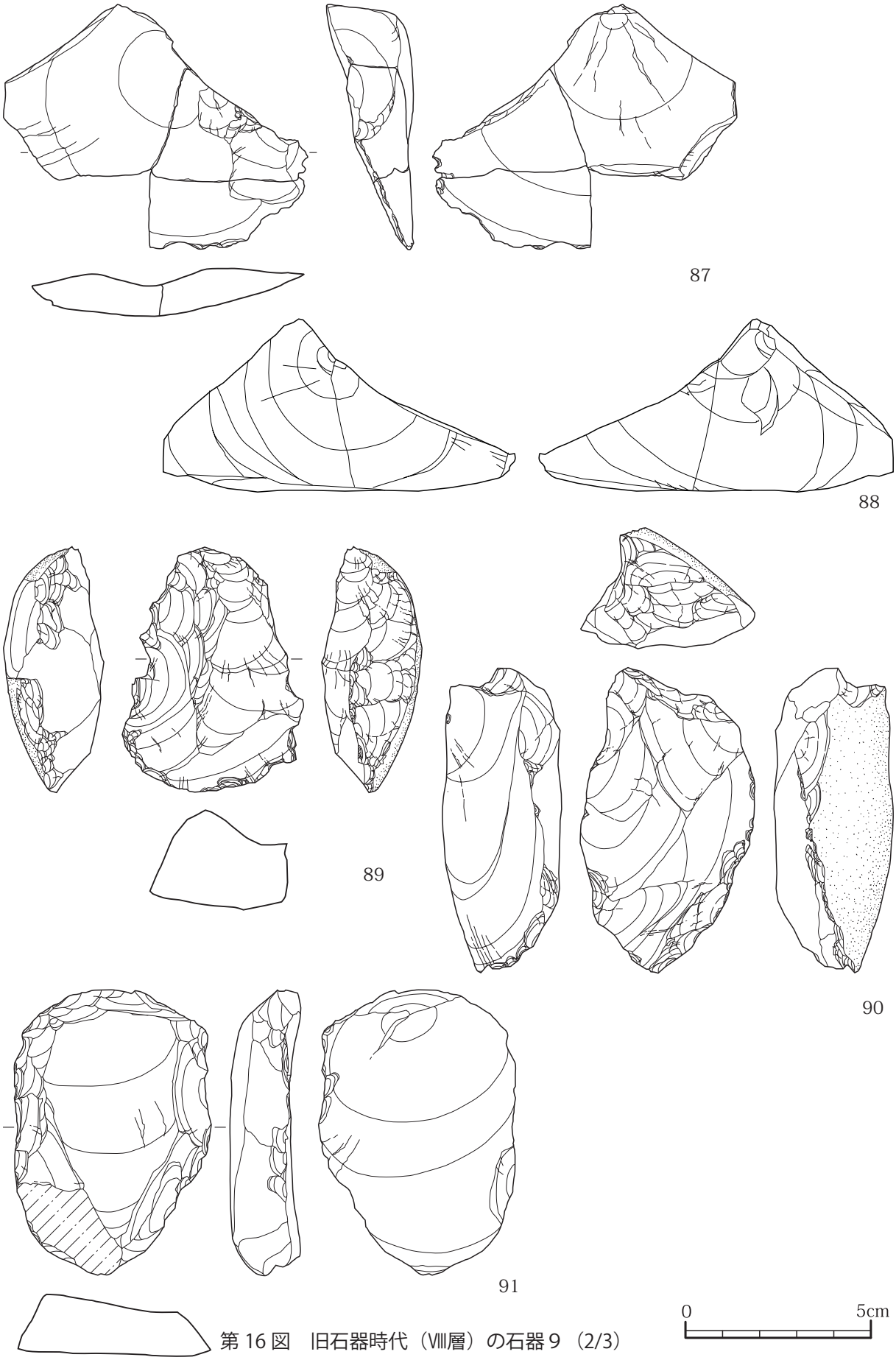
第 13 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 6（2/3）



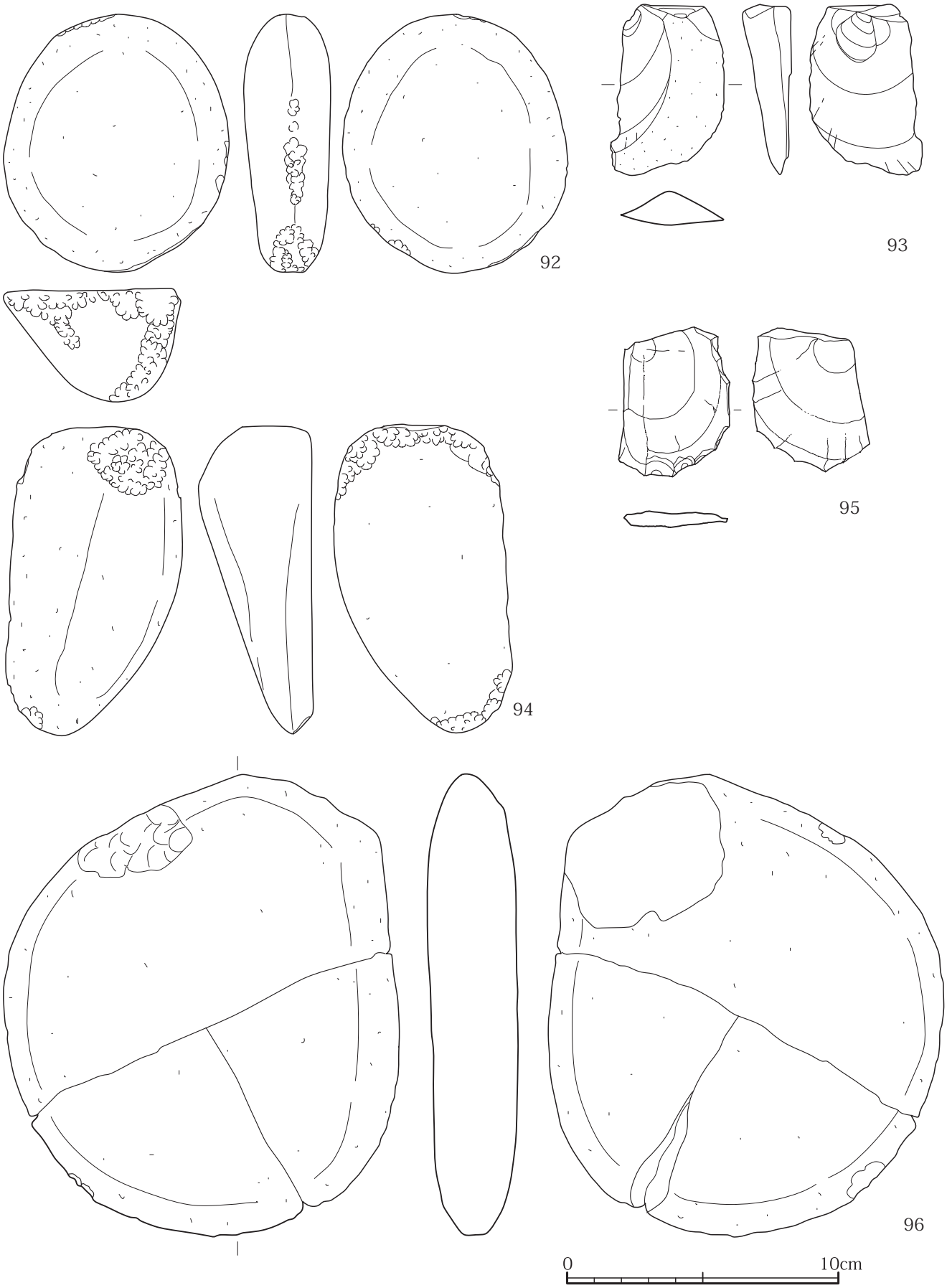
第 14 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 7（2/3）



第 15 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 8（2/3）



第 16 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器９（2/3）



第 17 図　旧石器時代（Ⅷ層）の石器 10（1/2）

素材である。二次加工はあまり明瞭ではないものの剥片下半にみられる。

15は剥片どうしの接合資料である。接合の確認できた剥片2点がそれぞれ縦長剥片・不定形剥片であることからも理解されるように、生産された剥片は縦長を志向しつつも、結果、様々な形状になったとみられる。打面は一定枚数連続して剥片剥離が済むまで固定され、その上で打面転移している。剥離前の打面調整・頭部調整は見られない。

18は剥片どうしの接合である。あまりに部分的な接合のみの確認であるため剥片剥離の全容は知りえないものの、長さ7.5㎝幅3.5㎝の端正な縦長剥片1点が含まれている。頭部調整の有無に注目すれば、4枚の剥片剥離のうち、端正な縦長剥片の剥離時のみ頭部調整が見られる点は、目的剥片が縦長剥片にあったことを推測させる。

19は20～31までの接合資料である。一母岩より大形剥片を剥離した後、小形剥片も続いて剥離するものである。目的剥片は31のような縦長剥片であったと見られる。23～25の不定形な剥片も頭部調整が見られることから目的剥片であった可能性がある。26は石核である。

32～77はホルンフェルス2（Ho2・茶色系ホルンフェルス）製である。この石材は表面がきなこ状に激しく風化するもので、中には表面が風化によって大きく剥落するものも見られた。

32～39はナイフ形石器である。流紋岩1製のナイフ形石器と比較し、素材・加工・最終形にバラエティーがある。32は素材剥片の形状が全くわからないほどまで二次加工されている。33は左側縁下辺の剥離面を、石器完成後の欠損と見るか整形のための折断と見るかによって全く異なるものとなる。図化は前者の可能性で行ったが、後者であれば37・38に近い大ぶりのものに復元される。34・35は基部を欠損している可能性があるものの、風化が著しいためブランティング面との切り合いが明確でない。34・35は36と同じく、小さな縦長剥片素材であり、石器基部側に素材打面部をあてることで共通している。37・38は同石材製のナイフ形石器の中では大形である。37は節理が背面に残され、その石質の影響か大きく湾曲した縦長剥片を素材とする。38は稜の数条とおった比較的端正な縦長剥片を素材としたものと推測される。鋭い先端部を持つ細身の三角形に仕上げられている。

40～48・55は二次加工ある剥片である。定義如何によってはナイフ形石器と言えそうなものも含んでいる。また、ナイフ形石器未製品の可能性のあるものも見られる。

49～54・56・58・59・62～66・77は剥片、57・60・61は剥片どうしの接合である。

67はスクレイパー、76はスクレイパー（75）と剥片の接合である。67は厚手の斜軸に抜けた剥片素材で、剥片末端に刃部を設ける。

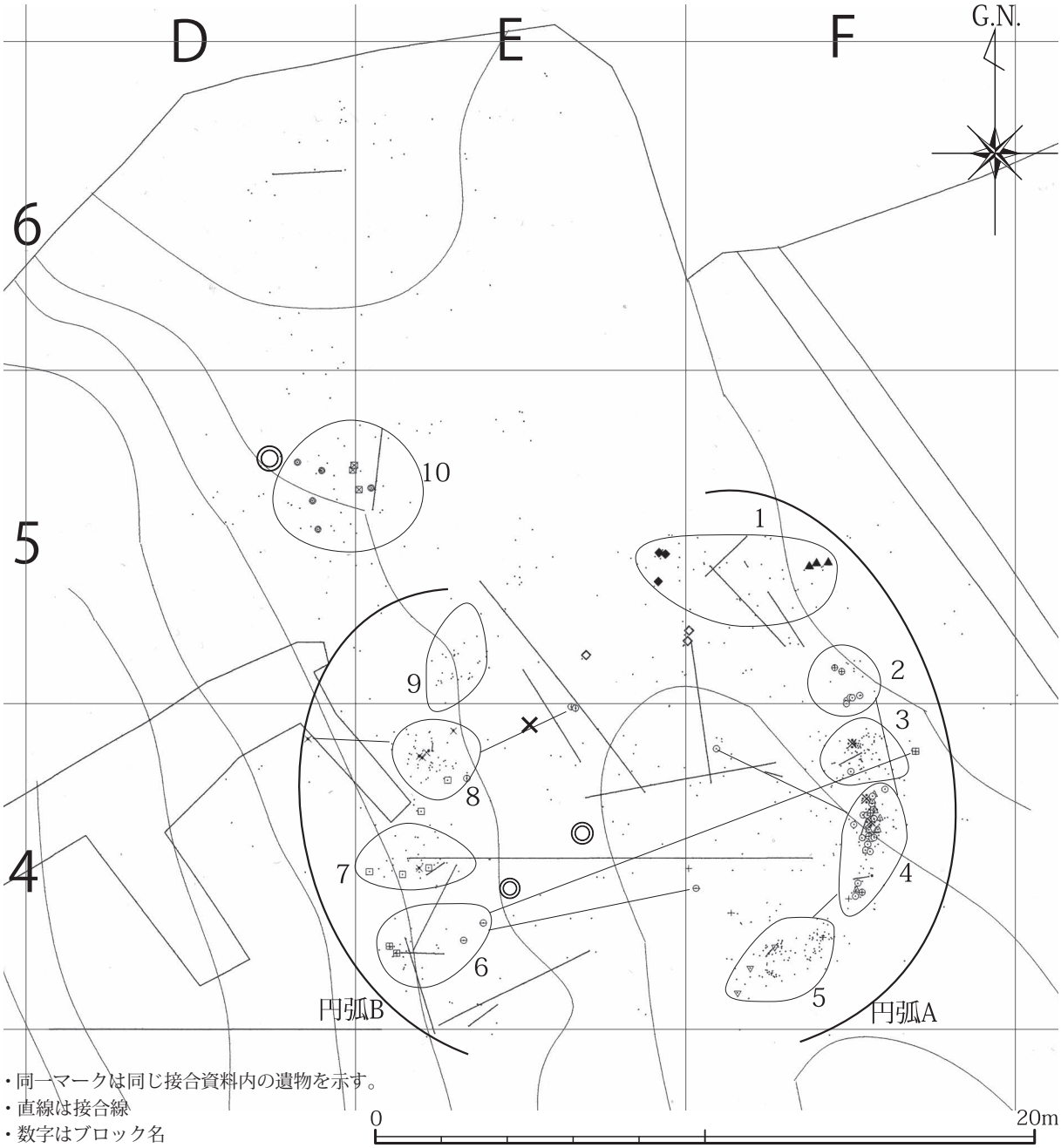
68～73は石核、74は石核がアクシデンタルに分割したものの接合資料である。68・69は断面三角形の分厚い縦長剥片を素材として小形の縦長剥片を剥離するものである。石核作業面成形に伴うファーストスポールの可能性を残す。

78～86はホルンフェルス・頁岩・チャート製等である。78・79は剥片どうしの接合である。80は石核（83）と剥片の接合である。84は頁岩製スクレイパーである。85・86はチャート製で86は微細剥離が見られる。87～89は流紋岩2（Ryu2）製石器、90・91はホルンフェルス製の二次加工剥片である。

敲石類は2点出土した。92は硬質の砂岩製で、側面から下端部にかけて面を作るような敲打痕が見られる。特に下端部の敲打痕は強い。広い意味では“局部磨製礫”と呼ばれる敲石の一種に相当しよう。94は96の台石に近い石質の砂岩製である。一端のふくらむいびつな礫の上下端に敲打痕が残される。裏面はもともと平坦な面であり、その中央あたりに弱い磨面と見られるすべらかな部分がある。

96はやや粗い石質の砂岩製台石である。敲打痕・摩滅といった使用痕の類は明瞭でない。側面に部分的に弱い赤化が見られる。

なお、93は94・96に近い石質の砂岩製のものである。背面には礫面が残り、礫面は弱く赤化しているようにも見える。打面は剥離面であり、礫片ではなく意図的に剥離されたものと理解した。



第 18 図　遺物接合状況分布図（1/200）

第２表　Ⅷ層出土未掲載遺物観察表

No.	Gr.	器種	所見
K1		石核	直径 10㎝ほどで打面調整を行わず、一方向から縦長剥片を連続して剥離。下端は礫面が残っている。
K2		掻器	長軸 7.6㎝の縦長剥片を素材とする掻器。末端部を軽く調整。
K3		掻器	長軸 8.5㎝の縦長剥片を素材とする掻器。末端部を調整し一部礫面を残す。

2　旧石器時代（AT 上位石器群）の調査

第１～３節にも述べたように、本遺跡では遺構と遺物の出土層位に不整合が生じており、かつ同時期の遺構であっても異なる層位で検出される可能性がある。特に AT 降灰以降はその影響が大きく、単純に遺跡の変遷を追うことが困難である。

一方で、Ⅲ～Ⅵ層及びその他の混在層では、多量の石器と礫群等の遺構が確認された。とはいえ、遺物は水平分布においても垂直分布においても、二次移動が激しいと考えられ、厳密な原位置的検討は行いがたい。

しかしながら、第１節に考察したような遺跡形成サイクルを考慮すると、調査区内にも原位置に近い水平分布を多少なりとも反映している個所があることが予想される。また遺構は、ある時点での一定の生活面を反映していると考えられる。従って、それぞれの地点でわかる範囲で、時間軸に沿った層の対応関係を把握していけば、有用な情報を引き出すことが可能である。

そのため、ここではⅢ～Ⅵ層を AT 上位石器群として一括して取り扱い、遺構と遺物の基礎的な整理を優先して行いたい。遺物については、型式的操作と並行して、若干の相対的な前後関係を反映するであろう一部の層位ならびに、大まかな水平分布を併用して、個々の遺物の帰属年代を推定していきたい。遺構については、検出層位の詳細な検討によってその時期的変遷を追っていきたい。

本項目に図化した出土遺物の配置は、まず、層位を問わず、石材を最上位基準にして大別し、次に器種及び類型を細別している。トゥールに伴うと考えられる石核や剥片類は、トゥールとともに共に掲載している。

このほか、層位が安定していたため、一部、試験的に層を記録して取り上げた箇所では、関連性を持つと考えられる石器が一定範囲で出土したため層位を優先して報告している。また、石材よりも器種を優先した個所もある。

以上のように配置基準はフレキシブルであり、その詳細は、個別の当該遺物項目に随時記す。

石材の分類は第８表と遺物観察表を合わせて参照されたい。

また、遺構についても先に形態分類を行い、検出状況を加味し概要を示していく。

概期に属する遺構として、礫群 36 基と土坑２基を認定した。遺物はナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、掻・削器、礫器、細石刃期の石器、石核、敲石等が出土した。

【遺構】

礫群（第 19 ～ 23 図）

礫群を以下のように分類した。詳細は、第３・４表に検出層の状況と所見を一覧にしている。

Ⅰ類：小形のもの。

a：40cm程度の範囲に礫が密集しているもの。掘込みがあるかの様に土中に礫が入り込んでいる。

b：礫が 40cm程度の範囲にまとまっているけれども個数が少ないため、認識しずらいもの。

Ⅱ類：一定範囲に密集しているもの。

a：大形の礫を使用しているもの。

b：小形の礫を使用しているもの。

Ⅲ類：密集しているとはいえないが、一定の範囲に礫が集まっており、周囲と明確に線がひけるもの。小形の礫を使用している。

Ⅳ類：礫の分布が散漫で、明確に範囲を示し得ないが、あえて認定したもの。

Ⅰ類には SI7・9・11・14・15・17 ～ 19・21・24 ～ 33・37・38・40、Ⅱ類には SI13・23・34、Ⅲ類には SI3 ～ 5・10・12・39、Ⅳ類には SI6・16・20 が該当する。

SI8 は現地で図化は行ったものの、自然要因によって窪地に落ち込んだものと判断した。

SI7 と SI9 は２基に分離される可能性がある。SI32 は磨石のような砂岩が接合し、完形礫となった。

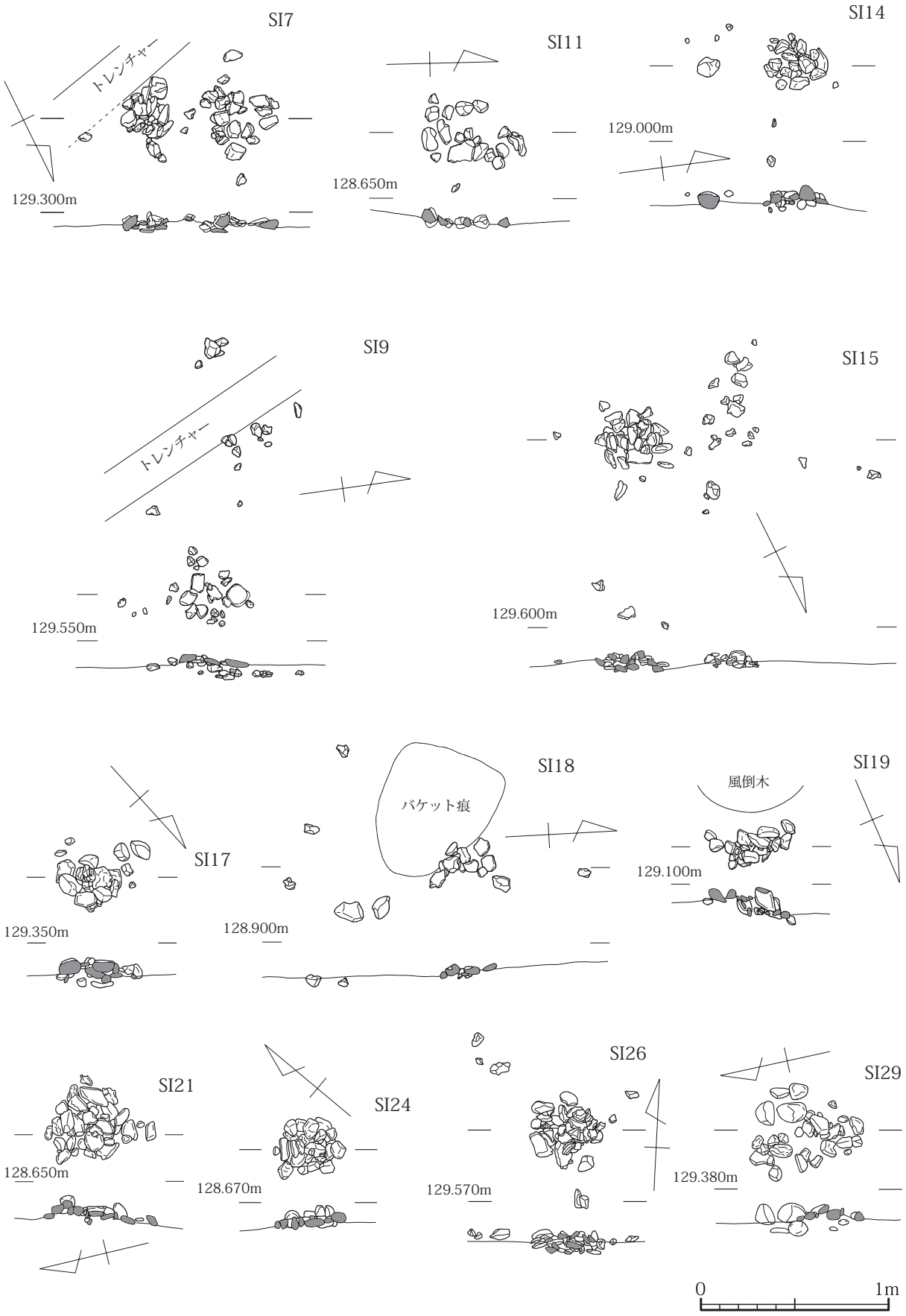
また、SI11 は SI3 を検出、掘り下げた後に、その下層で検出された。状況から、SI3 の下部ではなく別遺構であると判断した。

SI22（第 25 図）

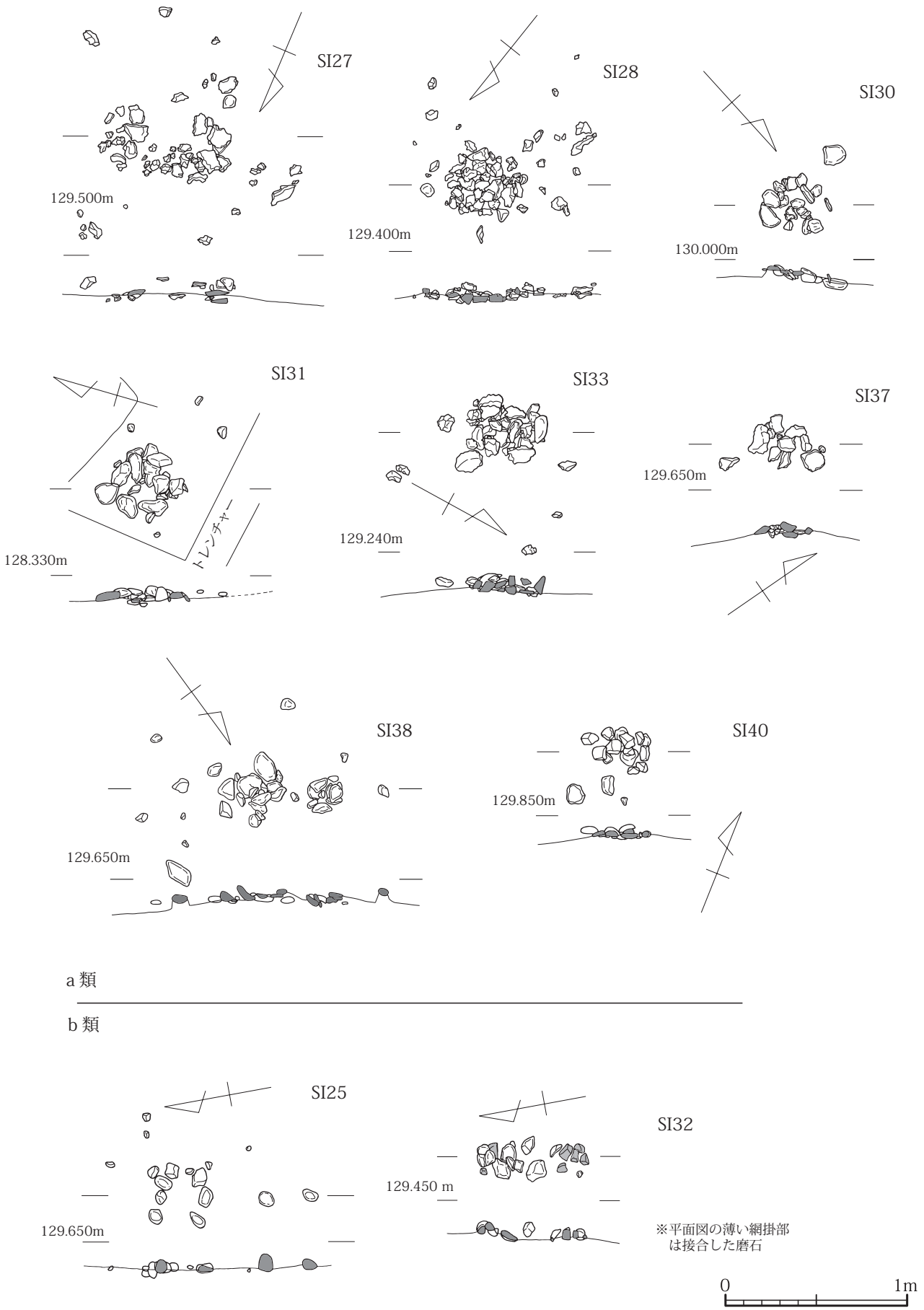
また、上記中に分類しなかった SI22 のような遺構

第３表　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類礫群観察表

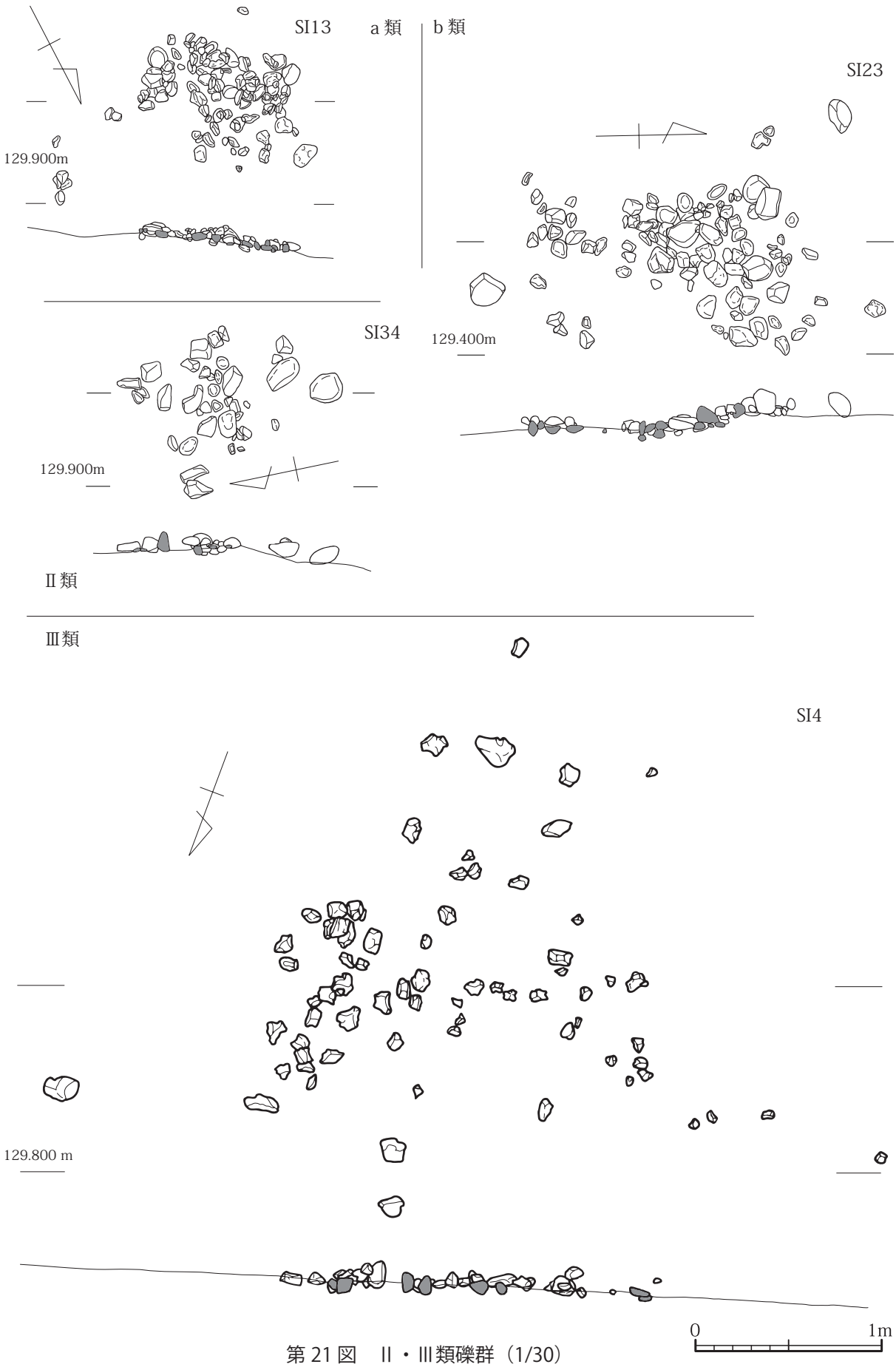
遺構名	Gr.	検出層	最大長（m）	最大幅（m）	掘込（m）	礫重量（g）	礫の状態	その他の所見	類
SI7	E5	AT 上の褐色土層中	1.1	0.7	－	8,878	板状に破損した礫を使用。赤化度は強い	２群にわかれる可能性がある。	Ⅰa
SI9	E4	AT の堆積が薄い箇所の上の褐色土中	1.5	1.0	－	3,693	板状に破損した礫。礫が下部に入り込む。	２群に分かれ、一つはトレンチャーにきられている可能性がある。	Ⅰa
SI11	D4	AT 混じり層中。	0.6	0.6	－	6,779	板状に割れた礫を使用。赤化度は弱い	SI3 の下で検出された。	Ⅰa
SI14	D3		0.8	0.8	－	2,952	丸い破損礫を使用。赤化度は強い。		Ⅰa
SI15	F4	AT 上の褐色土中	1.6	1.5	－	9,094	下部の礫土の中に入り込む		Ⅰa
SI17	D5	AT 混じり層（というより AT 堆積が弱い箇所の上面）の上面で検出	0.5	0.4	－	11,323	丸い破損礫を使用。赤化度は強い。礫土の中に入り込む。		Ⅰa
SI18	D5	AT 流れ層上で検出。SI17 と同じ	1.9	1.0	－	5,638	板状に割れた石を使用。赤化度強い。	バケットで半分破壊されている。	Ⅰa
SI19	E2	AT 混じり層上。SI13 と同層だが、風倒木で動いている可能性あり。	0.5	0.3	－	3,906	板状に割れた石使用。風倒木により、礫が移動し斜めに立っている。赤化度は少し弱い。	風倒木により、礫が傾き、立っている。	Ⅰa
SI21	D3	AT 混じり層上面にわずかに残る褐色土層中。	0.6	0.5	－	6,838	板状にわれた石使用。礫が土の中に入り込む。		Ⅰa
SI24	D2	AT 混じり層上面	0.4	0.3	－	5,372	小さな破損礫使用。赤化度は強い。		Ⅰa
SI25	D5	AT 上の黒褐色土上	1.2	0.7	－	5,535	赤化度の非常に強いチャートの円礫を使用していた。	弧状に配置	Ⅰb
SI26	E5	AT 上の褐色土中	0.9	0.9	－	9,074	下部の礫土の中に入り込む		Ⅰa
SI27	E6	SI26・28 と同じ	2.5	2.6	－	6,995	板状に割れた石を使用。赤化度は少し強い。中央部に礫が落ち込むようになっている。		Ⅰa
SI28	E6	AT 上の褐色。SI26 と同じ	2.0	1.8	－	7,963	板状に割れた石を使用。礫が中に入り込む。赤化度は強い		Ⅰa
SI29	E2	AT 混じり層上面で検出。その下は茶褐色粘質土。	0.6	0.5	－	9,072	小さな破損礫で構成。赤化度は強い。		Ⅰa
SI30	F2	AT 上の褐色土中	0.5	0.5	－	3,572	小さな破損礫を使用。赤化度は強い		Ⅰa
SI31	D2	AT 上の褐色土中	0.7	0.8	－	6,054	板状に割れた礫を使用。赤化度は少し強い		Ⅰa
SI32	D6	AT 上の AT や黒斑がブロックに入る褐色土層中	6.0	2.5	－	4,464	砂岩が混じり、接合すると完形の円礫になる。	砂岩の磨石と思われる物が接合	Ⅰb
SI33	E6	AT 上の黒色ブロックのまじる層の上	2.1	1.7	－	10,930	小さな破損礫を使用。赤化度は強い		Ⅰa
SI37	E6	AT 上の黒色ブロックの混じる層の上	1.2	0.6	－	4,292	板状に割れた礫を使用。赤化度は強い		Ⅰa
SI38	E6	SI33・37 と同じ	1.4	1.0	－	7,604	板状に割れた石を使用赤化度は少し強い		Ⅰa
SI40	D6	AT 上の褐色土層中	0.5	0.4	－	3,054	小さな破損礫を使用。赤化度は強い		Ⅰa
SI13	E3	AT 混じり層上。	1.4	1.1	－	15,032	小さな破損礫で構成。赤化度は弱い。質の良い尾鈴山酸性岩を使用。		Ⅱa
SI23	E6	黒斑混じる褐色土上の褐色土中。SI34 と同じ。	2.3	1.4	－	56,147	段丘礫をはいでその中身を加工して使用。赤化度は強い		Ⅱb
SI34	D6	SI23 と同じ	1.3	0.9	－	24,371	段丘礫をはいでその中身を加工して使用。赤化度は強い		Ⅱb
SI3	D4	AT を含む黄褐色土の上部	1.0	1.4	－	7,710	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。	トレンチャーで破壊されている	Ⅲ
SI4	E3	AT の堆積が薄い箇所の黒褐色土上	4.3	3.0	－	38,649	少し大きめの礫が散漫に散らばる。赤化度は強い。		Ⅲ
SI5	E4	AT 上の黒褐色土中	1.2	1.9	－	4,040	板状にわれた礫使用。赤化度は強い		Ⅲ
SI10	D5	AT 流れ込みそう上の褐色土中。	1.9	0.9	－	13,359	小さな破損礫を使用。赤化度は強い。		Ⅲ
SI12	F4	AT 上の黒褐色土中。	3.2	2.4	－	8,892	小さな破損礫で構成されていた。赤化度は強い		Ⅲ
SI39	D6	Ⅴ層下部で検出	1.0	0.7	－	4,612	小さな破損礫を使用。赤化度は強い		Ⅲ



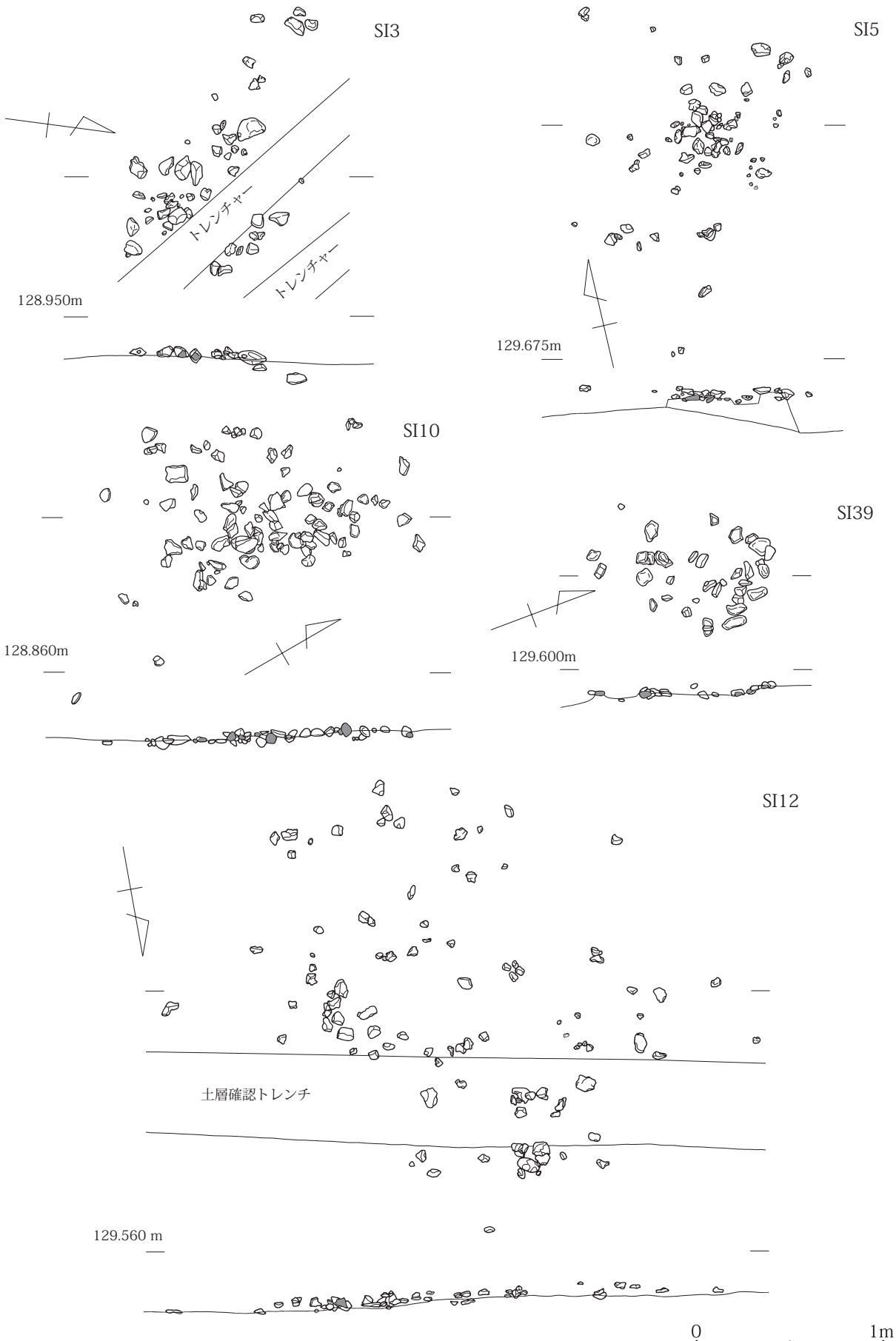
第 19 図　Ⅰ類礫群 1（1/30）



第 20 図　Ⅰ類礫群 2（1/30）



第 21 図　Ⅱ・Ⅲ類礫群（1/30）

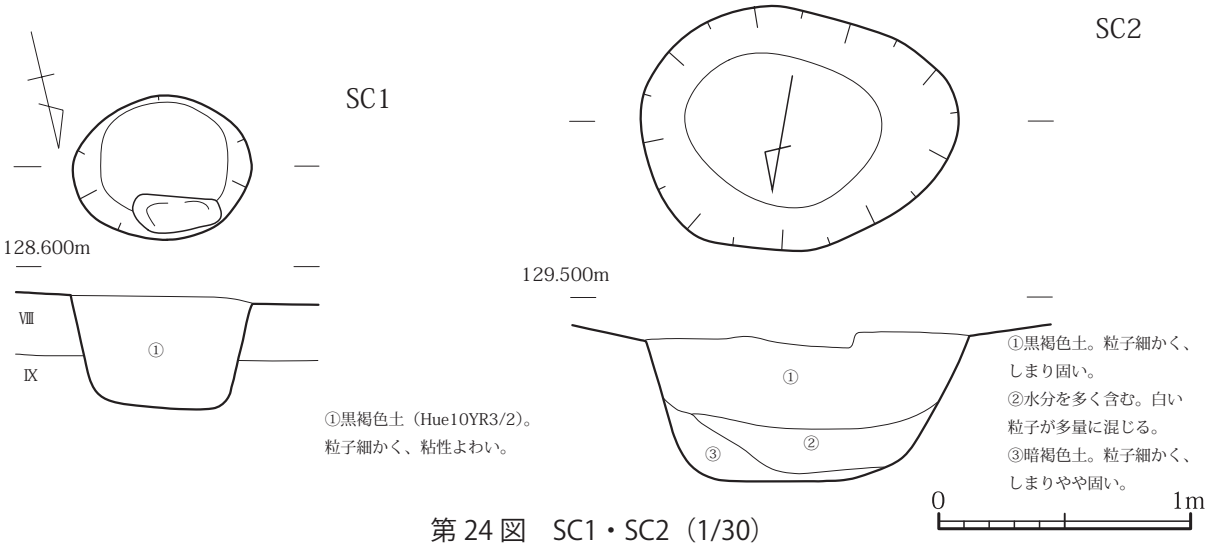


第 22 図　Ⅲ類礫群（1/30）

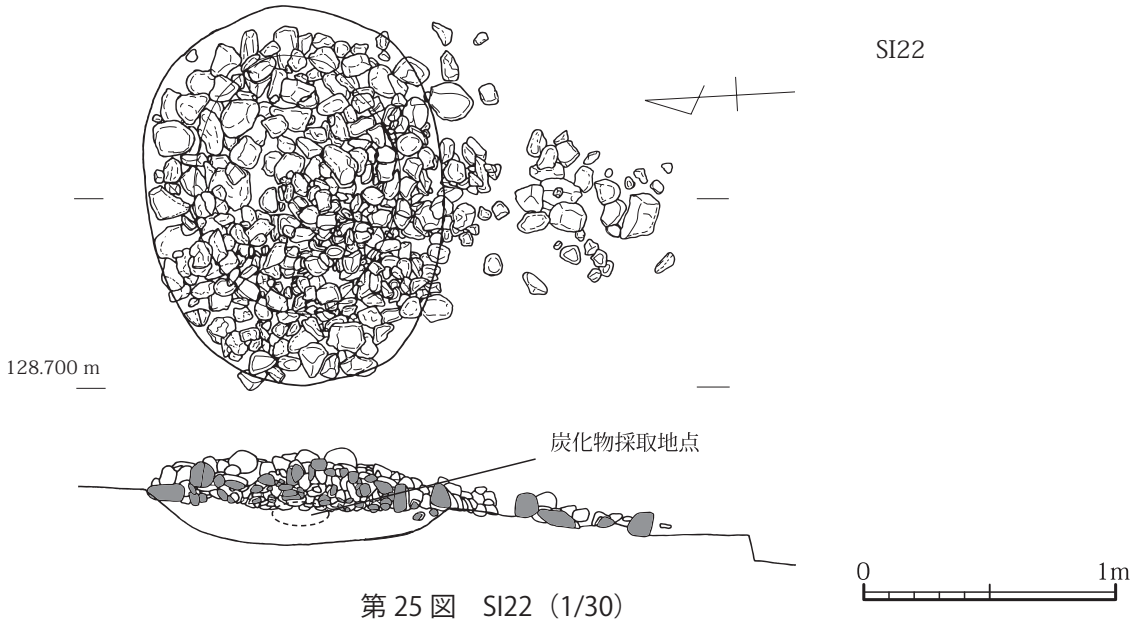
第 23 図　Ⅳ類礫群（1/30）

第４表　Ⅳ類、その他の礫群観察表

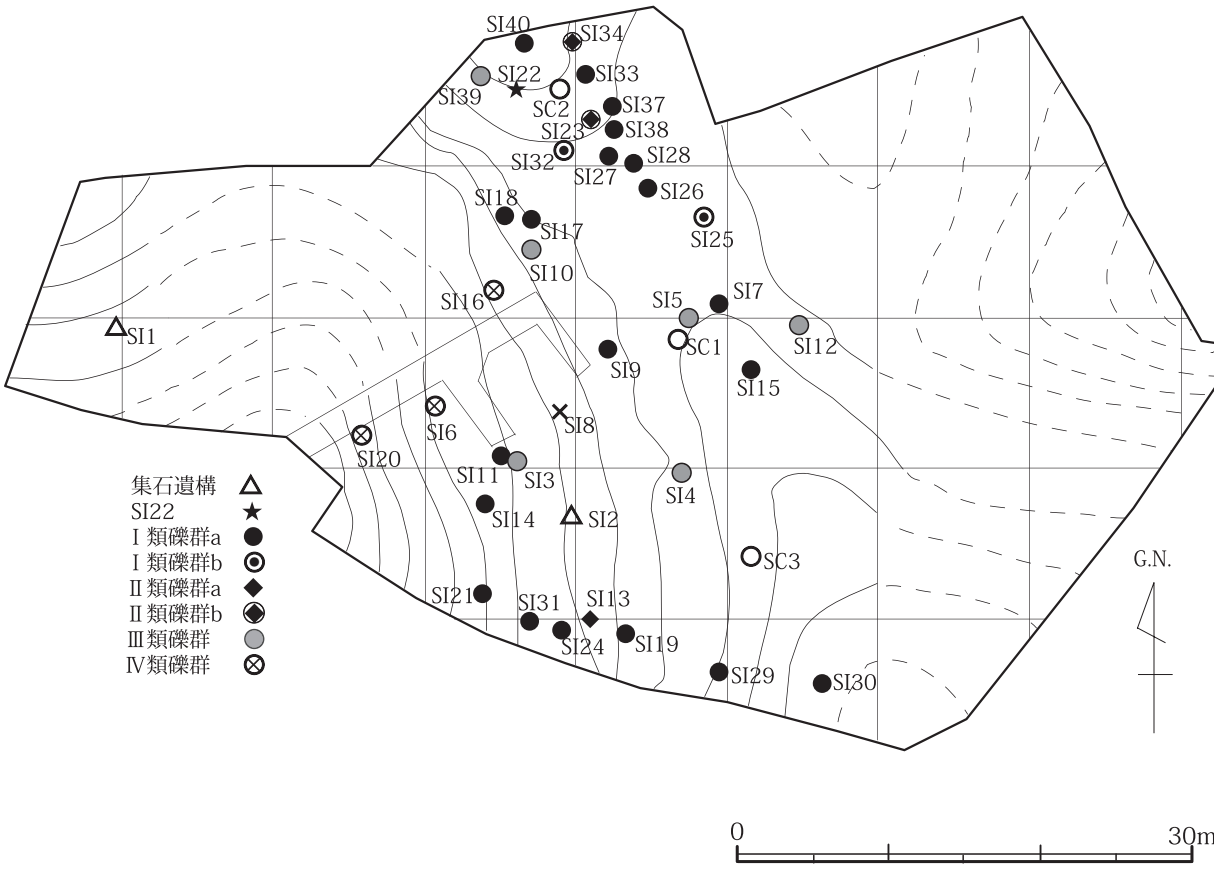
遺構名	Gr.	検出層	最大長（m）	最大幅（m）	掘込（m）	礫重量（g）	礫の状態	その他の所見	類
SI6	D4	AT の二次堆積の黄褐色土中	0.9	1.0	―	3,658	小形の破損礫で構成。赤化度は強い		Ⅳ
SI16	D5	AT の二次堆積の褐色土中			―	9,814	小形の破損礫で構成。	点データで記録。	Ⅳ
SI20	C4	AT の二次堆積黄褐色土中	2.2	1.7	―	7,874	小形の破損礫で構成。赤化度は強い		Ⅳ
SI8	D4	黒褐色土の堆積した窪地			―	非計測	赤化のみられない人頭大の分割礫	落ち込みの可能性。	
SI22	D6	Ⅳ層中。上部は K-Ah は消失	2.1	1.5	0.25	175,406	段丘礫に復元できた。非常に強い赤化度	炭化物。黒色埋土。	



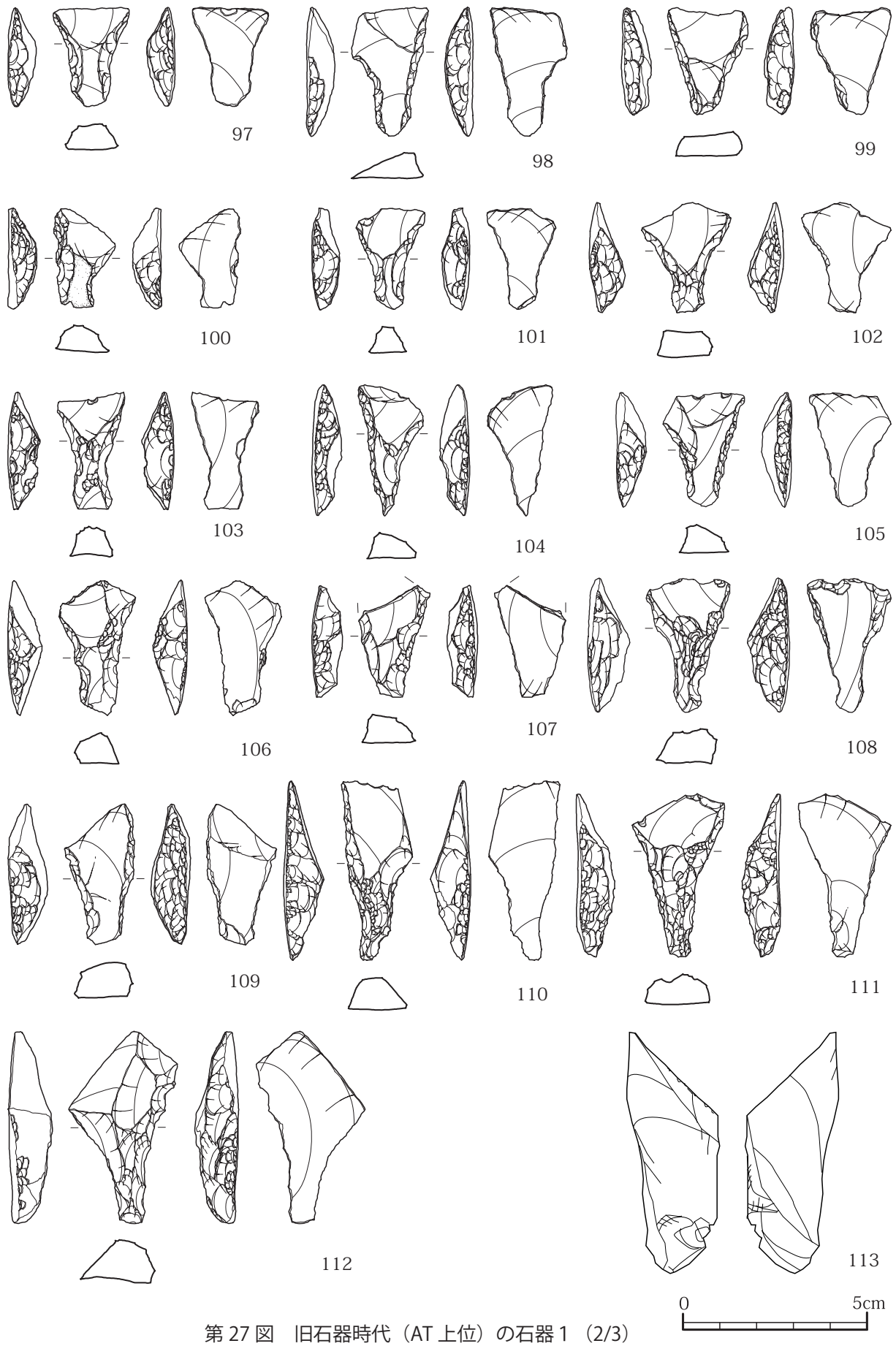
第 24 図　SC1・SC2（1/30）



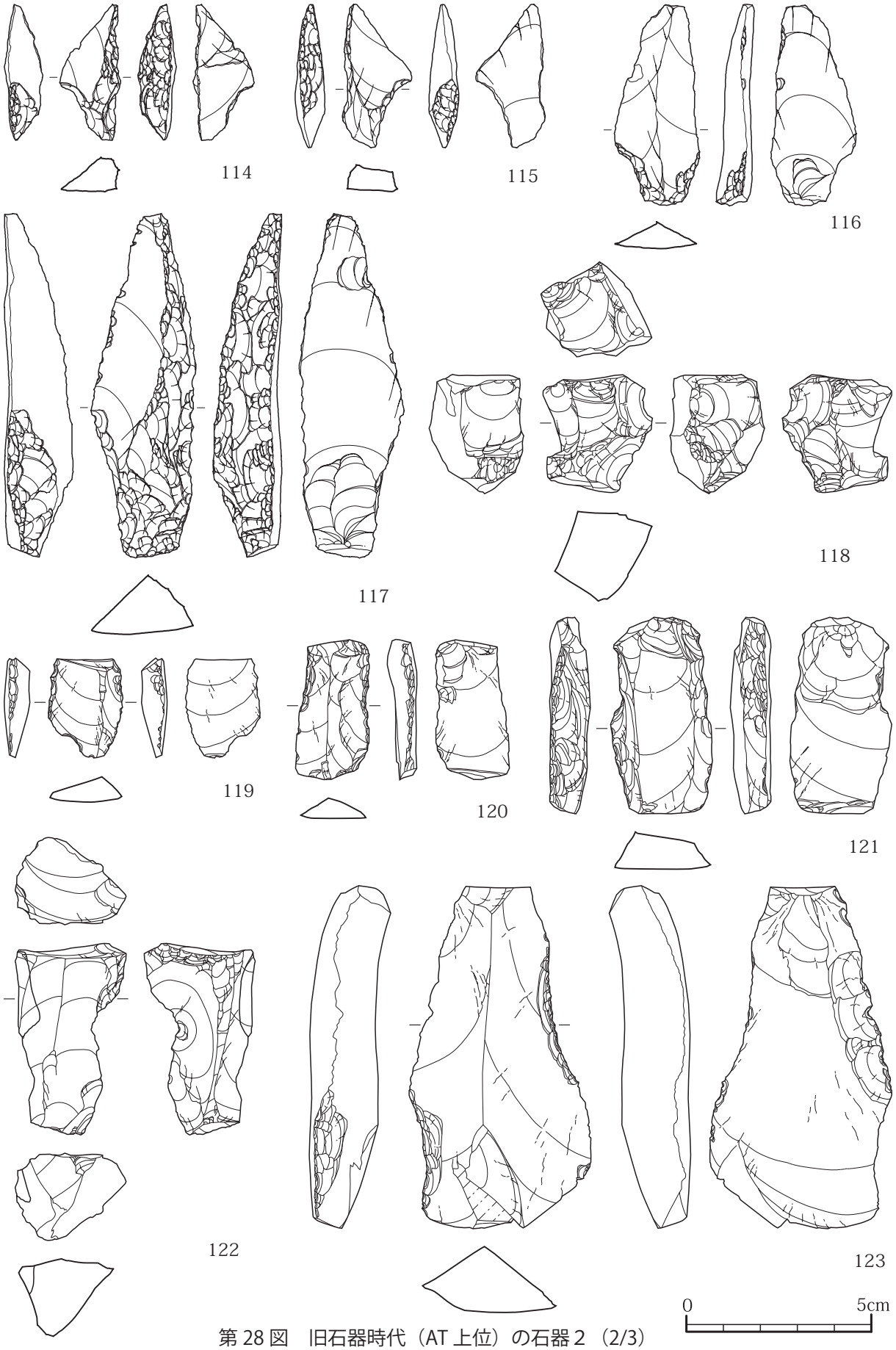
第 25 図　SI22（1/30）



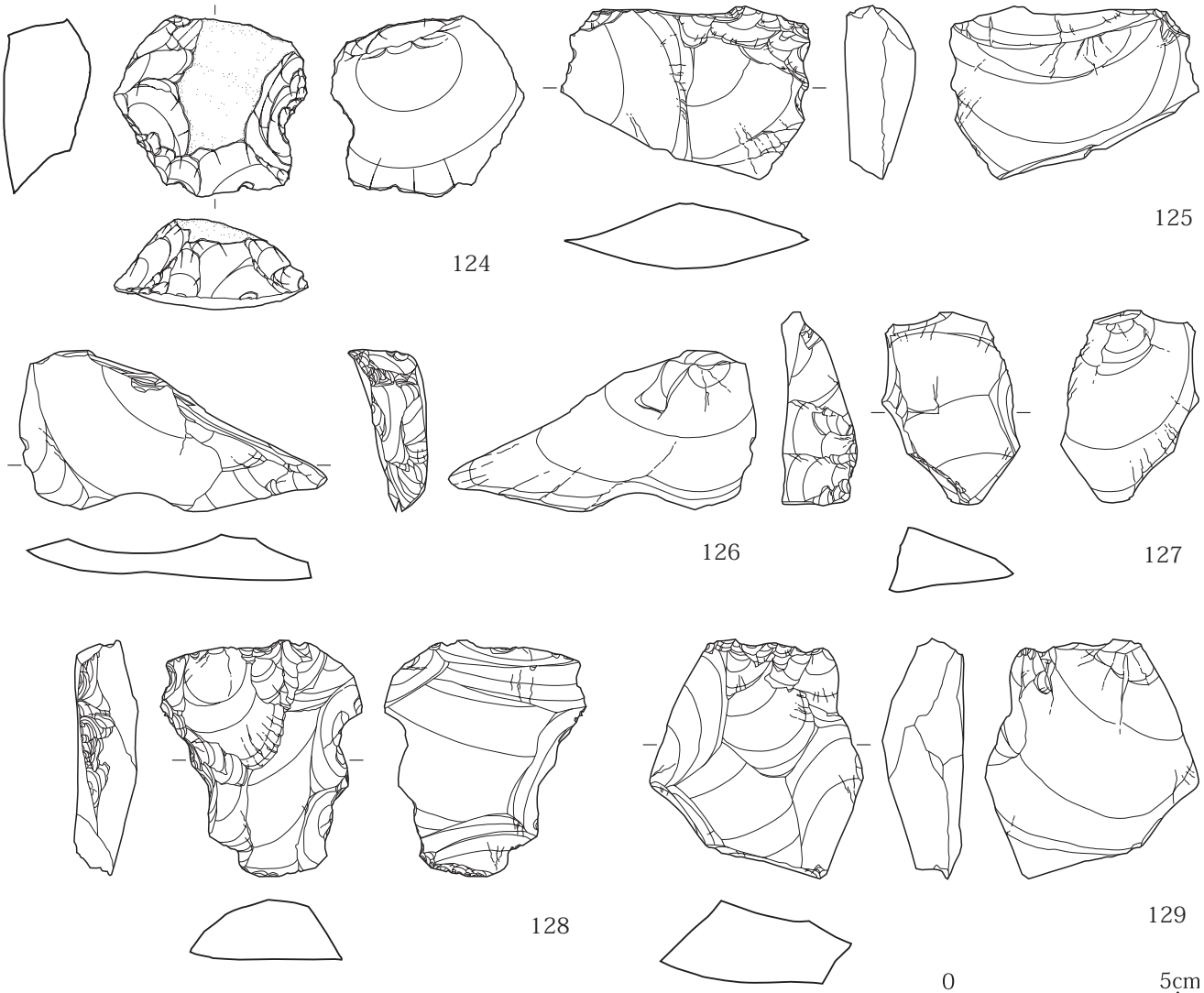
第 26 図　AT 上位遺構配置図（1/500）



第 27 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 1 （2/3）



第 28 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 2 （2/3）



第 29 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 3 （2/3）

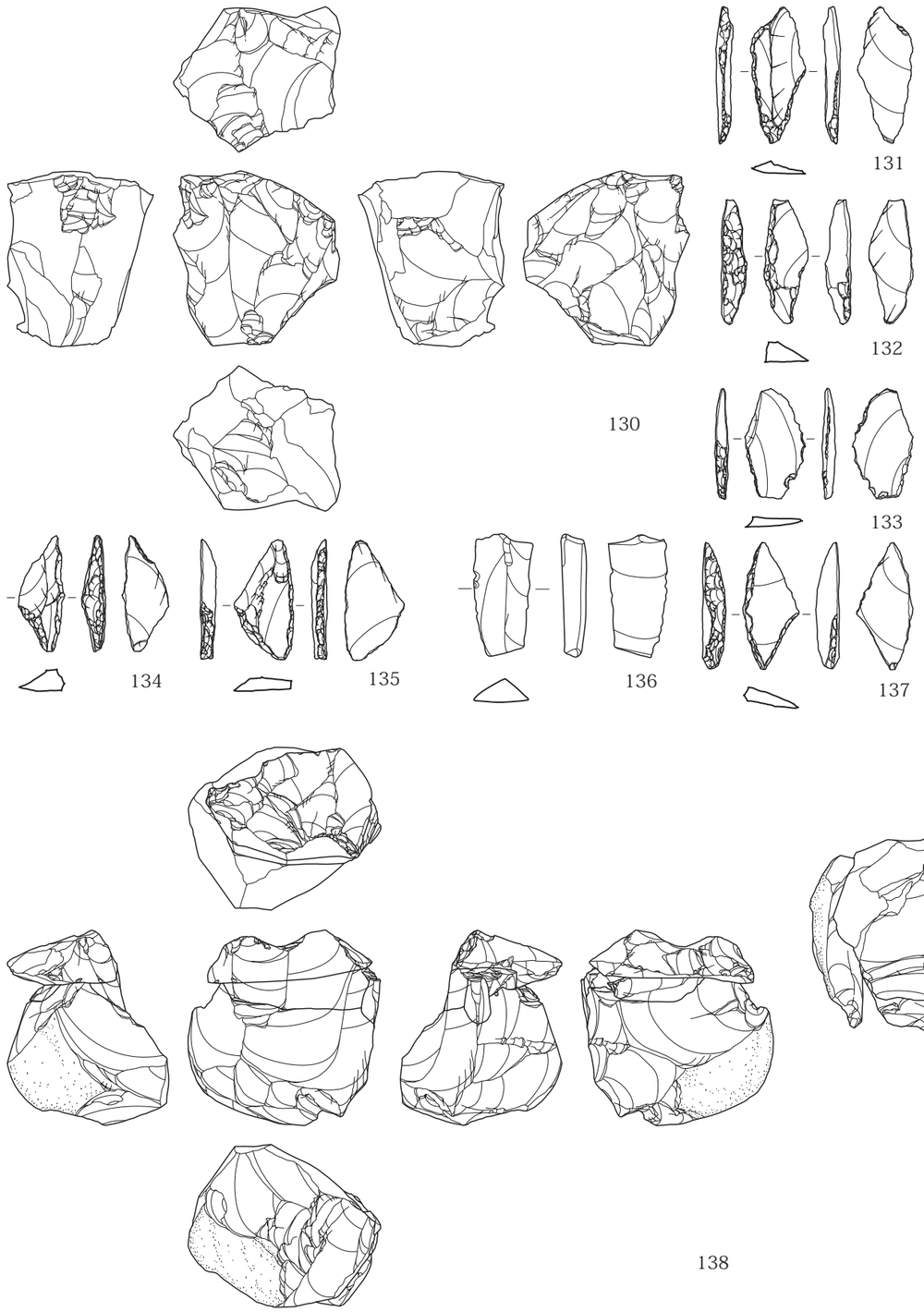
がある。これは、直径約 1.5 m で深さ約 25㎝の掘込みを有し、上部に礫が盛り上がる様に密集している。その規模と形態からは、通常集石遺構と判断されるであろう。

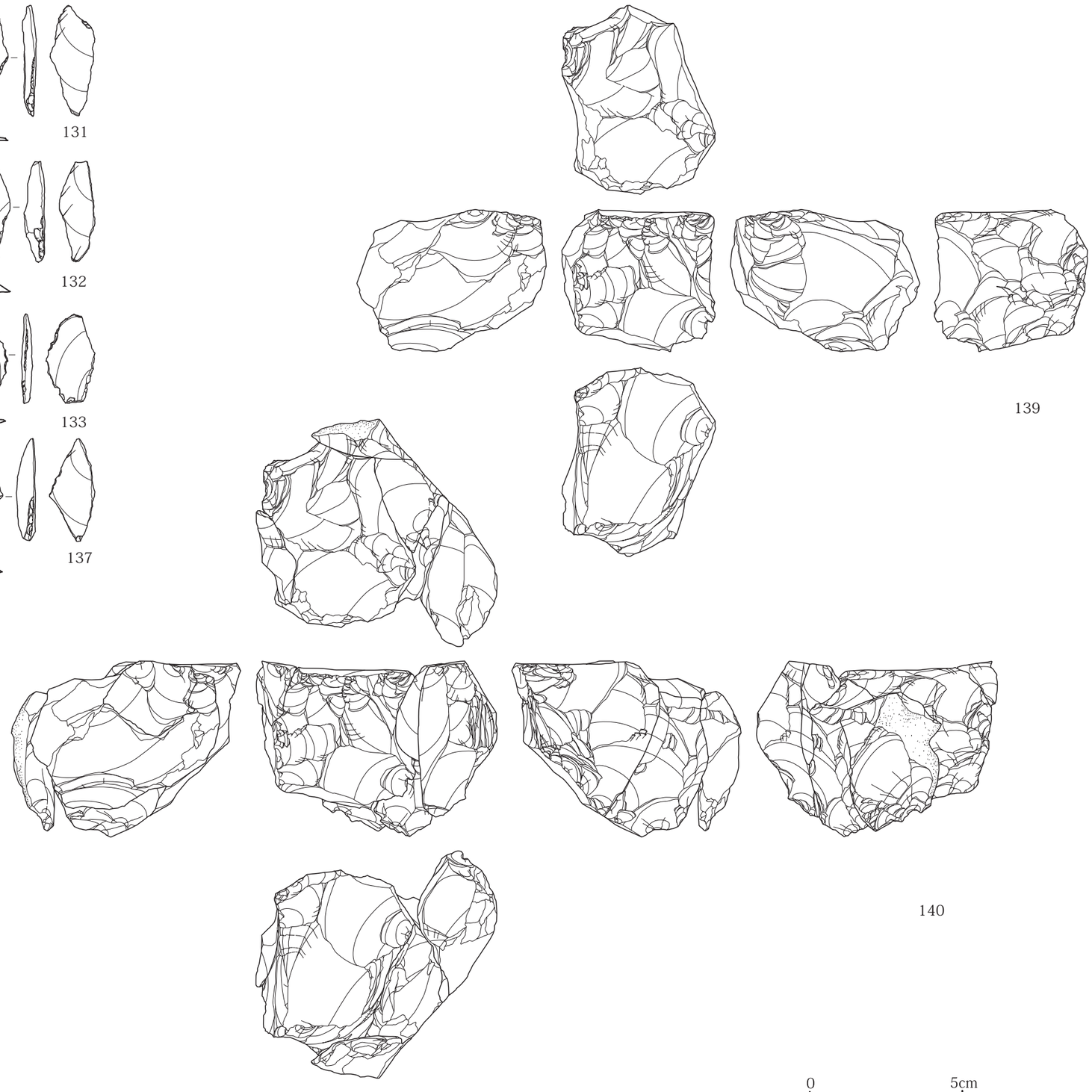
しかし、掘込み内で出土した炭化物を AMS による年代測定にかけたところ、補正 14C 年代 14240 ± 60 年 BP、暦年代 BC15120 という値がでた。これは細石刃期に比定される年代である。周囲からは出土した遺物は、旧石器であった。炭化物は直径 1 ㎝程度で分析資料としては、決して大きいとはいえない。

第 53 図は調査区内の礫重量の分布を表している。礫群が存在する周辺に礫が多く認められる。そのため、周囲の礫と図化を行おうと思う礫群との線引きにゆれが生じた。特に D4・E4Gr. では、二次的に流れたと考えられる礫も多く存在した。逆に、D6・E6Gr. は周辺に礫が多く存在するものの、Ⅰ・Ⅱ類礫群のような局所に密集した礫群が多かったため、判断が容易であった。D5・E5Gr. はその中間の様相を呈していた。A4Gr. の周辺礫は明らかに二次的に流れ込んだものと判断できた。

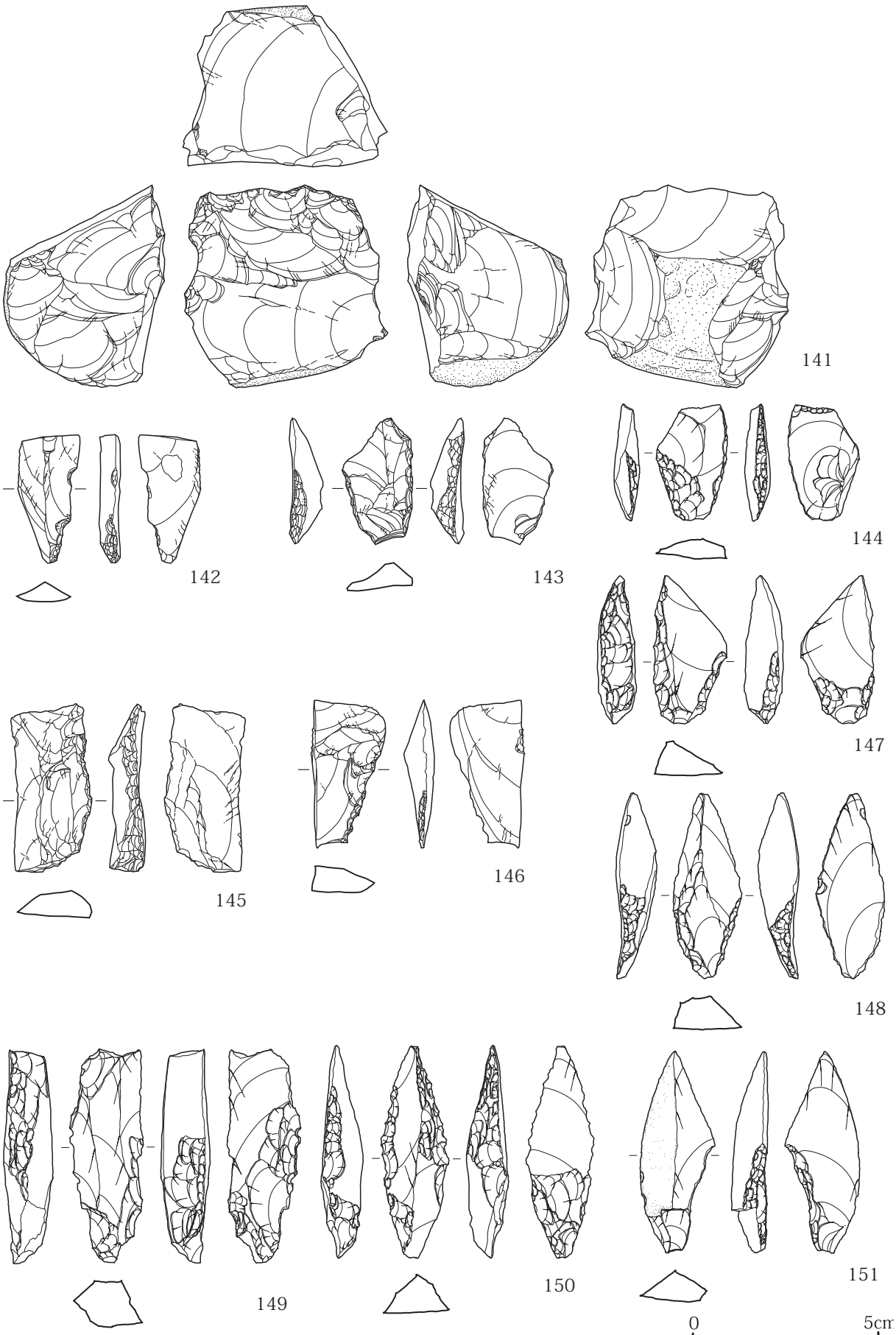
土坑

SC2 はⅥ層中で検出された。SC1 はⅦ層上面で認識したが、本来の検出面は SC2 と同じと考えられる。SC2・3 以外にも同様の土坑を確認したが、図化していない。調査中に遺構かどうかの判断を迷ったためである。土坑の性格は不明であるが、近隣の朝倉遺跡（未刊行）でも同様の遺構が出土している。

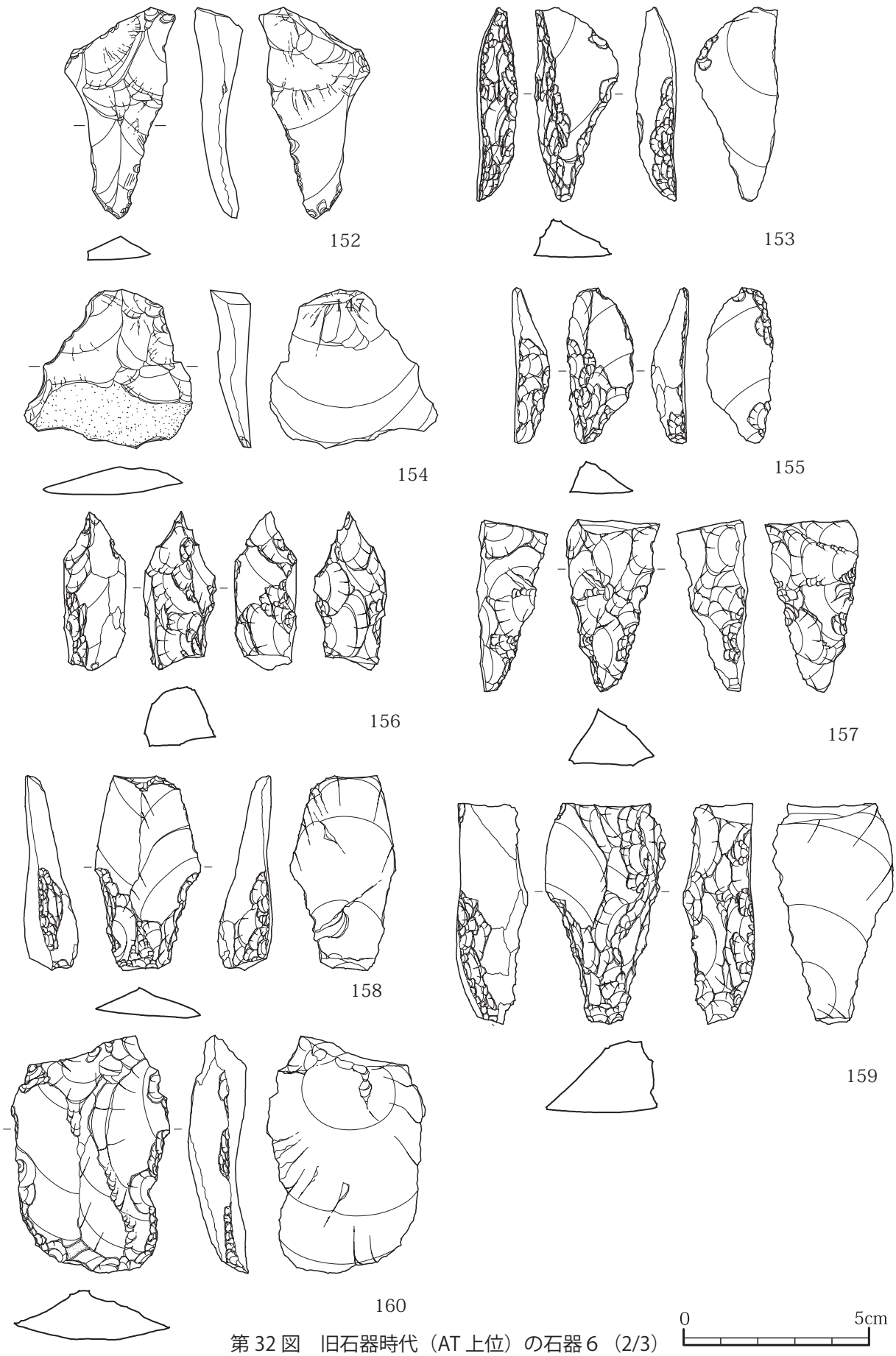




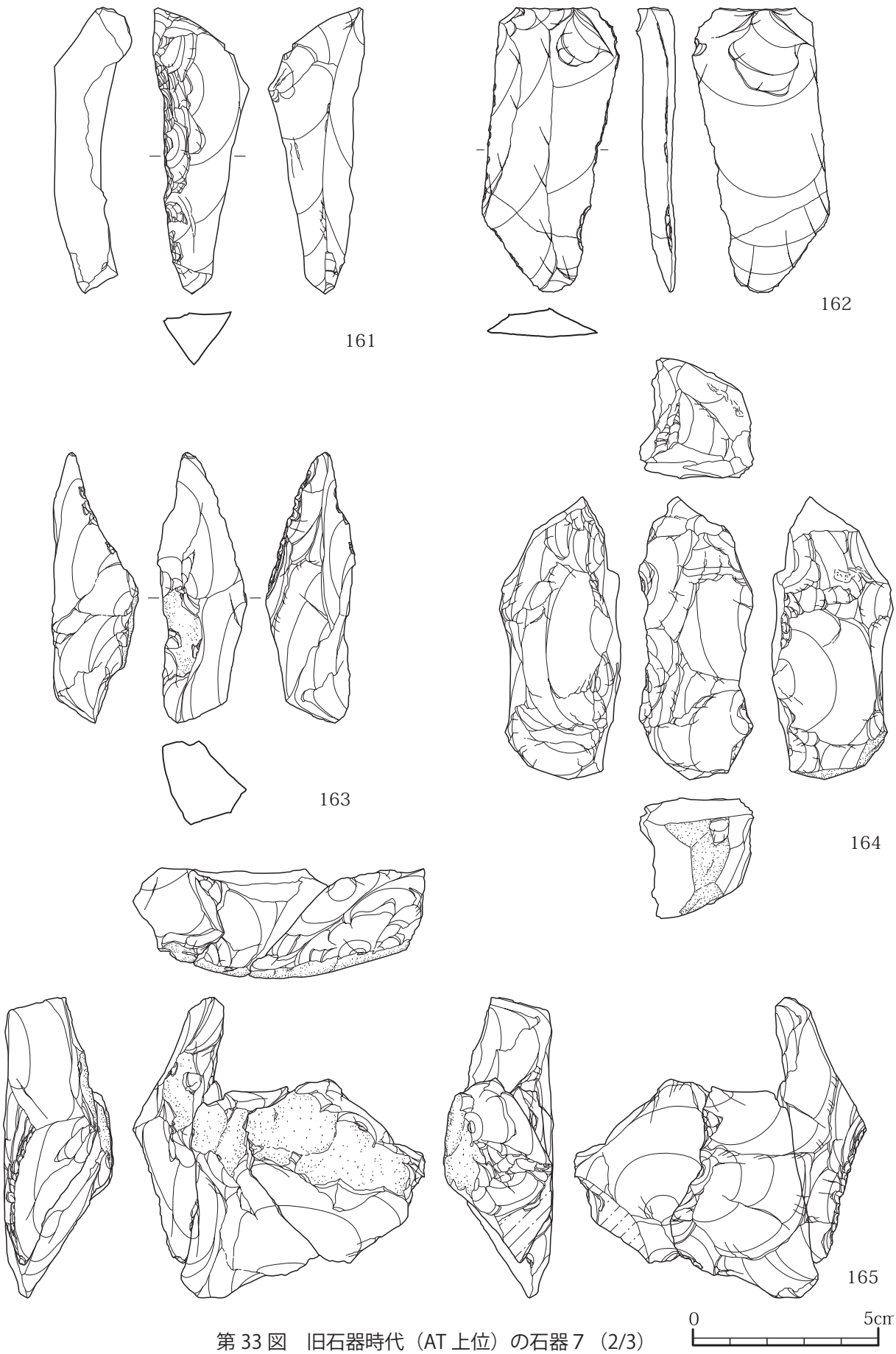
第 30 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 4（2/3）



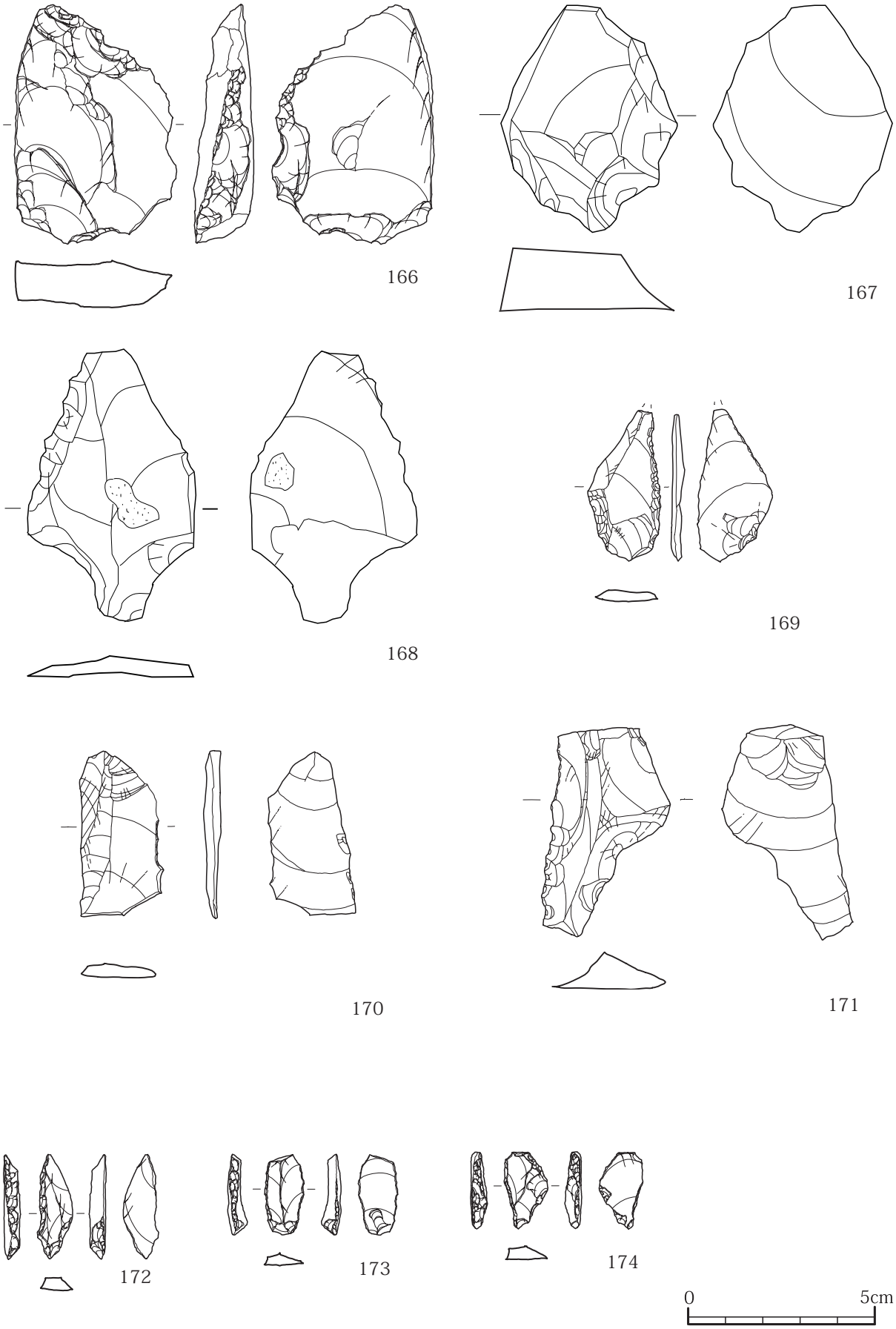
第 31 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 5 （2/3）



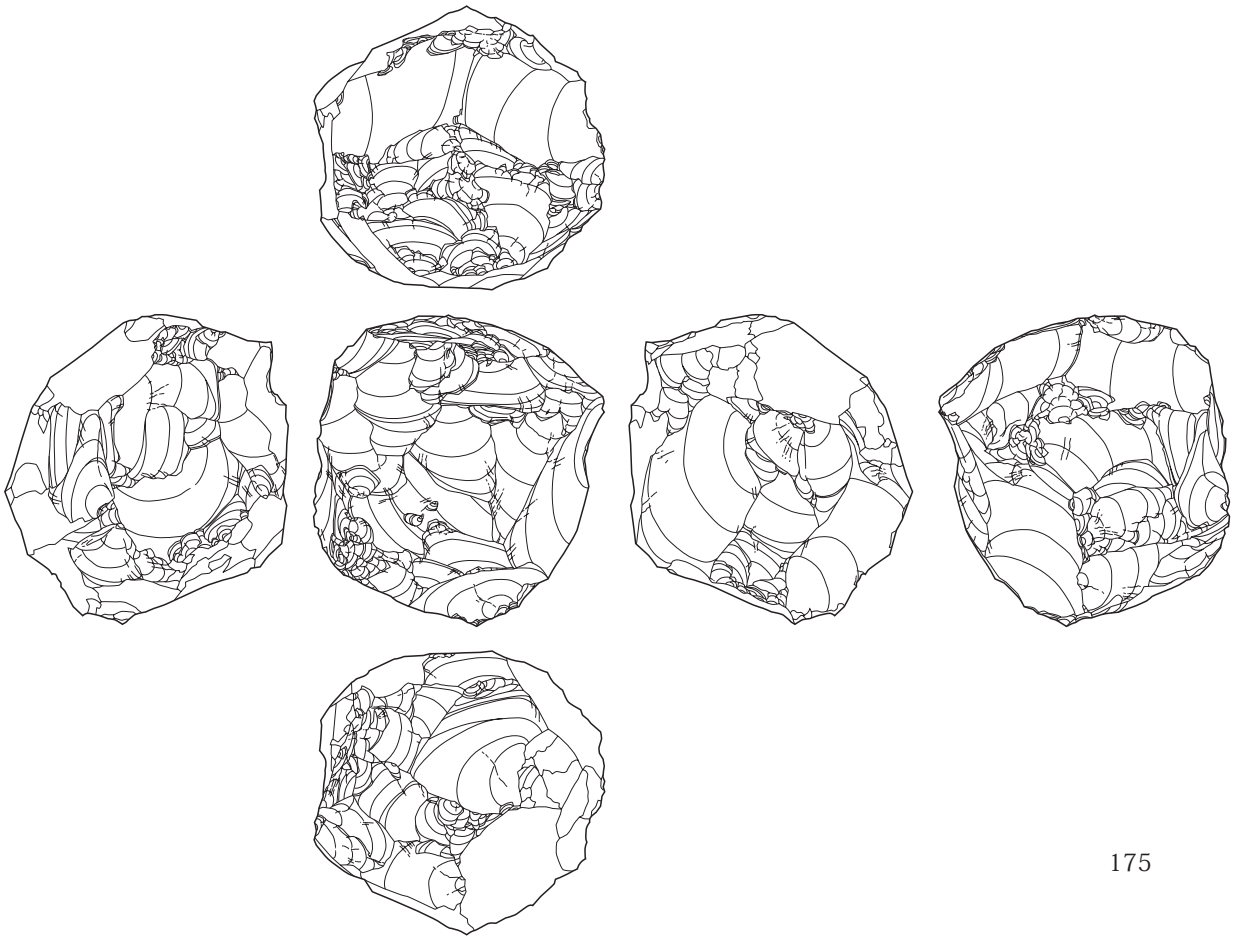
第 32 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 6 （2/3）

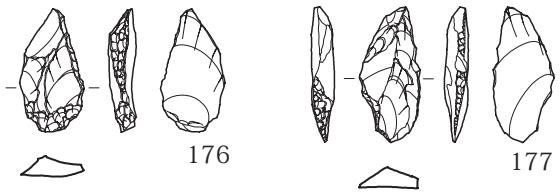


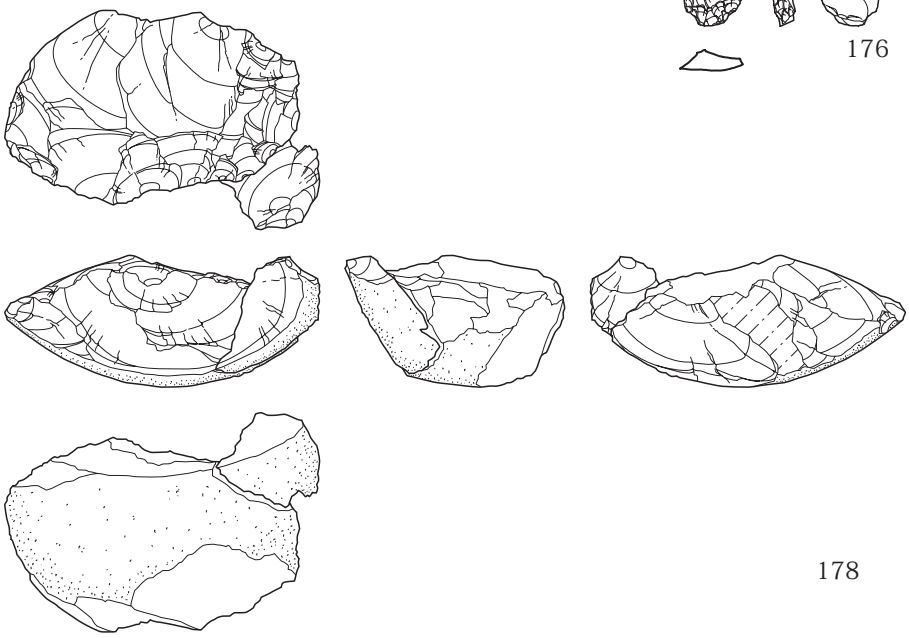
第 33 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 7（2/3）



第 34 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 8（2/3）

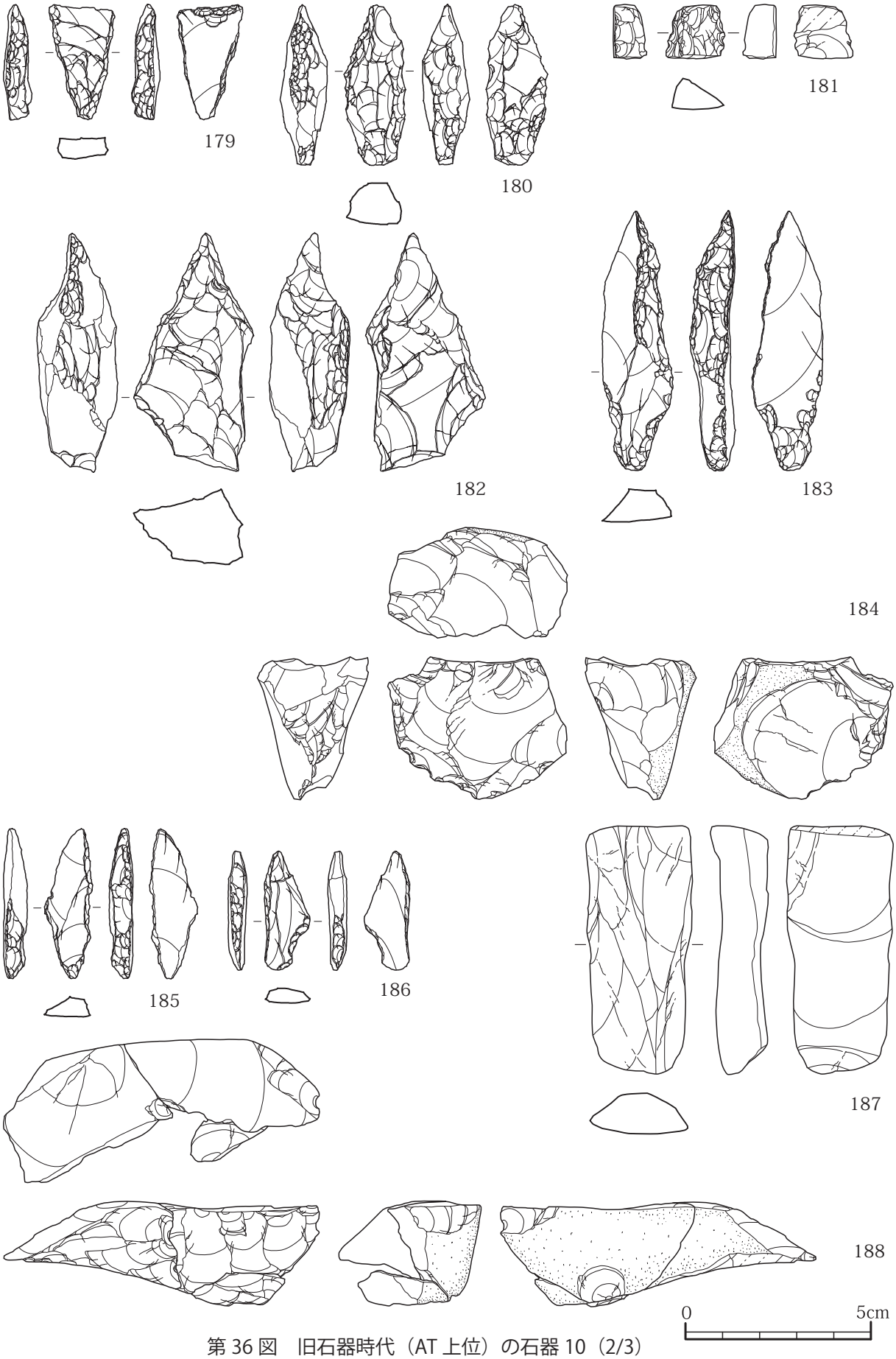




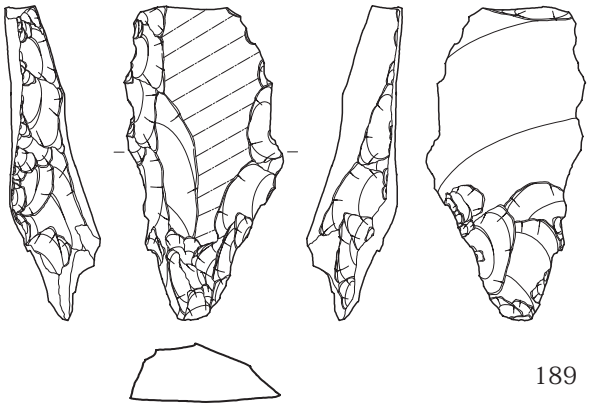


0 5cm

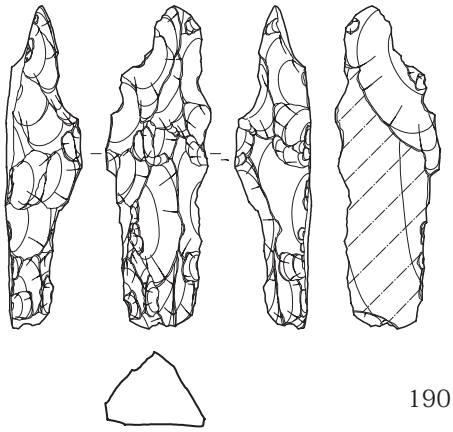
第 35 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 9（2/3）



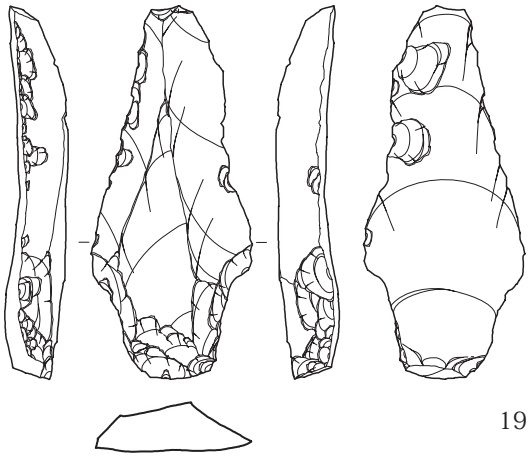
第 36 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 10（2/3）



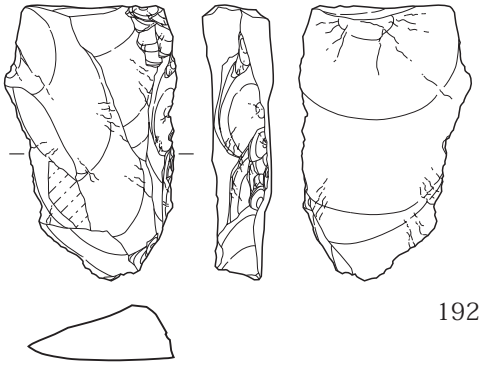
189



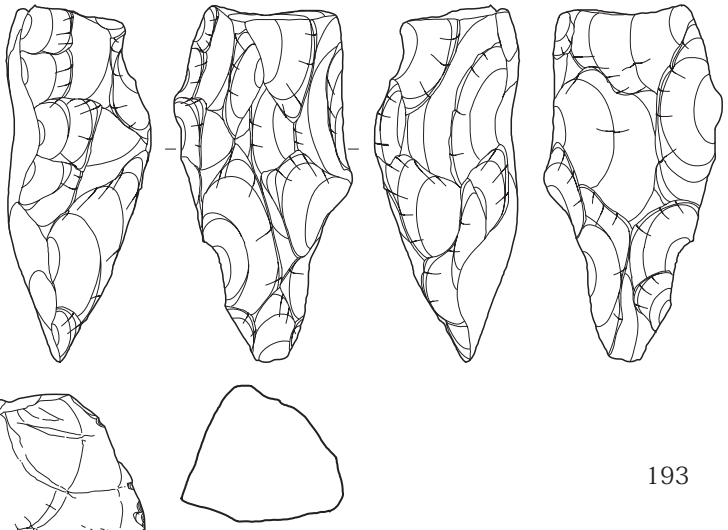
190



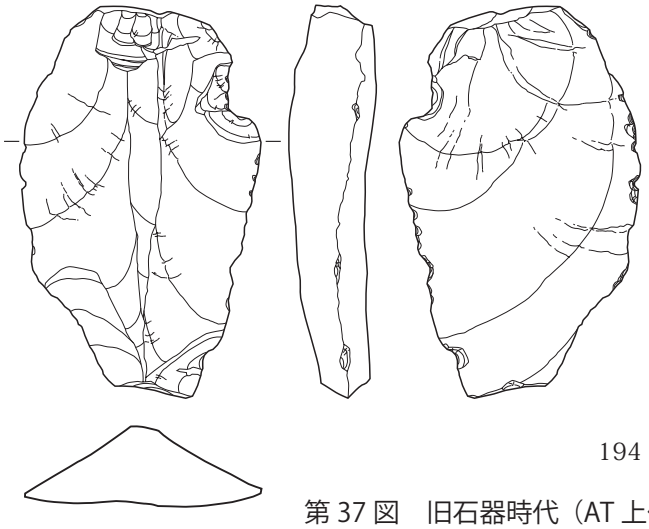
191



192



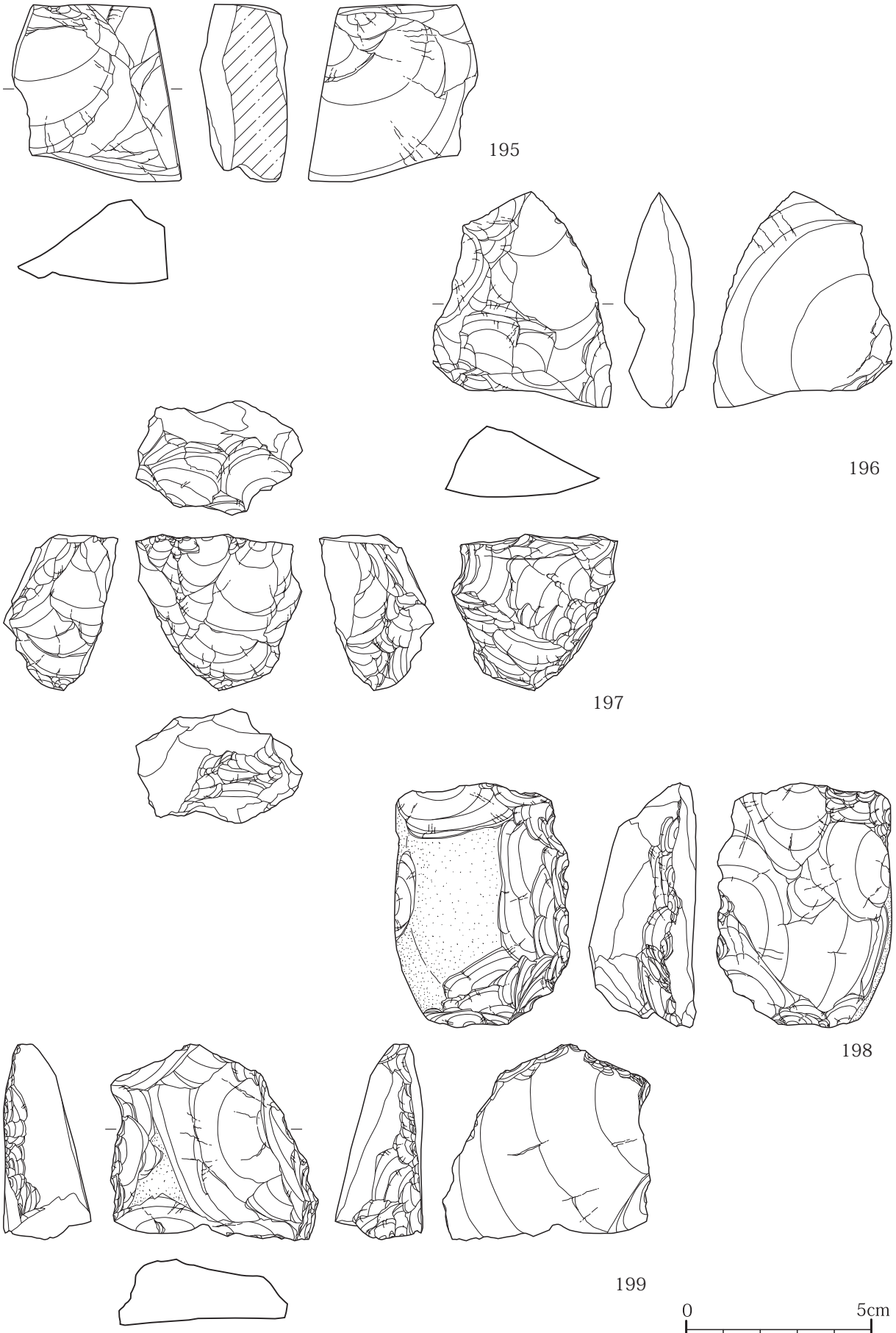
193



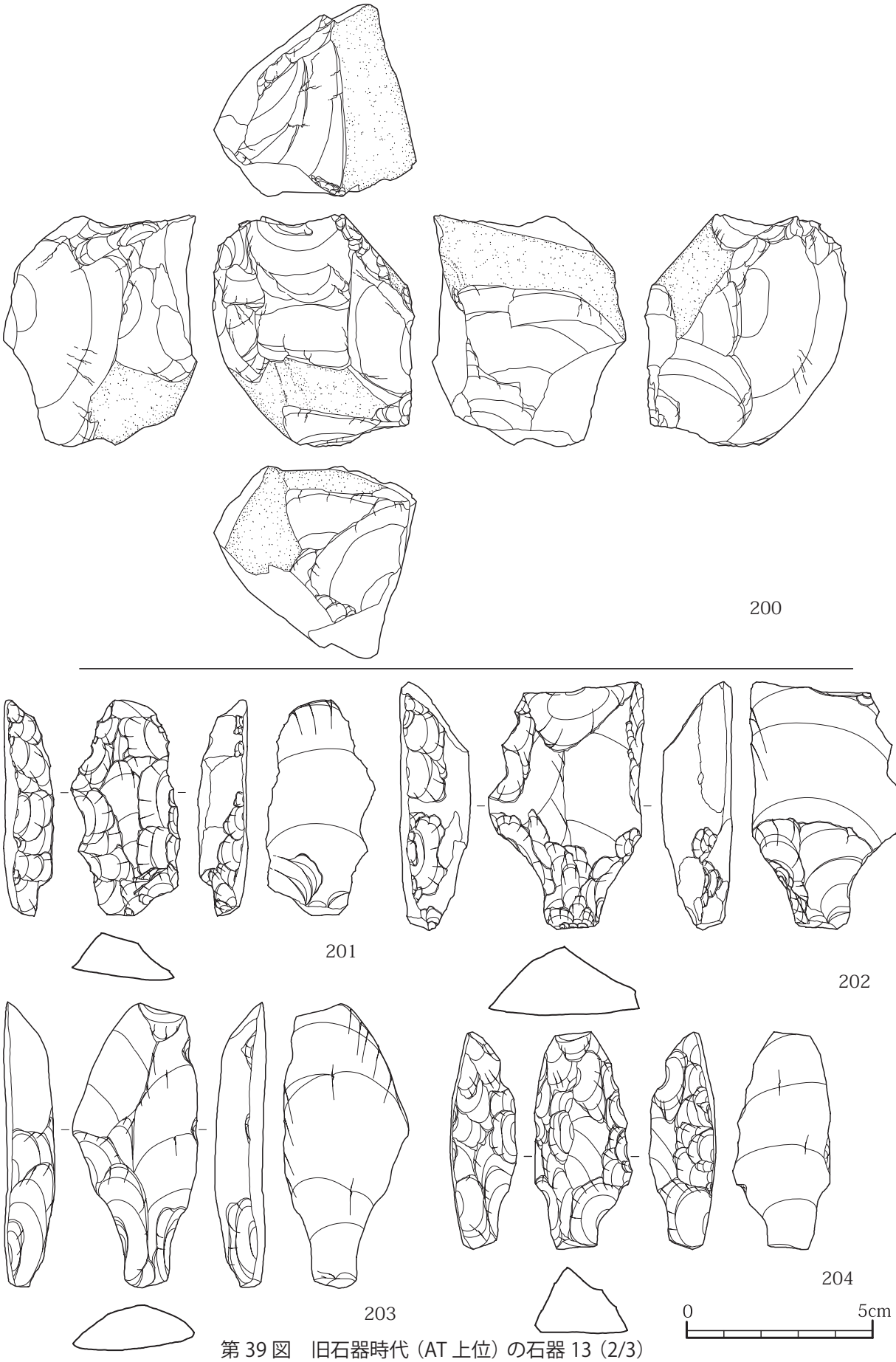
194

0 5cm

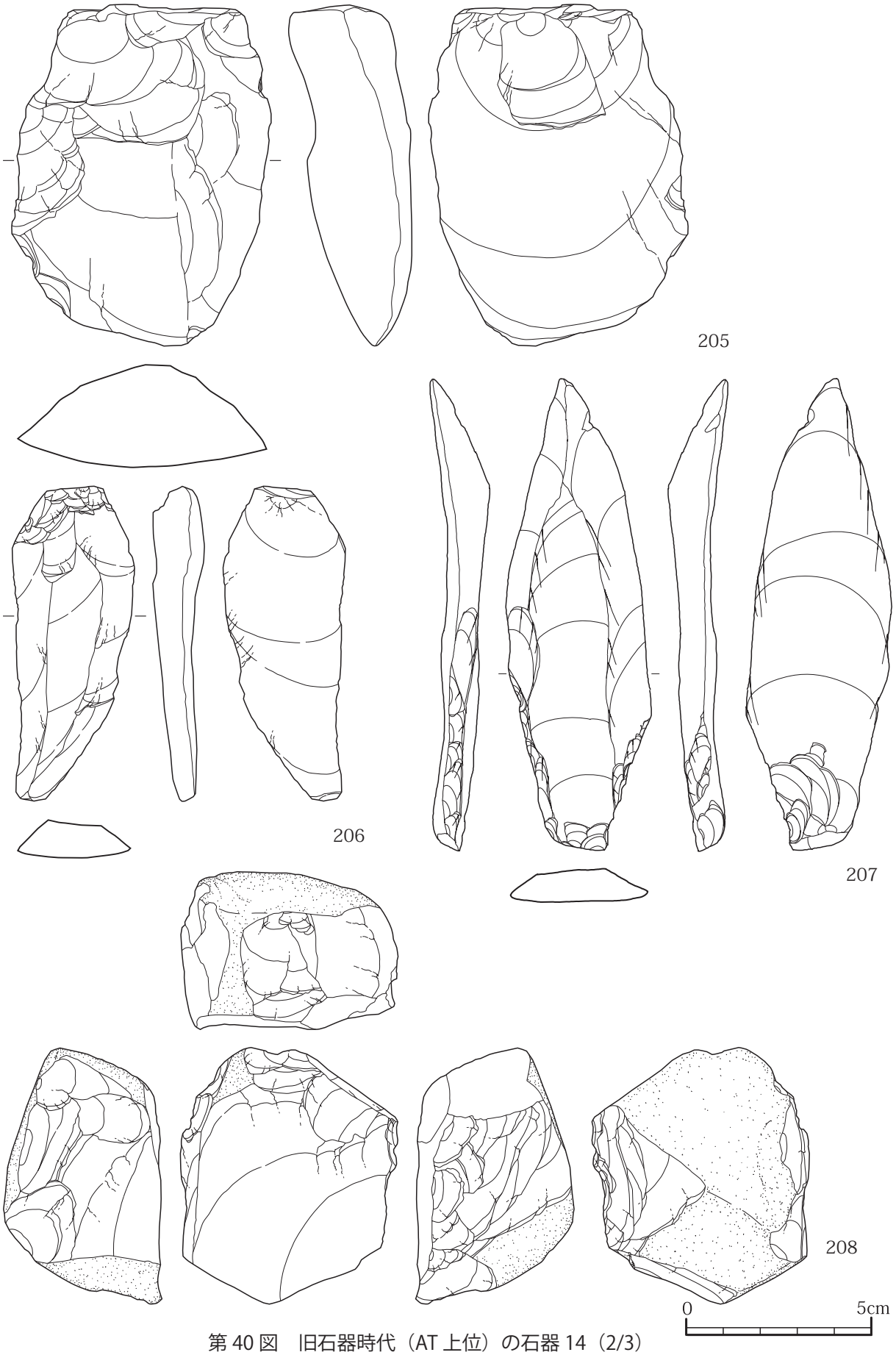
第 37 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 11（2/3）



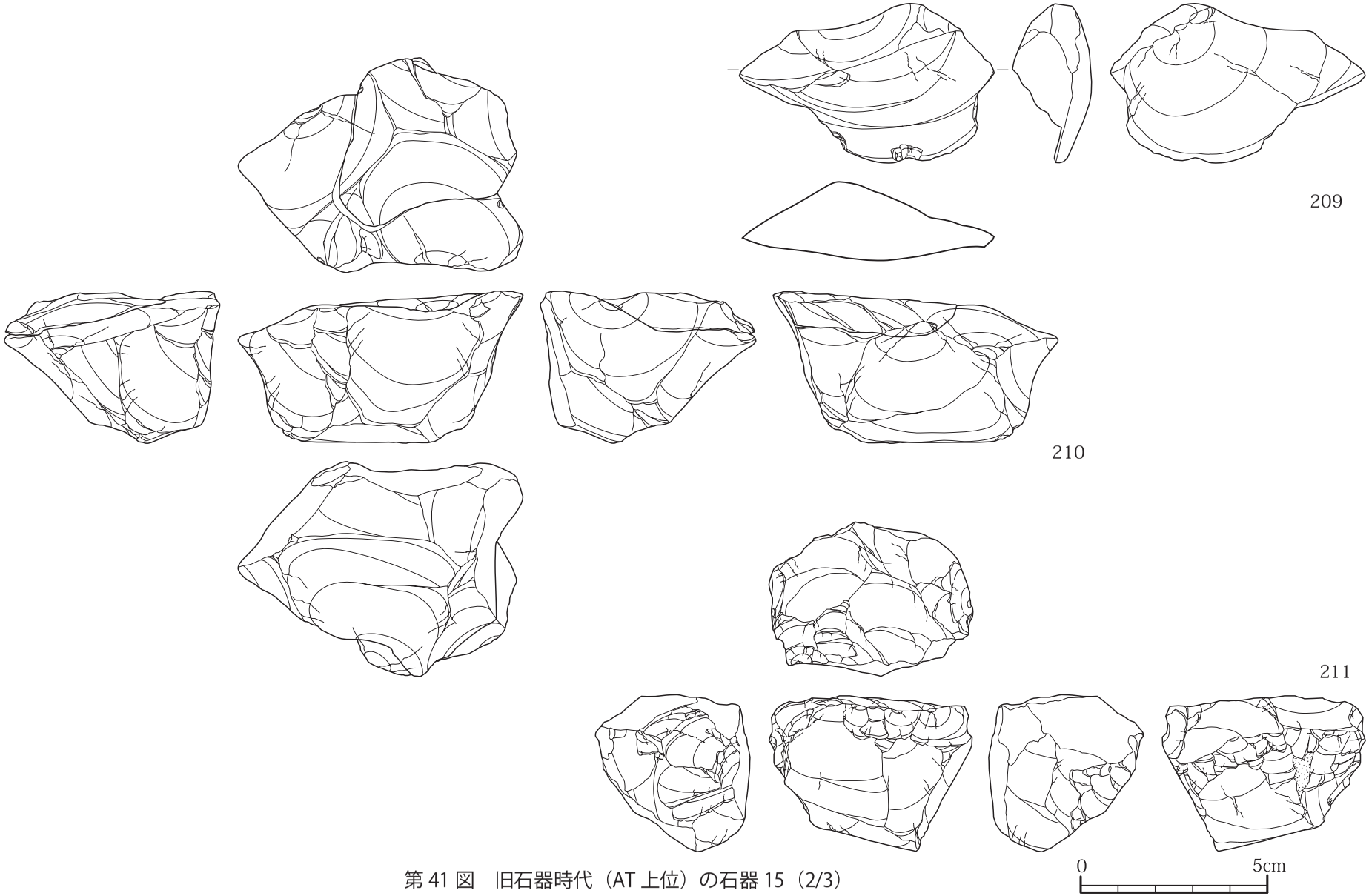
第 38 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 12（2/3）



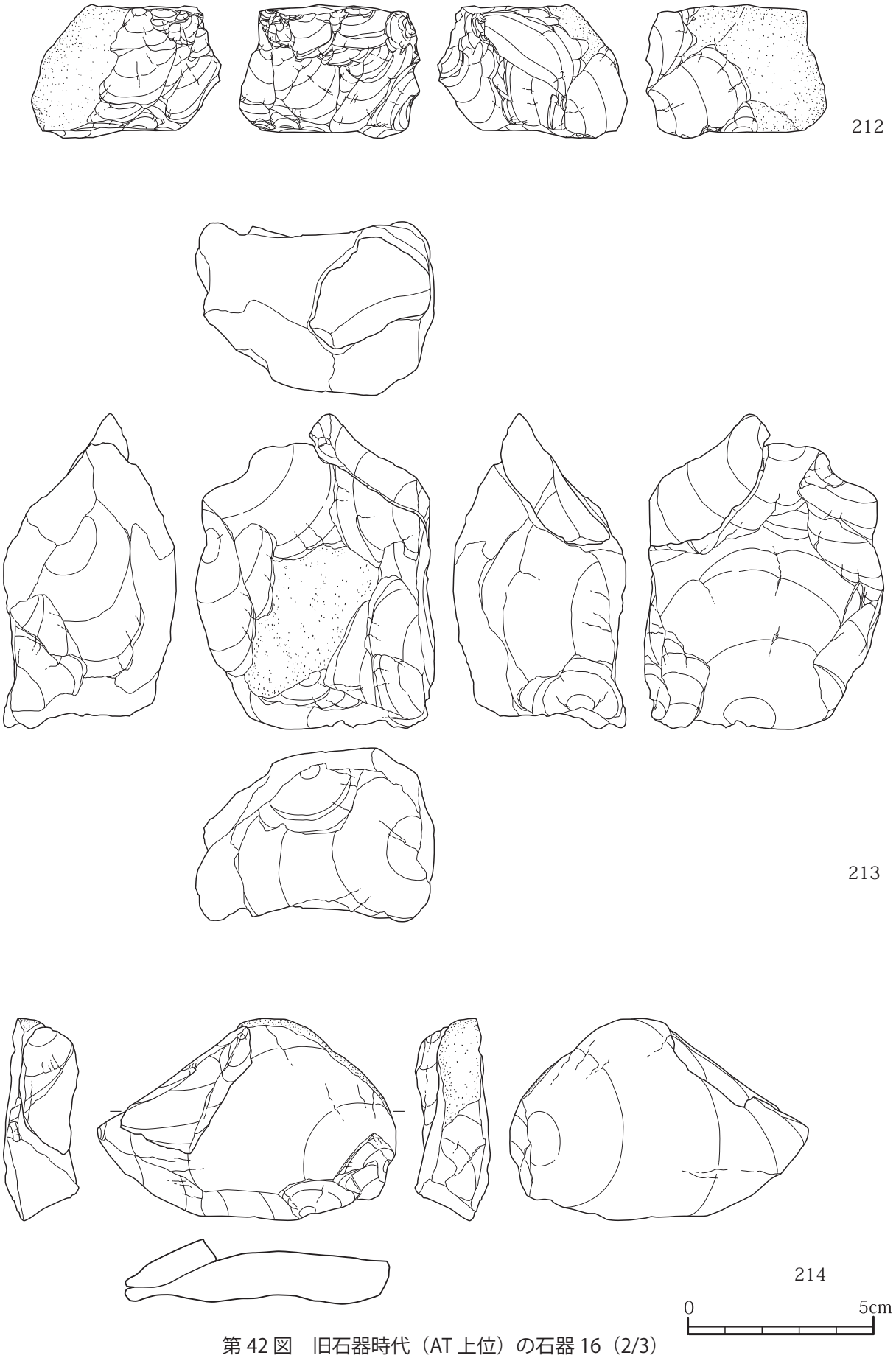
第 39 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 13（2/3）



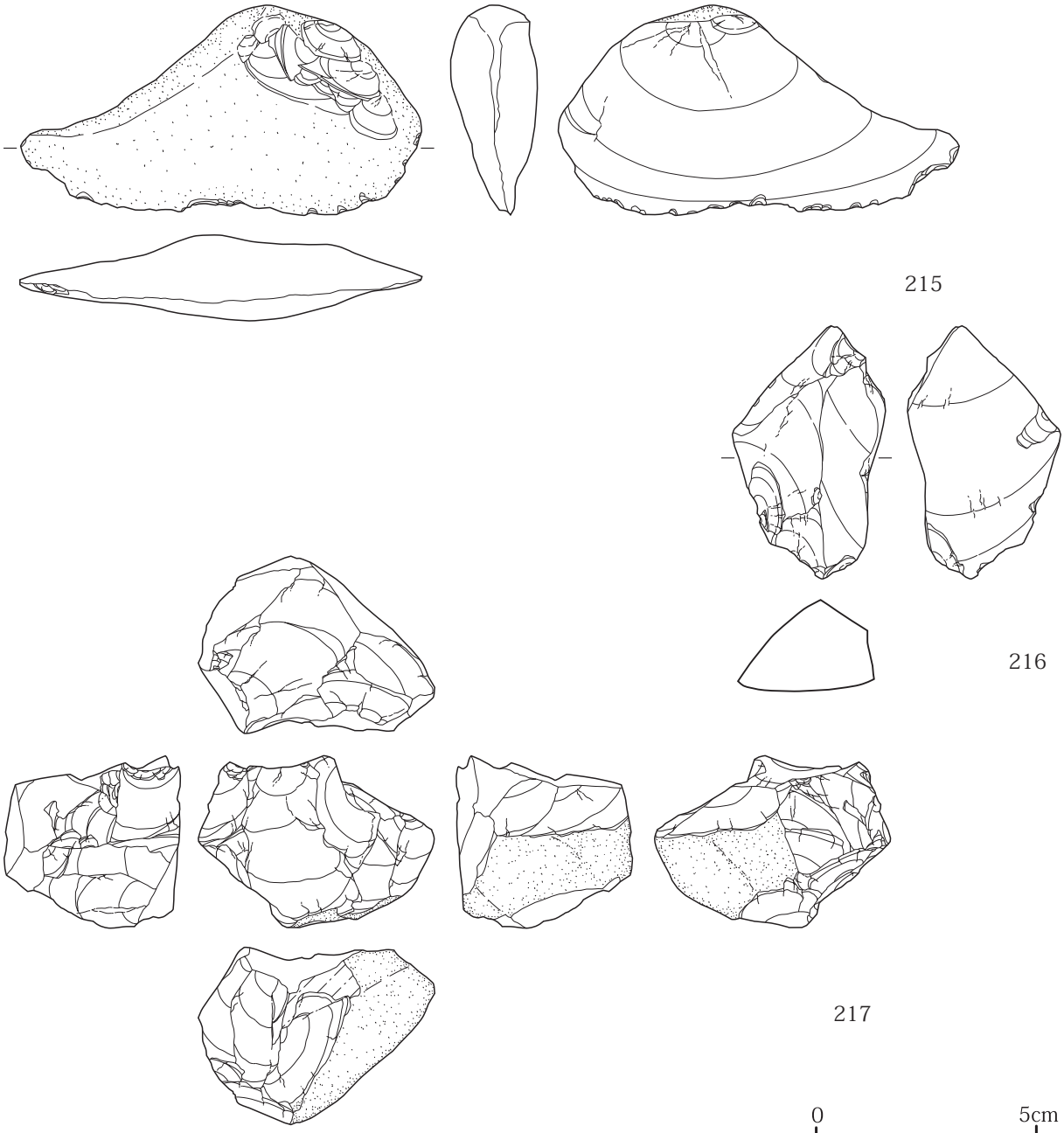
第 40 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 14（2/3）



第 41 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 15（2/3）



第 42 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 16（2/3）



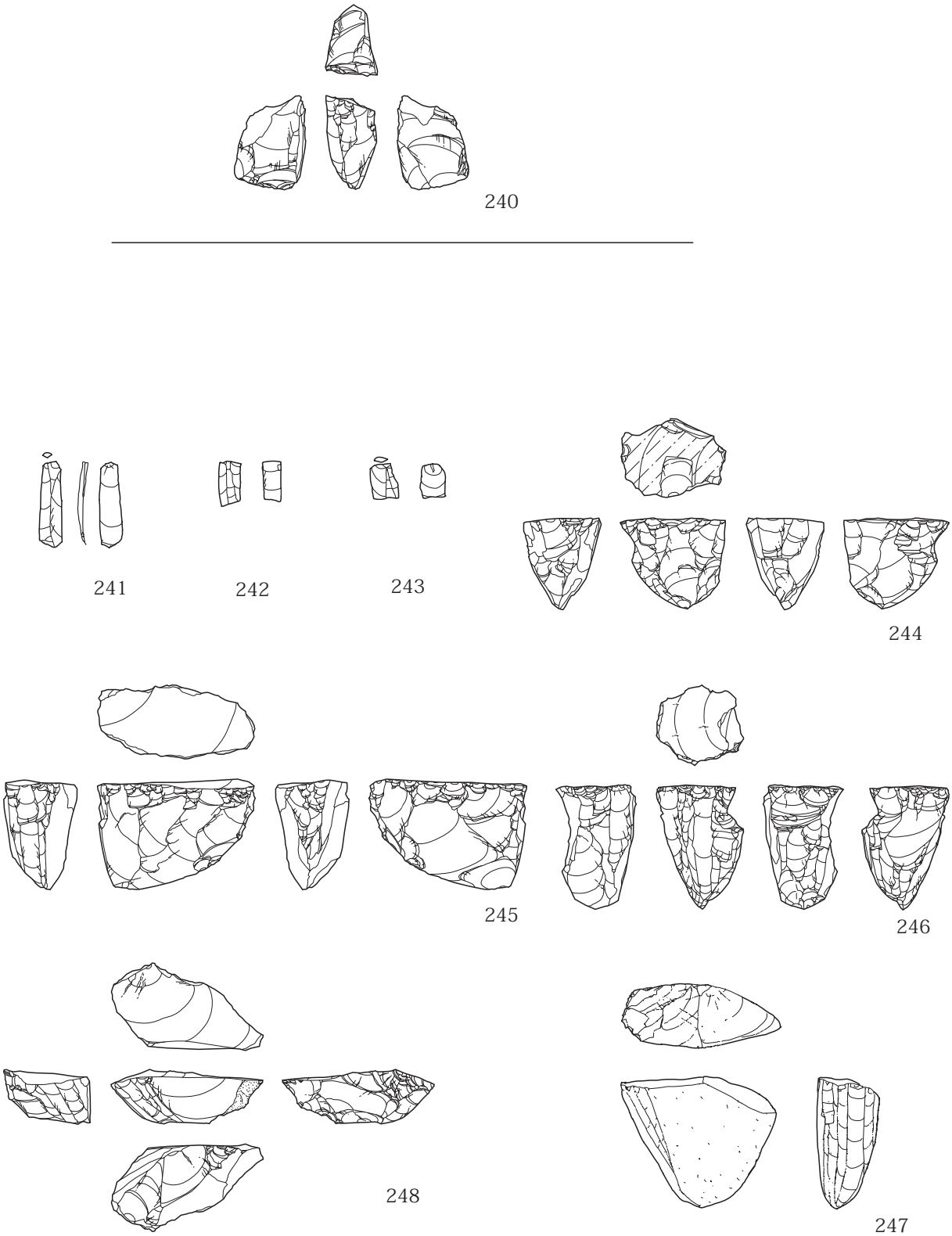
第 43 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 17（2/3）

【遺物】

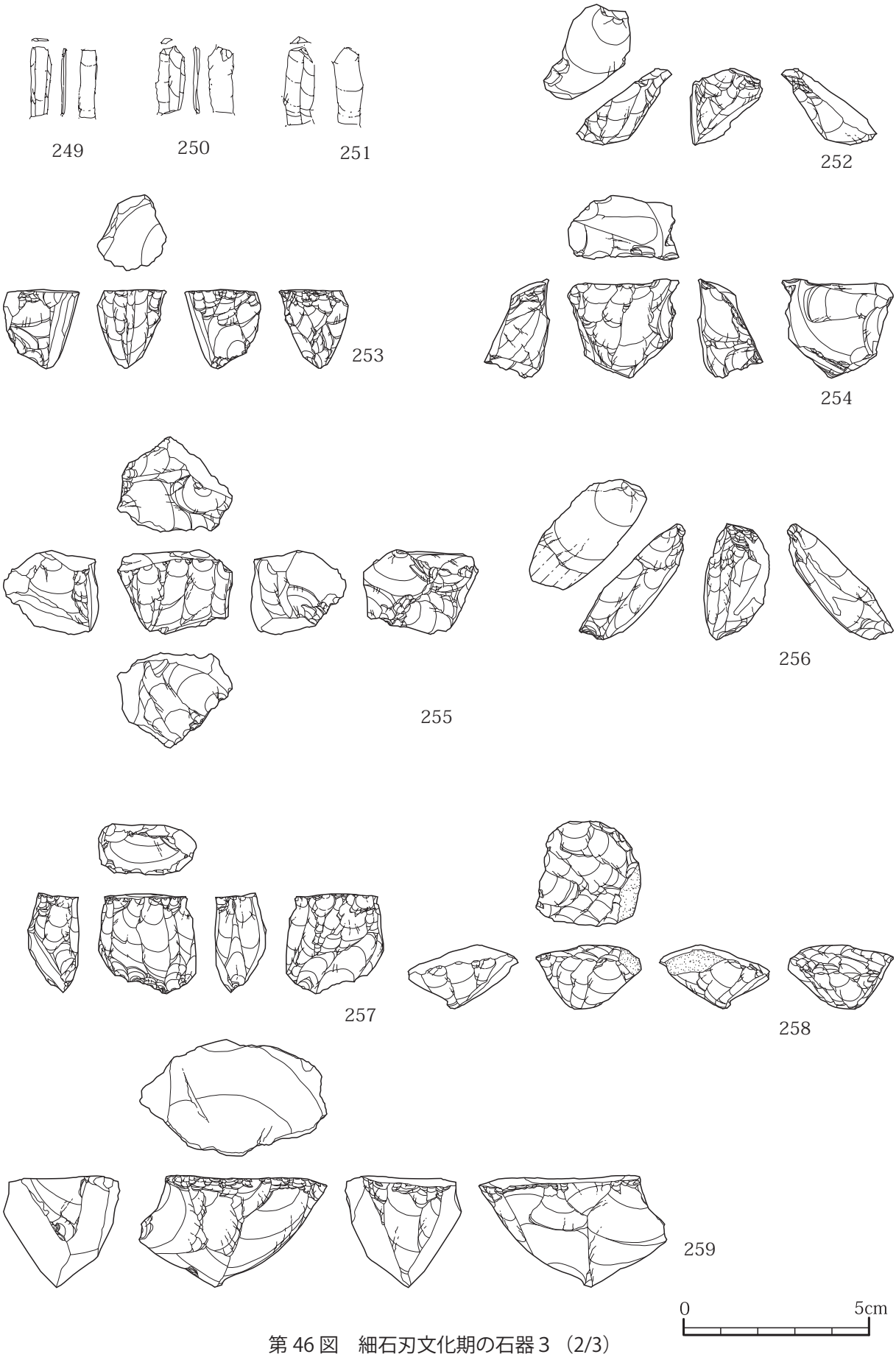
第 31 図 148 ～ 150 はⅥ層から出土した。151 はⅤ層から出土した。細石刃関係の遺物はまとめて報告している。第 44 図 218 ～ 240 は黒曜石である。218 ～ 220 は器種のみから細石刃期とはいいきれないが、素材となる黒曜石が他の細石刃核と同様であったため、このカテゴリーの初めにもってきた。第 45 図 240 は表面がざらつき青灰色を呈している。北部九州産と考えられる。他に同じ石材としては石核とチップが見つかったが風化の度合いが違う。

AT 上位石器群を最も特徴づけるのは、台形石器の一群・狸谷型ナイフ形石器ほか各種のナイフ形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・大形縦長剥片素材のスクレイパー類・敲石等である。石材利用には流紋岩・ホルンフェルスを中心に、特異なものとして尾鈴山酸性岩類製石器の一群がある。個別石器については図表を参照いただくとし、主な剥片剥離について触れておく。138 は寸詰まりの縦長剥片を剥離し、90°打面を入れ替え、引き続き同等の剥片剥離を進める。140 は適宜打面転移しつつ不定形剥片を剥離する。

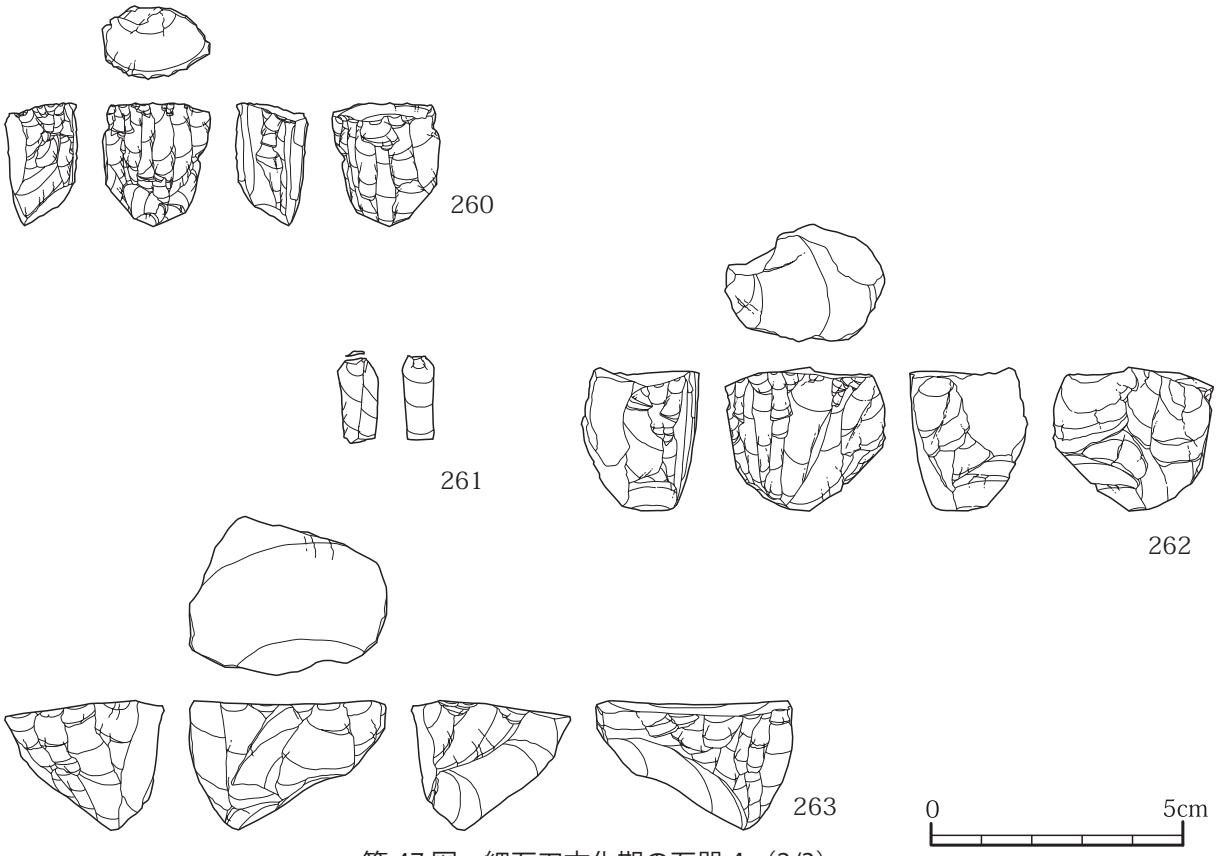
第 44 図　細石刃文化期の石器 1（2/3）



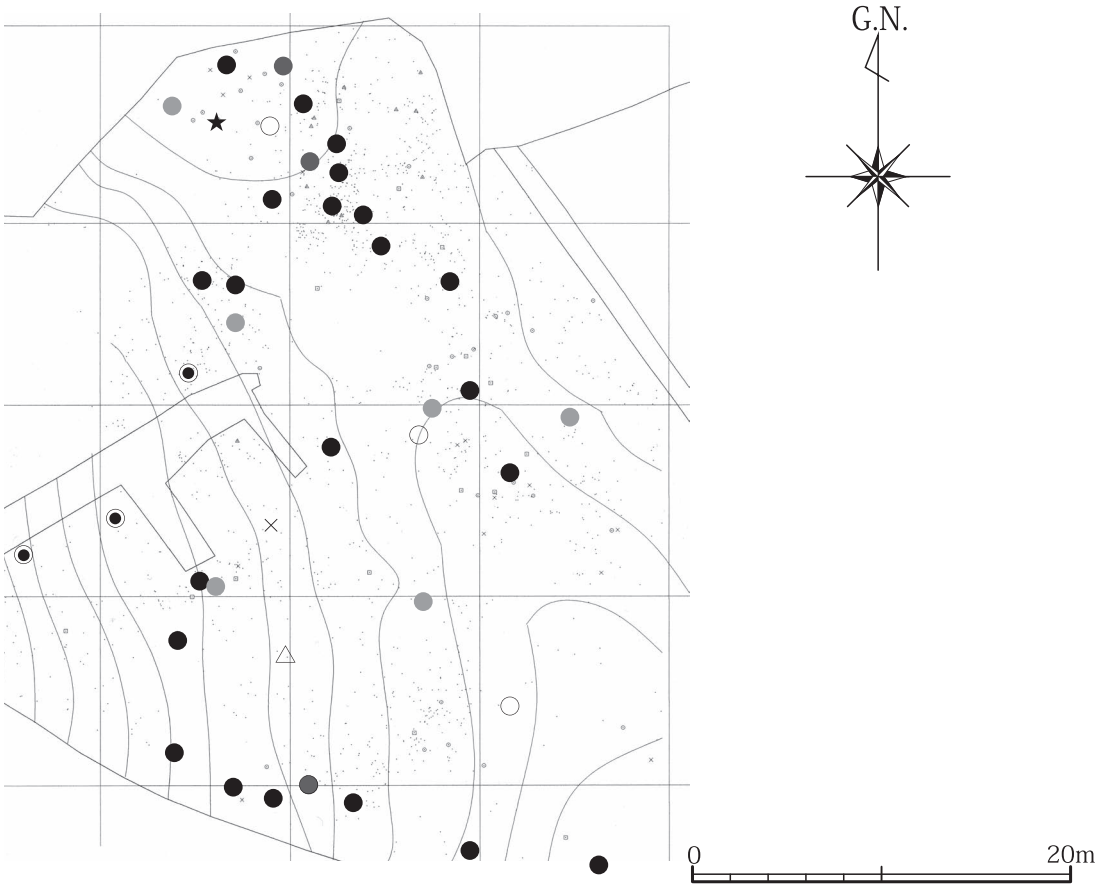
第 45 図　細石刃文化期の石器 2 （2/3）



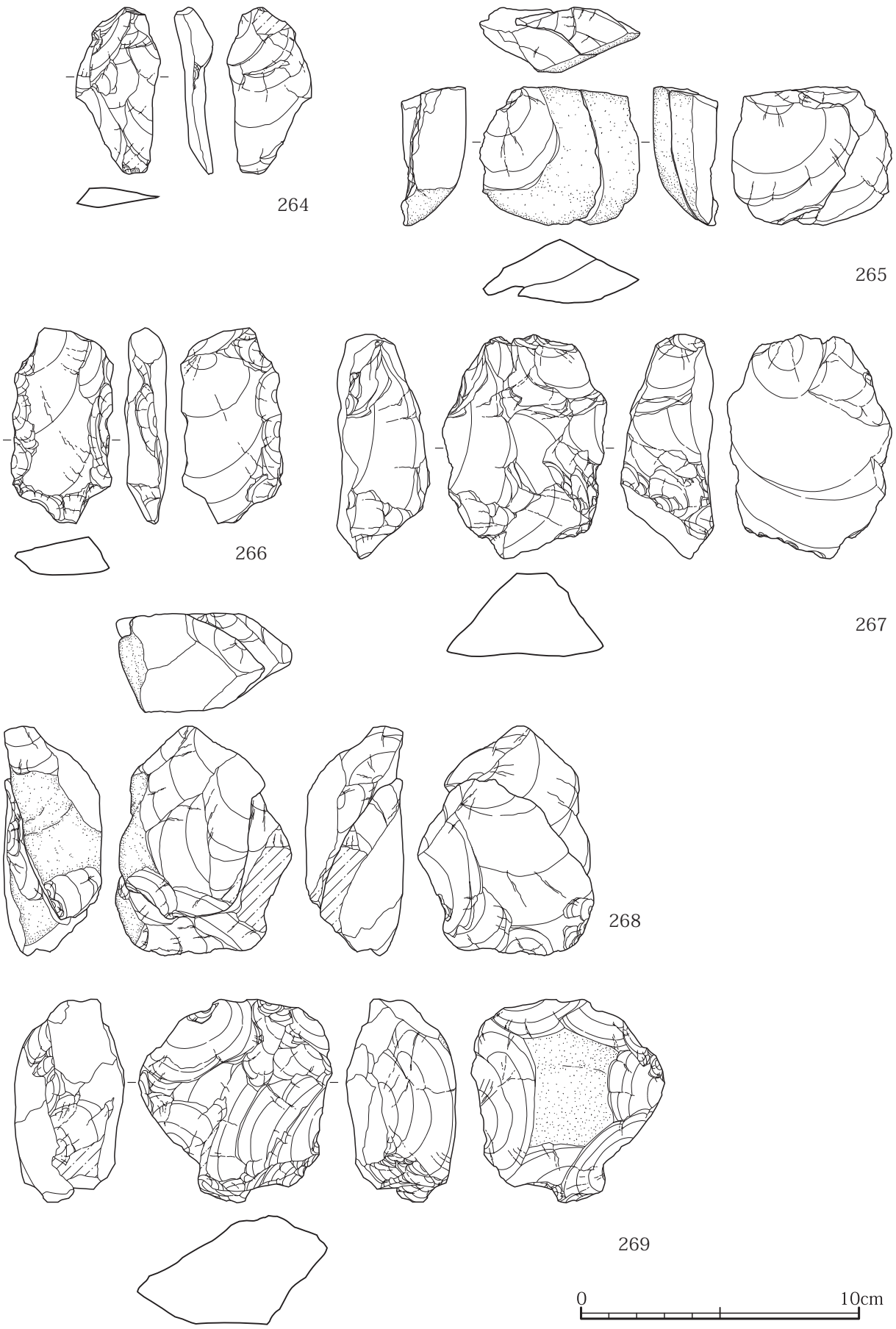
第 46 図　細石刃文化期の石器 3 （2/3）



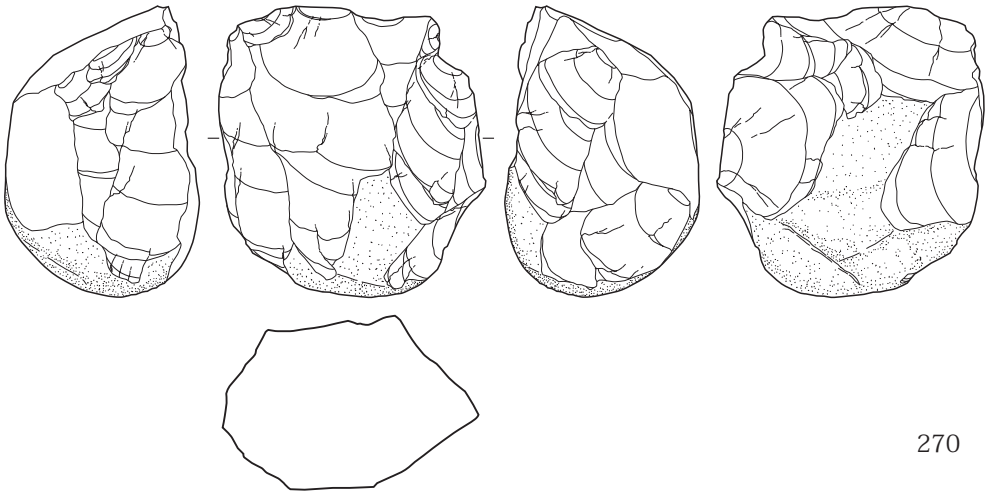
第 47 図　細石刃文化期の石器４（2/3）



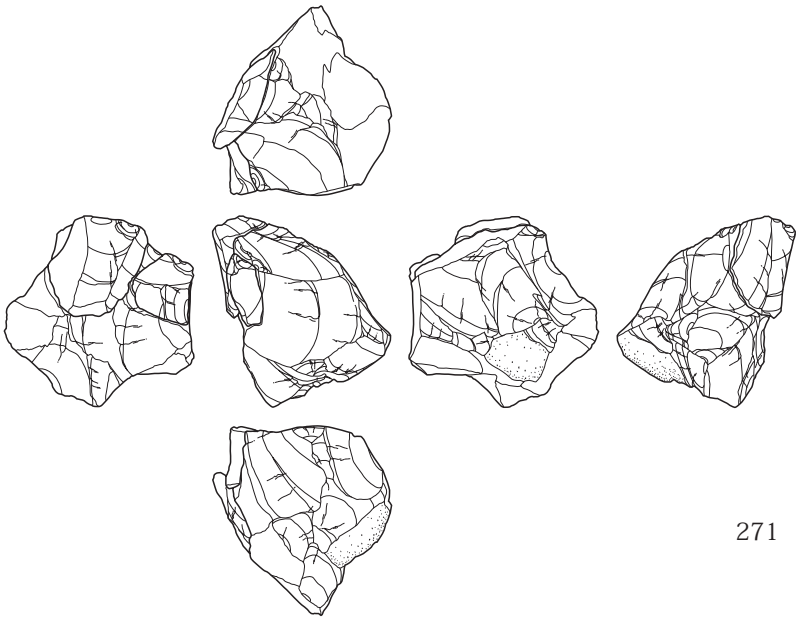
第 48 図　AT 上位遺構と遺物の関係図（1/400）



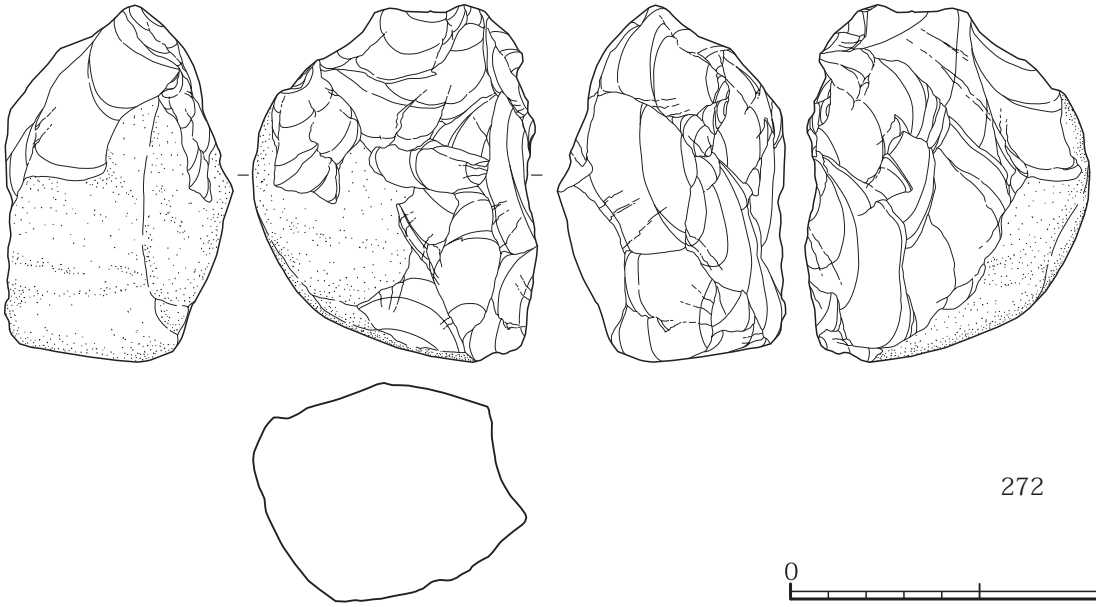
第 49 図　旧石器時代（AT 上位）の遺物 18（1/2）



270



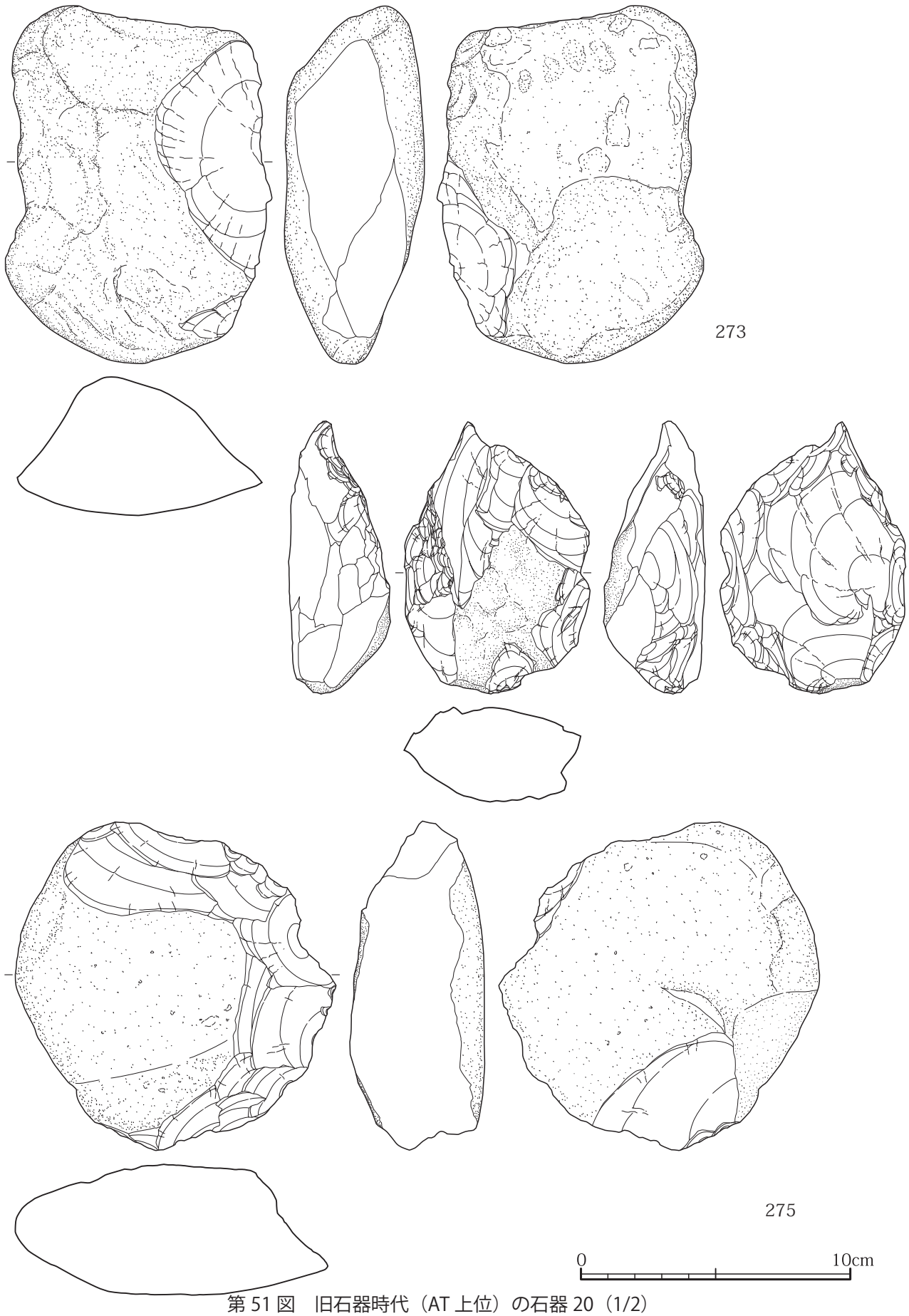
271



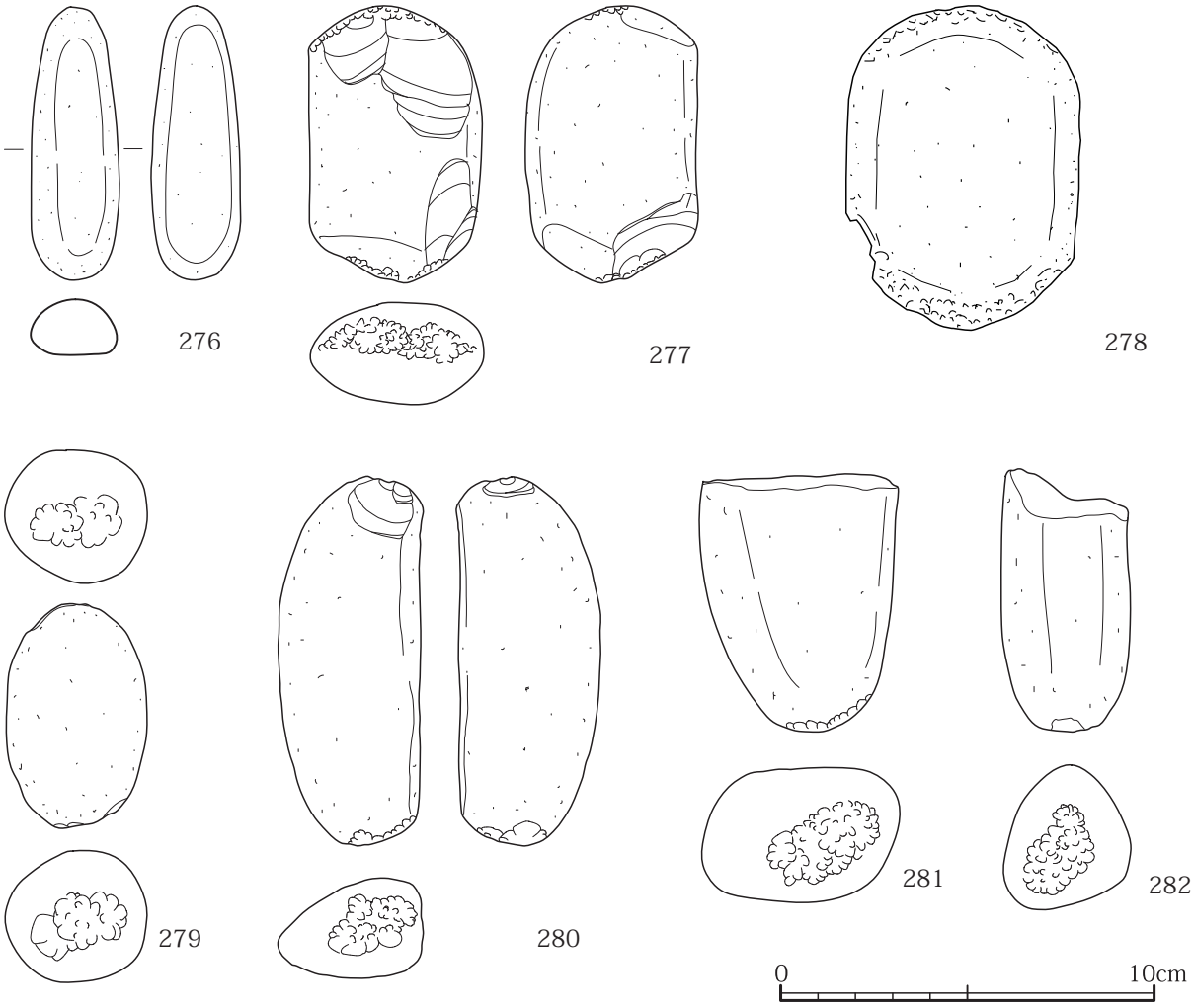
272

0　10cm

第 50 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 19（1/2）



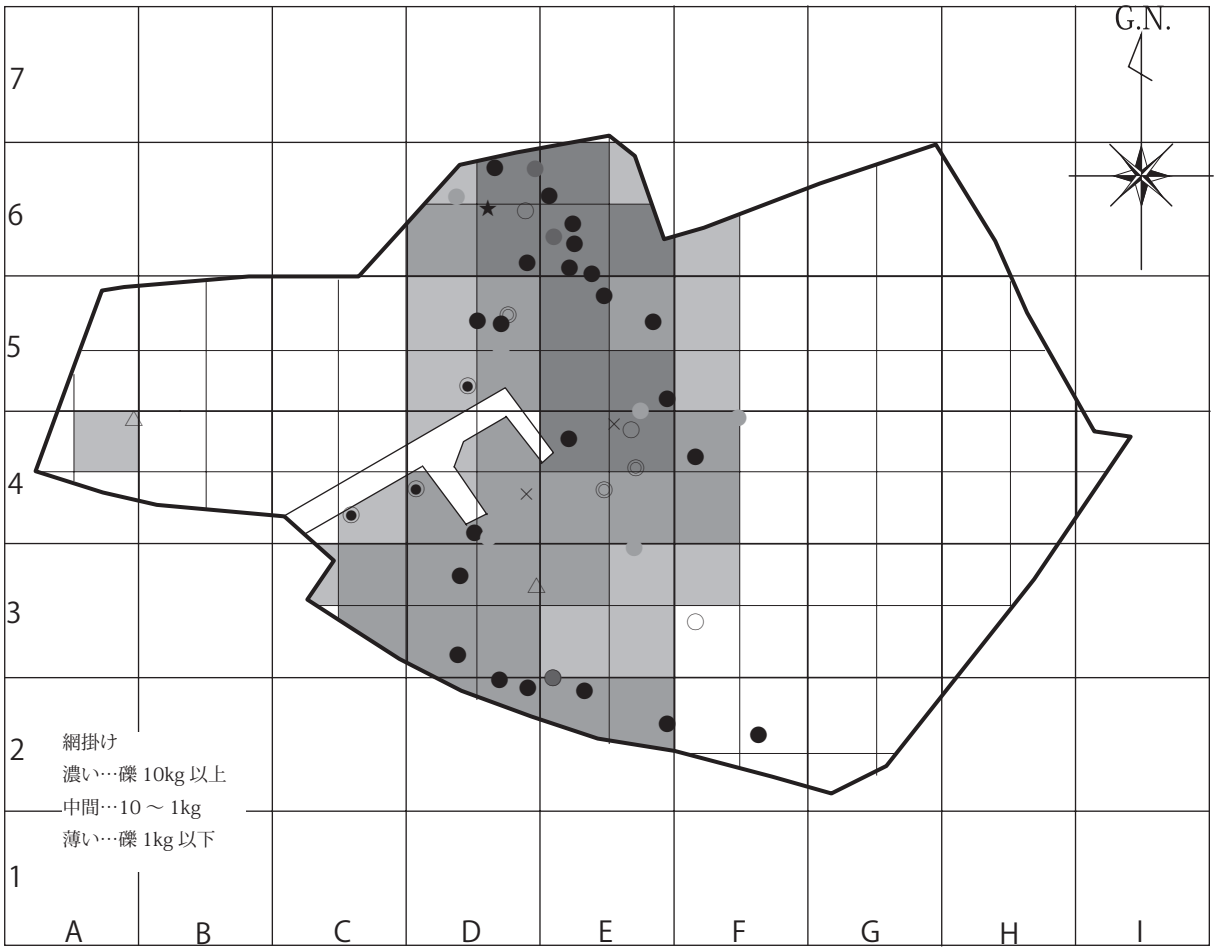
第 51 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 20（1/2）



第 52 図　旧石器時代（AT 上位）の石器 21（1/2）

第 5 表　AT 上位出土未掲載遺物観察表

No.	Gr.	器種	所見
K4	一括	石核	直径 5 ㎝ほど。小型の剥片を剥離。掻器に転用した可能性もある。
K5	E3	石核	直径 4 ㎝ほど。打面調整はない。小型の剥片を剥離したと考えられるが、階段状に剥離してしまっている。末端は尖る。



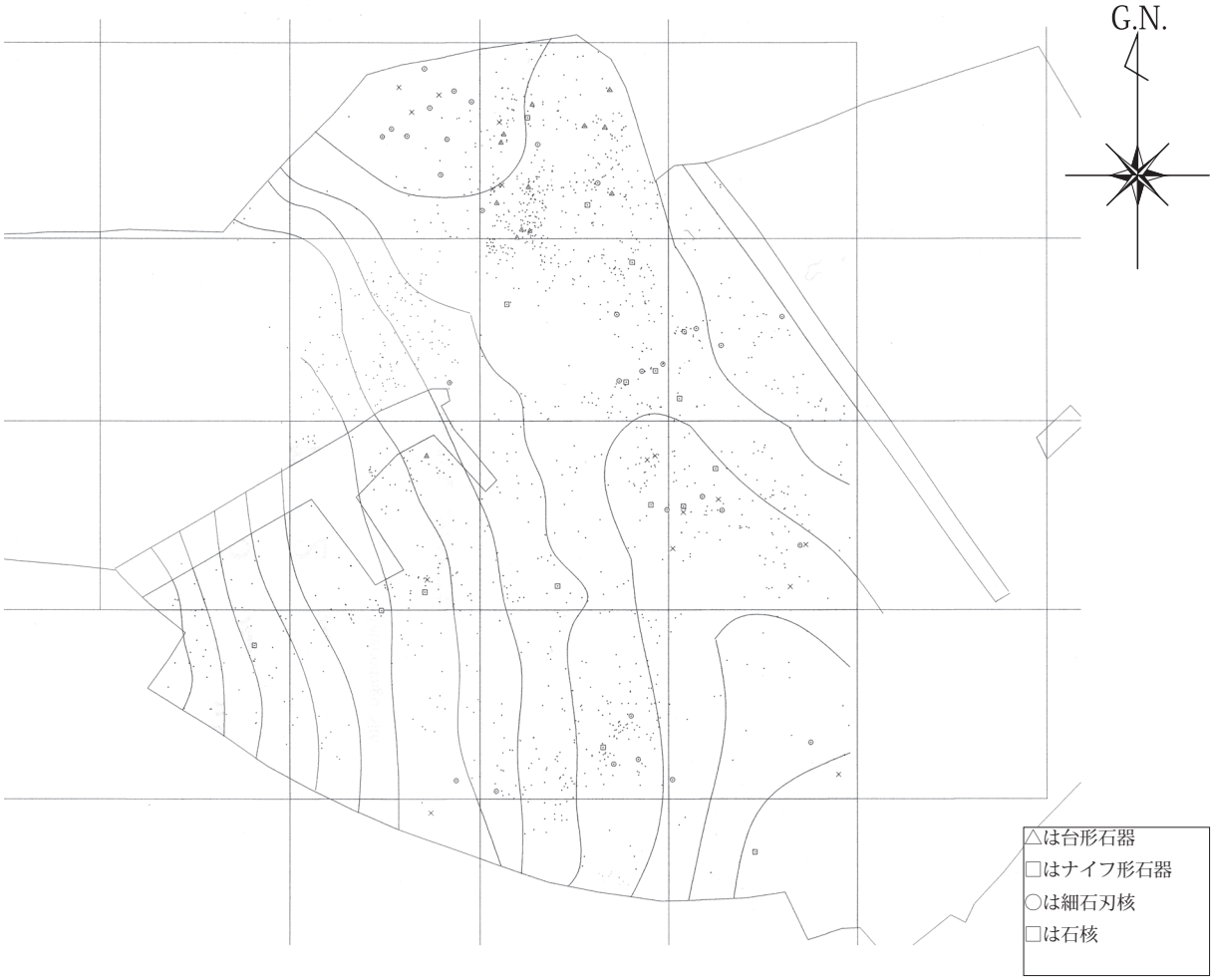
第 53 図　AT 上位遺構と礫分布の関係

141 は幅広剥片等を剥離する。164 は最終的に先行剥離面を打面として幅広剥片を剥離する。165 は石の目に沿った非常に平滑な打面の獲得には成功するも、その後の剥片剥離はことごとく階段状剥離となっている。そこで剥離軸を石の目に沿った方向に打面を変え、縦長剥片を剥離している。175 はあまり打面を固定することなく、90°あるいはそれを超える剥離角で剥離する。残核は石球状となる。

尾鈴山酸性岩類製石器群は転石利用である。270 のように打面作出の後、縦長剥片を連続して剥離するもの（270）・打面と作業面を交互に入れ替えつつ剥片剥離するもの（礫器 272）・礫面より直接剥片剥離するもの（273・礫器 275）がある。得られた剥片の一部は粗い剥離が加えられるものもある（266）。

細石刃文化期は細石刃・細石刃核で構成される。本来伴った可能性のあるスクレイパー類や剥片・石核については明確に分離困難である。黒曜石 1 を用いる細石刃生産は、元々小さい原石こともあって小規模である。礫形状によっては石核成形を介在しつつ打面作出をし、打面調整の上、細石刃剥離をする。

流紋岩 1 ・ 2 を用いる細石刃生産は、いわゆる船野型を主とする。打面転移は一部を除いて見られず、平滑な打面から打面調整なく細石刃剥離をする。255 のように細石刃剥離面と打面のなす角度が 90°を超えるものや、258 のように余すところなく細石刃生産を継続するものも見られる。252・256 は作業面再生あるいはアクシデンタルなものである。247 畦原型であるが、通常平坦な打面に斜め方向の打撃が加えられ、西海技法の影響がみられる。



第 54 図　AT 上位遺物分布図（1/400）

第5節　縄文時代

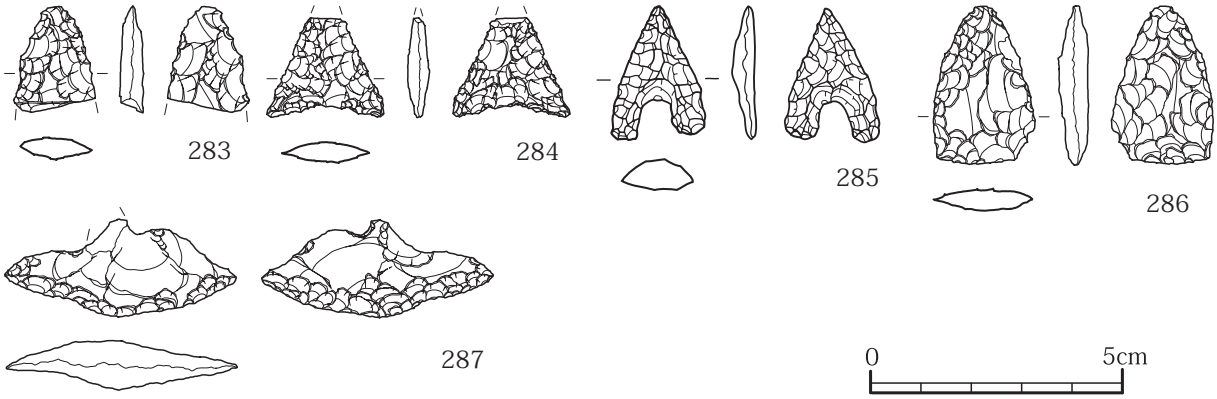
縄文時代に帰属する遺構・遺跡は数が少なかった。土器は摩滅した破片点数が埋没谷から見つかったのみであった。そのうち型式が判断できるものに、厚手の塞ノ神式土器があった。小片であり、本遺跡の性格を代表するとも考えられなかったため、図化しなかった。

図化した石器の内、攪乱以外から出土したものは 283・286 である。302 は安山岩製の石匙で上部が欠損している。表土下のⅢ層から出土した。286 は全面風化している。これらの遺物は早期に属するのか、草創期に属するのか明確ではないが、包含層出土のものは早期の可能性が高いと考えられる。

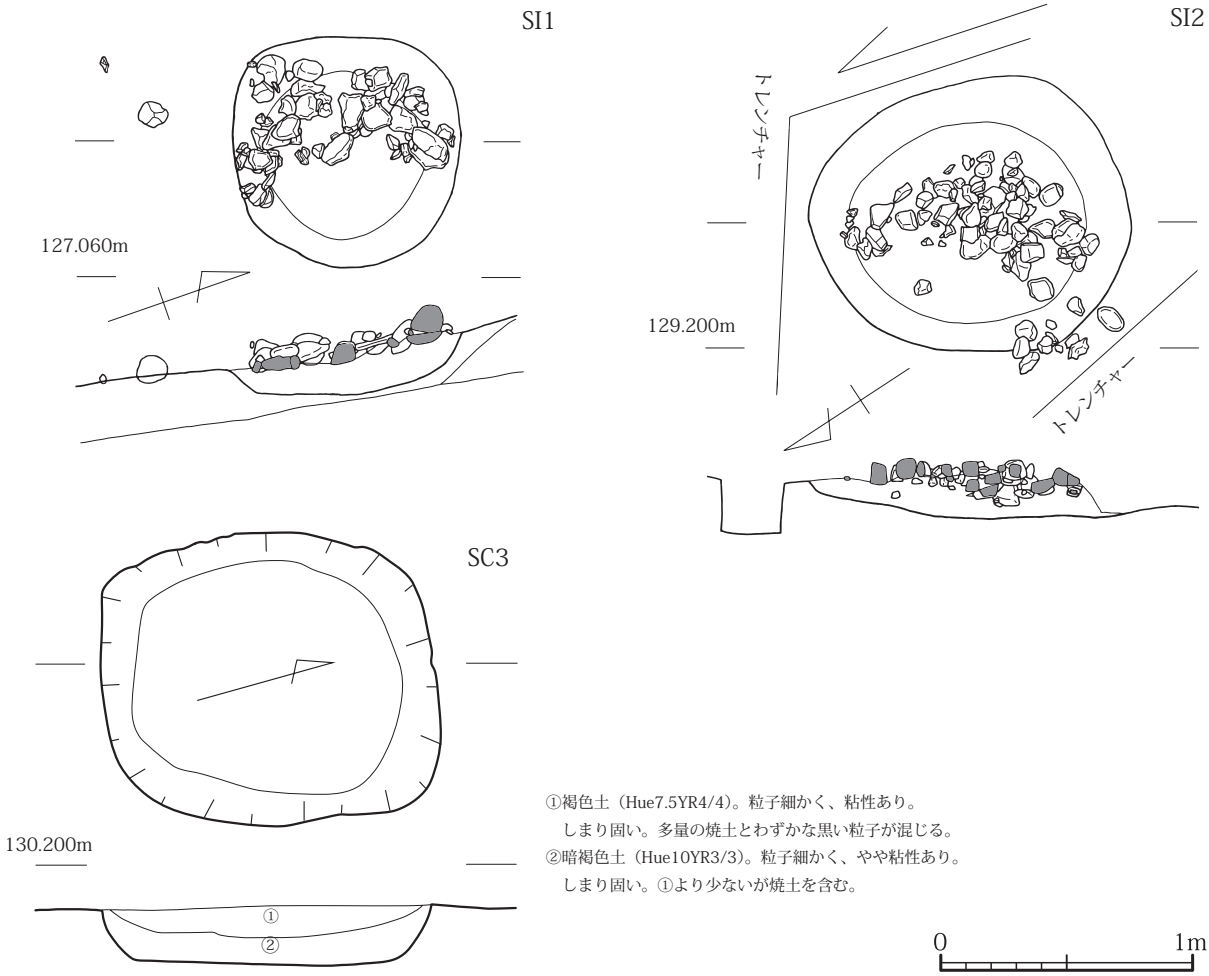
SI1 と SI2 は確認調査中に検出されていた。両者とも掘込みを持ち、礫は上部に盛り上がるように集積され、掘込み中には密集していない。円形の半分に礫が残っていないのは、意図的に掻きだした結果かもしれない。

掘込み中からは炭化物が見つかり、そのうち SI1 の年代測定と樹種同定を委託して行った。SI2 出土のものは細片のため分析に適さなかった。年代は AMS で補正 14C 年代 12,090 ± 60 年 BP、暦年代は BC12,150 であった。これは草創期といってよい年代である。基本土層でいうとⅩ層上面で検出されており、その上面にローム層の二次堆積土がかぶさっていた。遺構の周囲から、時期判断の材料となるような遺物は出土しなかった。樹種同定の結果はコナラ節であった。

SC3 は焼土を含む土坑である。調査時は SZ1 と名称を付していたが、整理の段階で SC3 とした。検出層から概期に属すると判断した。同様の遺構が新富町東畦原遺跡等でも見つかっている。



第 55 図　縄文時代の遺物（2/3）



第 56 図　縄文時代の遺構（1/30）

第 6 表　集石遺構・土坑観察表

遺構名	Gr.	検出層	最大長（m）	最大幅（m）	掘込み（m）	礫重量（g）	礫の状態	その他の所見
SI1	A4		0.9	0.6	0.20	21,188	板状に割れた尾鈴山酸性岩。赤化度は低い。	炭化物が多く混じる。埋土は褐色だが、炭化物でしみのように黒色化している感じ。
SI2	D3		1.1	0.9	0.18	27,506		微細な炭化物が多く混じる。黒色埋土。
SC3	F3					—	—	

立野第５遺跡における放射性炭素年代測定と樹種同定

試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№.１	SI- １集石遺構	炭化物	酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄，石墨調整	AMS
№.２	SI-22 集石遺構	炭化物	酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄，石墨調整	AMS
№.３	E4 グリッド，Ⅸ層	炭化物	酸 - ｱﾙｶﾘ - 酸洗浄，石墨調整	AMS

測定結果

試料名	測定№.（Beta-）	^{14}C 年代（年 BP）	δ^{13}C（‰）	補正 ^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（西暦）（１σ:68％確率，２σ:95％確率）
№.１	212956	12120 ± 60	-26.6	12090 ± 60	交点：cal BC 12150 １σ：cal BC 13200 ～ 12810, 12350 ～ 12100 11990 ～ 11890 ２σ：cal BC 13260 ～ 12770, 12370 ～ 12060 12020 ～ 11880
№.２	212957	14250 ± 60	-25.5	14240 ± 60	交点：cal BC 15120 １σ：cal BC 15420 ～ 14800 ２σ：cal BC 15490 ～ 14740
№.３	212958	26640 ± 160	-25.5	26630 ± 160	－

（１）^{14}C 年代測定値

試料の ^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

（２）δ^{13}C 測定値

試料の測定 ^{14}C/^{12}C 比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正 ^{14}C 年代値

δ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の δ^{13}C 値を -25(‰) に標準化することによって得られる年代である。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。INTCAL98 では、約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

樹種同定

試料	地点・遺構	結果（学名／和名）
1-1	SI- １集石遺構	Fagaceae　ブナ科
1-2	SI- １集石遺構	Quercus sect. Prinus　コナラ属コナラ節
3-1	E4 グリッド , Ⅸ層	Quercus sect. Prinus　コナラ属コナラ節
3-2	E4 グリッド , Ⅸ層	Quercus sect. Prinus　コナラ属コナラ節

（１）試料

試料は、SI- １集石遺構および E4 グリッドのⅨ層から採取された炭化材４点である。

（２）方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって 50 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（３）結果

コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には二次林要素でもあるコナラ、カシワ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ１m、径 60㎝ぐらいに達する。

ブナ科　Fagaceae

横断面：部分的ではあるが大型の道管と火炎状に配列する小道管が見られる。

放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のクリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかであるが、試料が小片で広範囲の観察が困難であることから、ブナ科の同定にとどめた。

【文献】

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

第６節　小結

【概観】

立野第５遺跡では、主に旧石器時代の遺構・遺物が出土した。小高い風通しの良いこの地で、数時期にわたって旧石器人の生活が、営まれていた状況を明らかにすることができた。遺構・遺物は埋没谷を避け、一定範囲に集中して出土した。後世の造園等で大きな改変を受ける以前は、さらに多くの遺構・遺物が存在していたのがうかがえる状況であった。また、自然地形による過去の遺構･遺物の流出の後に、さらに遺構が形成されるというサイクルも見受けられた。そのため原位置を保っている遺物は、調査区中央部の一部であった。

本遺跡は、面積に比して密度の濃い遺跡であり、地形改変以前の人類の足跡は、さらにまさるものであったことが推察される。見つかった旧石器は、宮崎 10 段階編年のうち第３～ 10 段階が認められ、各時期において遊動の拠点となっていたのであろう。

特に、Ⅷ層出土の第３段階に属する石器群、AT 上位出土の台形石器群や石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器群は注目に値する。また尾鈴山麓に近い事もあり、確実に旧石器時代に属する尾鈴山酸性岩類の石器が出土した。ただし遺構に関しては、段階全てにおいて存在していたとは言い難い。とはいえ、斜面地かつ、水流の影響を受けやすい地であったにもかかわらず、当地が好んで生活の場として選択されていたことがわかるのである。

【AT 下位石器群の剥片剥離】

Ⅷ層上面で一定範囲に集中して石器が出土し、良好な資料に恵まれた。宮崎編年第３段階に位置する石器群である。接合資料を中心に、立野第５遺跡における剥片剥離の状況を明らかにすることができた。

右ページの図では石材ごとに剥片剥離の流れを整理している。

主体となる石材は黒色系流紋岩（以下黒色系 Ryu）と茶色系ホルンフェルス（以下茶色系 Ho）である。これらは、原石に近い、あるいは石核素材段階での搬入が認められ、２、３種の剥片剥離が見られる。茶色系 Ho には石の節理が多く、剥離に制約ができているが、石材が風化する以前に、石材の差を認識していたかどうかは考えにいれておく必要がある。

客体的に入ってくるものが、白色系流紋岩（以下白色系 Ryu）、頁岩、チャート等で、いずれも大きめの剥片単体での搬入である。これらは掻・削器生産と密接に結びついていると考えられる。特に白色系 Ryu は横長剥片状態で持ち込まれ、掻器に加工された可能性が高い。

黒色系石材と県内北部系石材である白色系 Ryu の遺跡における疎密は、本遺跡が位置している、宮崎平野北端部の石材環境を如実に表している。遺跡内への搬入量の違いにより、目的とするトゥールにも制約ができていたと考えられる。

以下、図に従って説明したい。

残核 A…打面転移の見られる小形の石核。ex)27・72

残核 B…断面三角形の分厚い剥片を利用した小形の石核。片側、或いは両端から剥離する。限界まで剥離行程を終えた石核では、残核 A と区別がつかない場合もある。ex)69・70

残核 C…比較的大型で、打面一方向。ex)K1・83

Sc 1a…縦長剥片素材の掻器。素材剥片の形態をいかし、端部を軽く調整して成形。ex)11・12

Sc 1b…縦長剥片素材の掻器。長軸側が寸詰まりに加工される。ex)67

Sc 2…横長剥片素材の掻器。ex)75・87

剥片剥離Ⅰ…一つの石核素材（おそらく分割礫か）から小～大形の剥片を一連の工程で剥離していくものである。礫面に近い方は大きめの縦長剥片、内部に行くにしたがって小さめの縦長剥片を剥出する。大形剥片のうち縦長のものは Sc 1a となる。しかし、茶色系 Ho では石材の性質により、しばしば、寸詰まりな縦長剥片や主要剥離面側に極端なカーブを描いた剥片が剥離される。そのため、黒色系 Ryu より成形のための調整が多く施され、結果、長軸側が寸詰まりとなる場合がよく見られる（Sc1b）。同様の理由で、茶色系 Ho からは横長剥片も生じやすく、Sc 2 となる。小～中形の剥片はナイフ形石器に加工さ

れる。

剥片剥離Ⅱ…分割礫から、打面一方向で小～中形の縦長剥片を周縁から連続して剥離する。剥離された剥片は比較的規格性を持つ。目的とする器種はナイフ形石器。残核Cが残る。黒色系Ryuにのみみられる。

剥片剥離Ⅲ…断面三角形の分厚い縦長剥片を石核材料として、小形の縦長剥片を剥出する。剥片剥離Ⅰの一連の工程から分離して現れている可能性と、素材剥片状態で持ち込まれて発生した可能性とがある。茶色系Hoのみにみられる。目的とする器種はナイフ形石器でも細石器とも呼べるような、特に小形のものであろう。

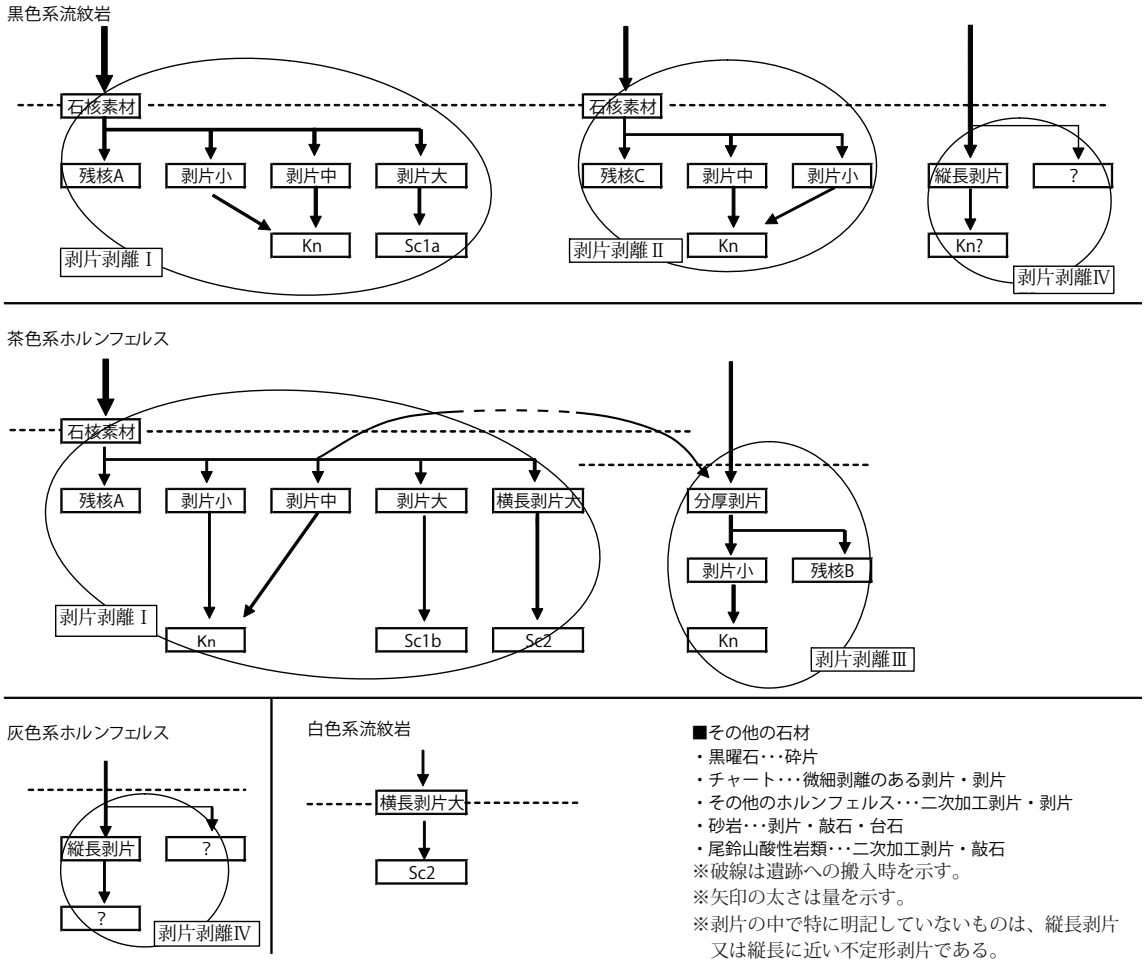
剥片剥離Ⅳ…定型的な石刃に近いような縦長剥片を連続して剥離する。客体的で、目的とする器種はよくわからない。これに伴う石核もみつかっていない。

【環状ブロックの可能性について】

Ⅷ層上面出土の遺物分布図を見ると、数個の石器集中区が、ドーナツ状に輪を描く平面分布となっている。中央部には遺物集中区と重ならない形で、礫群が位置している。これはいわゆる環状ブロック群と呼ばれるものに該当するのであろうか。宮崎県内では、今まで環状ブロック群は認識されておらず、本遺跡での遺物分布が環状ブロックの一つであるとすれば初見となる。

積極的にとらえるとすれば、第一に明らかに見た目が環状をしていること。石器ブロックどうしに接合関係がみられること。二つのグループにわかれるように見える切れ目のうち、下部か上部が入り口と考えることができること、等があげられる。

消極的なとらえかたも考えられる。まず、二つの円弧AとBの同時性である。A、B内それぞれでは接合関係が頻繁なのに対して、AとB同士ではそれほどではない。これらの間には接合関係は確かにある



が、数点にすぎない。A同士、B同士の接合に比べ明らかに少ない。そして、集中区10は単独で存在していると予想される。また、関東地方の環状ブロックに頻繁に見られる局部磨製石斧が出土していない。しかしこれは、宮崎県内自体での旧石器時代の磨製石斧の出土例がわずかであることを考慮する必要があるだろう。最後に、時期が27,000年という年代を持つAT直下の出土であり、環状ブロックとしては年代が新しいことがあげられる。Ⅸ層出土の炭化材のAMSがB.P26,630の値を示すことを考えてもⅧ層出土の石器群がそれ以上年代を遡る可能性がないといえる。

筆者が、本例が環状ブロックの可能性を持つと認識したのは、入稿直前であった。恥ずかしいことに、平面分布を何度も見る機会を持ちながら、ふと原稿を覗いた当センターの諸兄に指摘されるまで、全く頭の片隅にもなかったのである。そのため、本書で基礎的で詳細な検討を行うことができなかった。調査中も意識がなかったため、環状を意識した形での写真を撮影できていない。

それには、環状ブロックがでるはずがないという思いこみが一因であったように思う。今後、石器の出土状況を現場で広範な面的にとらえ、記録していく視点を持てば本遺跡の類例が増えてくる可能性もあるのではないだろうか。今後の検討と類例の増加に期待したい。

【AT上位石器群の評価】

報告本文中では図表中心の報告となったため、ここで改めて特徴的なことがらについて整理しておきたい。

まず、白色に風化する石材を用いた、台形石器・狸谷型あるいはそれに類する切出形ナイフ形石器の存在が挙げられる。これらの石器背面に残された剥離面構成等から、素材剥片は厚手の矩形剥片あるいは不定形なものであり、剥離方向も多方面からランダムに進んだようである。これに近い剥片剥離の見られた石器群として、宮崎市佐土原町長薗原遺跡や高鍋町北牛牧第5遺跡第Ⅱ文化層の一部等が挙げられる。また、同質の石材製石器には剥片尖頭器クラスの重量を持つ大形のナイフ形石器や二次加工ある剥片など、端正な縦長剥片素材の石器群が一定数見られるのに対し、石核がなかった点は注目される。

剥片尖頭器と縦長剥片素材の削器・縦長剥片等が1ブロックを形成し、石核等は持たず製品・剥片状態での搬入が予想される例が宮崎市高岡町永迫第1遺跡第3地点、佐土原町長薗原遺跡等で見いだされている。206・207の剥片尖頭器・二次加工ある剥片はおそらく同母岩であり、ともに剥離された可能性が高い。また、石材・母岩は様々ながら、剥片尖頭器や縦長剥片素材の加工具類、縦長剥片もいくつか出土しており、本遺跡でも、剥片尖頭器と縦長剥片素材の削器・縦長剥片等のまとまりがあったと見てよいかもしれない。

尾鈴山酸性岩類製石器の一群は驚くような内容を持っている。転石から打面を作り出し、縦長剥片を連続して剥離する例の存在は、当時にあって流紋岩・ホルンフェルス等の良質緻密な石材と同等に利用されたことを示している。打面と作業面を交互に入れ替えつつ剥片剥離するもの（礫器とも見える）もやはり同じである。ただし、得られた剥片についてナイフ形石器等に加工することはなかったようであり、本遺跡から出土したのは粗い二次加工ある剥片のみである。こういった様相からは、尾鈴山酸性岩類はその他大勢の剥片石器石材と同等の位置付けで剥片剥離が企画されたと見てよい。しかし、得られた剥片はやはり細かな加工には向いておらず、結果、粗い加工程度にとどまったのではなかろうか。剥離されたのみの剥片も観察したものの大半は風化が激しく使用痕等を見いだすことが叶わない現状がある。積極的な評価が許されるならば、尾鈴山酸性岩類製の剥片等については刃器等として利用があった可能性が高いと言えよう。

石材利用の上で、尾鈴山酸性岩類とともに特徴的なのがチャートである。石材の主となるわけではないものの、ナイフ形石器・角錐状石器をはじめAT上位石器群の中で複数時期にわたってチャート製のものが散見される点は興味深い。本遺跡と地域的に隣接する、宮崎平野部の中でも小丸川・一ツ瀬川流域（川南・高鍋・新富町、宮崎市佐土原町ほか）では意外にチャート製石器は少なく、新富町東畦原第1遺跡・

音明寺第２遺跡、高鍋町牧内第１遺跡・野首第２遺跡等で小形の台形石器に多用され、あるいは小形の角錐状石器の一部に見られる程度である。今後、資料の豊富な五ヶ瀬川流域をはじめ地域北の様相も検討の視野に入れていきたい。

本遺跡のAT上位石器群については、近年、類例が急増中の国府型ナイフ形石器をはじめとする瀬戸内技法関連資料は見られなかった。こういった点も含め、今後の継続した資料操作が必要である。

【細石刃文化期について】

細石刃核について、黒曜石１を用いるものと流紋岩１・２を用いるものとが一定量出土した。これらを細石刃生産の流れの中で比較すると、まず圧倒的に原石サイズの大小がある。次いで、細石刃剥離にあたって、黒曜石１は打面調整を介在、流紋岩１・２は打面調整なし、という相違点がある。また、細石刃剥離面と打面のなす角度が90°を超えるものは流紋岩１・２に限られるという点も興味深い。細石刃生産に関わる石質の問題に過ぎないのか、はたまた時期・集団差による製作上の癖が表出したものなのか、今後も検討を深めたい。

【礫群の変遷】

第Ⅲ章第４節でⅠ類とした、小形の礫群が特徴的に検出された。遺物と同様に遺構も密度が高い。これまで幾度も、本遺跡では遺構の変遷を単純に追うことができないことを述べてきた。ここでは、第４節での整理を元に礫群の変遷を追っていこう。

ポイントとなるのはSI3とSI11の出土状況である。SI3はⅢ類礫群、SI11はⅠａ類礫群である。Ⅰａ類礫群がⅢ類礫群より古いとする。他のⅠａ類礫群の検出層をみると、層位の安定していないところはATの二次堆積層の上の黄褐色土で多く検出され、層位の安定した箇所ではAT上位の褐色土上又は中ほどで多く、検出されている。それらと比較してⅢ類礫群であるSI10、SI39は相対的に上位層で検出されている。次にⅡｂ類礫群はⅠａ類礫群よりもほとんど差はないといえ、相対的に若干下位層検出である。時期が古い順にⅡｂ類→Ⅰａ類→Ⅲ類という変遷が想定可能である。

また、Ⅰａ類礫群は掘込みを持っていた可能性が高いと考える。同様の形態の礫群が牧内第１遺跡や鹿児島県耳取遺跡で検出されている。特に牧内第１遺跡は、石材こそ異なるものの、傾斜地に並ぶように配置されている点、埋め込まれるような礫の配置等、非常にⅠａ類礫群のあり方と似通っている。礫群と石器ブロックが重ならない点も同様である。立野第５遺跡のⅠａ類礫群は牧内第１遺跡の後期旧石器時代Ⅱ期と並行すると考えてよいと思われる。

この時期に相当する石器群であるが、礫群と石器ブロックと重ならないことと、立野第５遺跡での層位の不安定さから、確実なことをいうことはできない。

【年代測定について】

本遺跡では集石遺構２基についてAMSによる年代測定を行った。そのうちSI1は草創期、SI22は細石刃期に比定されるような年代がでた。SI22はいかにも集石遺構といったような、規模と形態を持つ。けれども、SI22の周辺で土器や石鏃等の縄文時代遺物は出土せず、石匙がその上層で出土しているのみである。むしろ、細石刃核の多く出土した箇所に位置しているのである。

2003年時点で行われた九州内の集石遺構の集成では草創期と呼ばれる資料はわずかであるし、該当するような規模の遺構は存在しない。県内では細石刃期の礫群には類例は見受けられない。

年代測定の誤差の可能性ももちろんある。しかし現在、遺跡で集石遺構が検出されると、あまり検討せずに早期とする傾向があると思われる。早期とされている集石遺構の中に草創期、或いはさらに古い年代に属する可能性がないのか、一考してみる余地があるだろう。

参考文献

九州縄文研究会 2003『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』

宮崎県旧石器文化談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化談話会

笠懸野岩宿文化資料館 2005『第40回企画展　環状ブロック群』

原田茂樹編 2005『牧内第１遺跡（四次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第104集

第Ⅳ章　立野第２遺跡の調査

第１節　層序

本遺跡の土層は基本的に安定していたが、台地の先端部にいくにつれて徐々に堆積が薄くなっていた。現地は調査直前まで竹が繁茂しており、ⅠからⅢａ層までは竹の根によってふかふかとした感触の土となっていた。同時に、Ⅱ層はブロック状にしか残存しない箇所もみられる。Ⅰ層は畑地耕作土の上に腐植土がのっており、さらに分離可能であるが、表土として一つの層ととらえた。ⅩⅠ層以下は白色の粘土層が続いており、埋め戻しの際に重機で深掘りを行ったが、１m以上掘り下げても礫層は確認できなかった。

上述した竹根の影響等もあり、層が上下して出土した遺物もあったが、おおむね縄文時代早期の遺物はⅢ・Ⅳ層中心に、旧石器時代の遺物はⅤ層を中心に出土した。

以下、各層ごとに記述する。

Ⅰ層：表土・造成土

Ⅱ層：鬼界アカホヤ火山灰層。竹根の影響により、しまりは柔らかい。

Ⅲ層ａ：黒褐色土（Hue10YR2/3）。粒子細かい。粘性なし。しまりはやや柔らかい。

ｂ：暗褐色土（Hue10YR3/4）。粒子細かい。粘性なし。しまりはやや固い。

Ⅳ層：褐色土（Hue10YR4/4）。粒子細かい。下部の方に小林軽石と考えられるオレンジ色の粒子をわずかに含む。やや粘性があり、しまりはやや固い。

上面で集石遺構が検出された。

Ⅴ層：にぶい黄褐色土（Hue10YR5/4）。粒子細かい。粘性があり、しまりはやや柔らかい。

礫群が検出された。

Ⅵ層：褐色土（Hue10YR4/4）中に暗褐色（Hue10YR3/4）の固いブロックを多く含む。AT由来と考えられる白い粒子が混じっている。しまりは固く粘性があり、粒子はやや細かい。

Ⅶ層：姶良Tn火山灰層。明褐色（Hue10YR6/8）を呈する。

Ⅷ層：黒褐色土（Hue10YR2/3）。非常に固くしまっていて、乾燥するとすぐにクラックが入る。粒子が細かく白色の粒を含む。粘性弱い。

Ⅸ層：黒褐色土（Hue7.5YR3/2）。固くしまっているがⅧ層よりは柔らかい。粘性がややあり、粒子は細かい。

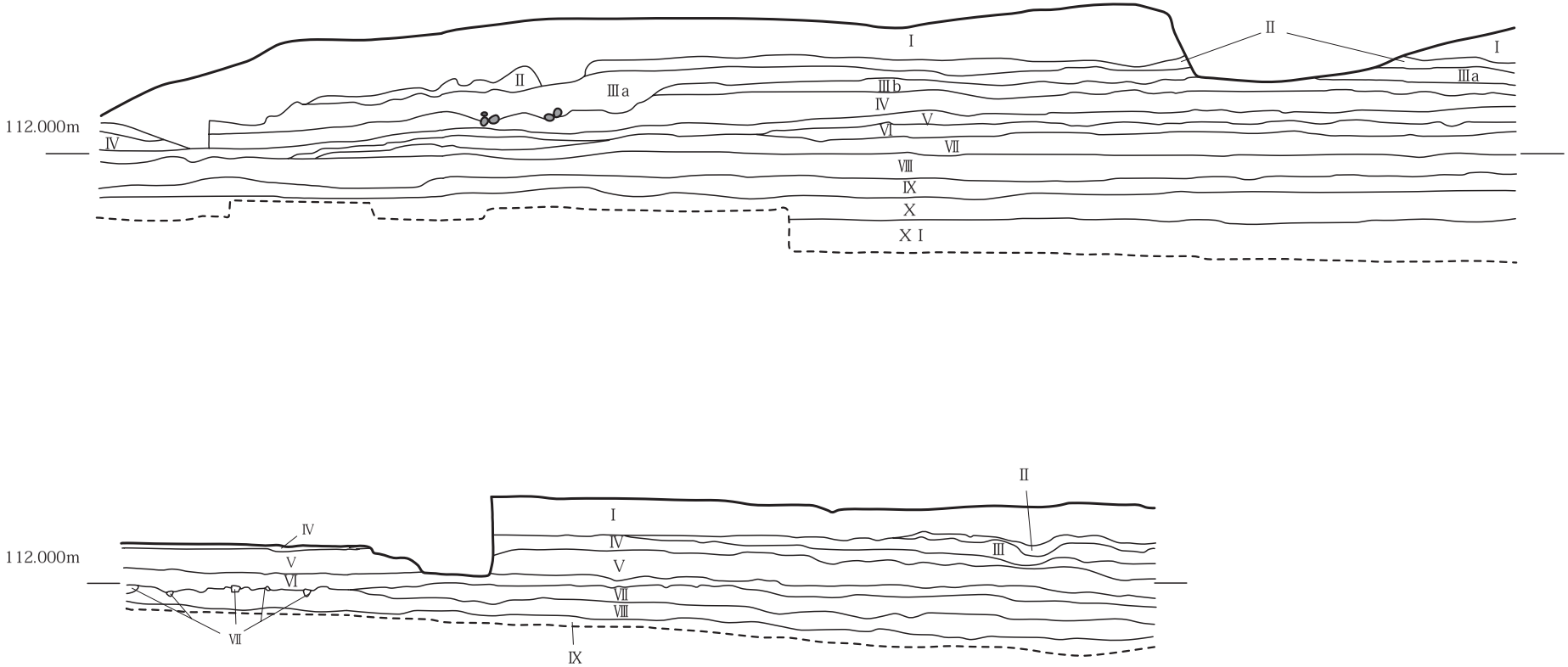
Ⅹ層：褐色土（Hue7.5YR4/6）。粒子細かい。水分を多く含み粘性強い。しまりはやや柔らかい。

ⅩⅠ層：明褐色土（Hue7.5YR5/6）水分を多く含み粘性強い。しまりはやや固い。粒子は細かいが、砂利を含む。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、東九州自動車道関連の発掘調査で遺跡間の共通理解を図るため、基本層序を作成している。立野第２遺跡の層序を都農町域基本層序[1]にあてはめると、それぞれⅢ層（ML1上部）、Ⅳ層（ML1下部）、Ⅴ・Ⅵ層（MB1～ML2）、Ⅷ層（MB2）、Ⅸ層（MB3）に対比される。

しかし、（宮崎県埋蔵文化財センター2006）でも問題としてあげられているように、既存の基本層序に対応させてローム層を区分するには、宮崎平野北部の状況は限られた情報量しか持っていない。また、都農町所在の遺跡間でも堆積層の差が見られ、層位の齟齬は起こっており、必ずしも共通理解が得られているわけではない現状である。その意味で、都農町域基本層序は暫定的ともいえ、ここにあげた対応関係は検討を前提としたものであることを明記しておきたい。

１）　宮崎県埋蔵文化財センター2006『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』では、調査域が県北部に移るにつれ、当初新富町域で設定された既存の基本層序が対応しない場合が多くなっていることを指摘している。そして、新たに都農町域基本層序について整理を行っている。



第 57 図　土層断面図（1/60）

第２節　確認調査の概要

確認調査は平成17年６月１日から平成17年８月１日まで、立野第１遺跡（一次）確認調査、立野第５遺跡の確認調査と平行して行われた。確認調査対象面積は当初400㎡とされていたが、現地実測の結果212㎡であることが判明した。調査実日数は20日間である。

約２ｍ×３ｍのトレンチを３箇所設定し表土を重機で除去したのち、人力で掘削を行った。Ⅲ・Ⅳ層から縄文土器、石鏃等の遺物が出土した。集石遺構の一部と考えられる赤化礫が多数検出された。１Ｔからはチャートの砕片が多数出土した。遺構と遺物が多数出土することが確認されたため、それ以上掘り進まず、対象区212㎡全てを本調査とすることを決定した。

第３節　調査・整理の方法と方針

１　調査の方法

調査は、排土処理等の便宜上Ａ区とＢ区に分割して行った。Ａ区を調査中はＢ区に排土を置き、その後Ａ区を埋め戻し、排土置き場とし、Ｂ区の調査に移った。しかし、それでもなお排土全てを処理することができず、立野第１遺跡へ排土搬出を行った。調査区は西側を除き急斜地に面していたため、安全上、用地より１ｍ程度内側を掘削した。Ⅵ層上面で等高線を作成し、Ⅵ層以下はトレンチ調査とした。

任意杭を一点設置し、これを基準として記録を行った。この任意杭には、立野第５遺跡で国土座標を基準にした測量杭が設置された後、そこから調査員が座標を移した。出土した遺物はトータルステーションで位置を記録した。

散礫は写真で範囲をおさえ、集石遺構、礫群は全て１／20で図化した。集石遺構の認定は散礫を除去後に行った。散礫の粗密により、集石遺構の認定が平易な箇所と困難な箇所とがあったが、認定のしやすさにかかわらず、一定の厚さで全て礫を除去した。そのため図化を行った段階では、本来の検出形態をおさえきれていない可能性が生じたが、散礫除去作業中に推定できたことをできるかぎり注記した。

礫は石器が含まれていないか確認し、その場で石材、赤化、破損状況について肉眼で記録した後廃棄した。一部の礫をサンプルとして持ち帰った。

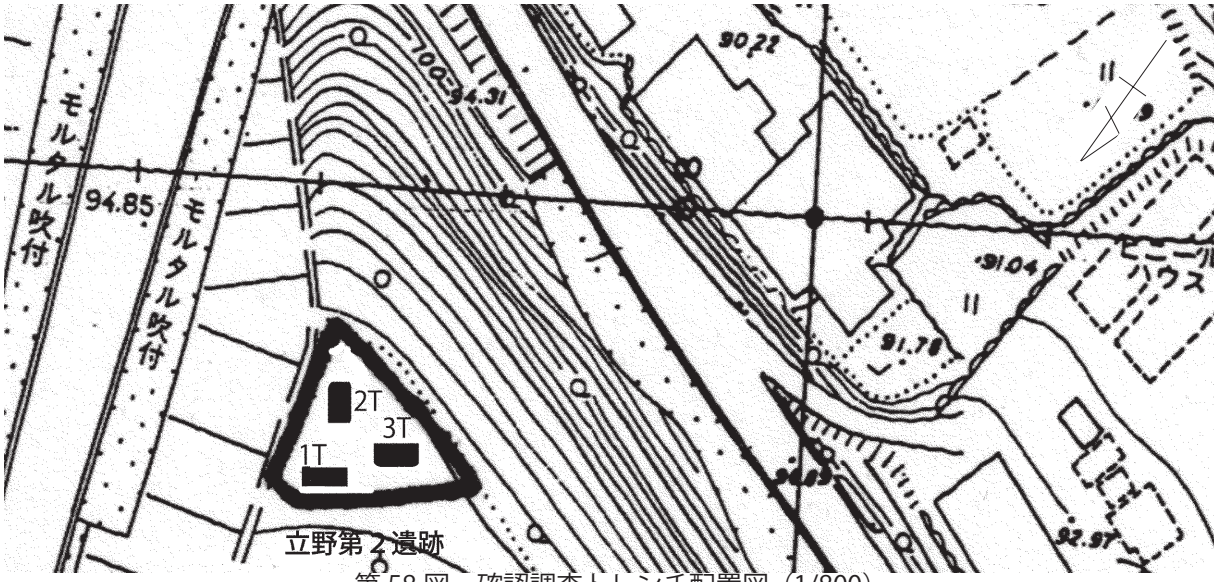
２　整理作業

水洗、注記を行ったのち土器と石器の接合作業を行った。区に関係なく、同層位内で接合したのち異層位間で試みた。接合作業は１点も接合できなくなるまで継続した。

石器は接合作業後、全点計測を行った。石材の分類は立野第５遺跡と共に行い、基準を統一した。

縄文土器は調査面積の関係か、破片が大きくなるものがなかった。口縁部を中心に、器形・調整が復元できるものを図化した。

立野第５遺跡の原稿と同じくデジタル処理での報告書作成が行われた。



第58図　確認調査トレンチ配置図（1/800）

※周辺地形は第５図参照

第４節　旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物はⅣ～Ⅴ層を中心に礫群１基と石器類が確認された。一部Ⅲ層出土もある。遺物出土層位の幅が大きいのは、竹根等による二次的移動によるものと考えられ、旧石器時代の遺物が本来位置していたのはⅤ層と考えられる。

Ⅵ層以下はトレンチ調査を行った。Ⅷ層からホルンフェルス製の剥片１点と赤化礫１点が出土したのみであった。それらが出土した周囲を拡張したが、他の遺物等は見つからなかった。

【礫群】

SI16

集石遺構を除去して掘り下げた後にⅤ層で検出された。礫のまとまりはまばらであったが、周辺には他の礫は検出されなかった。10～20㎝大の河原石で構成されており、最大長1.4 m、最大幅1.0 mを測り、掘込みはない。炭化物、付着物等は確認できなかった。石材は全て尾鈴山酸性岩類であり、赤化している。礫自体の表情は集石遺構のそれと変わらない。

【遺物】

個々の遺物の詳細は観察表に記している。

ナイフ形石器に関連する資料と礫石器が出土した。石材は流紋岩が中心で、ホルンフェルスが少数と黒曜石がわずかに含まれる。

黒色系流紋岩が相対的に多くをしめ、白色系流紋岩には石核が認められなかった。また、目立って大きな剥片も出土しなかった。これは、立野第５遺跡と同様の傾向である。

第60図１は楔形石器の破損品と考えられる。一部礫面を残す。

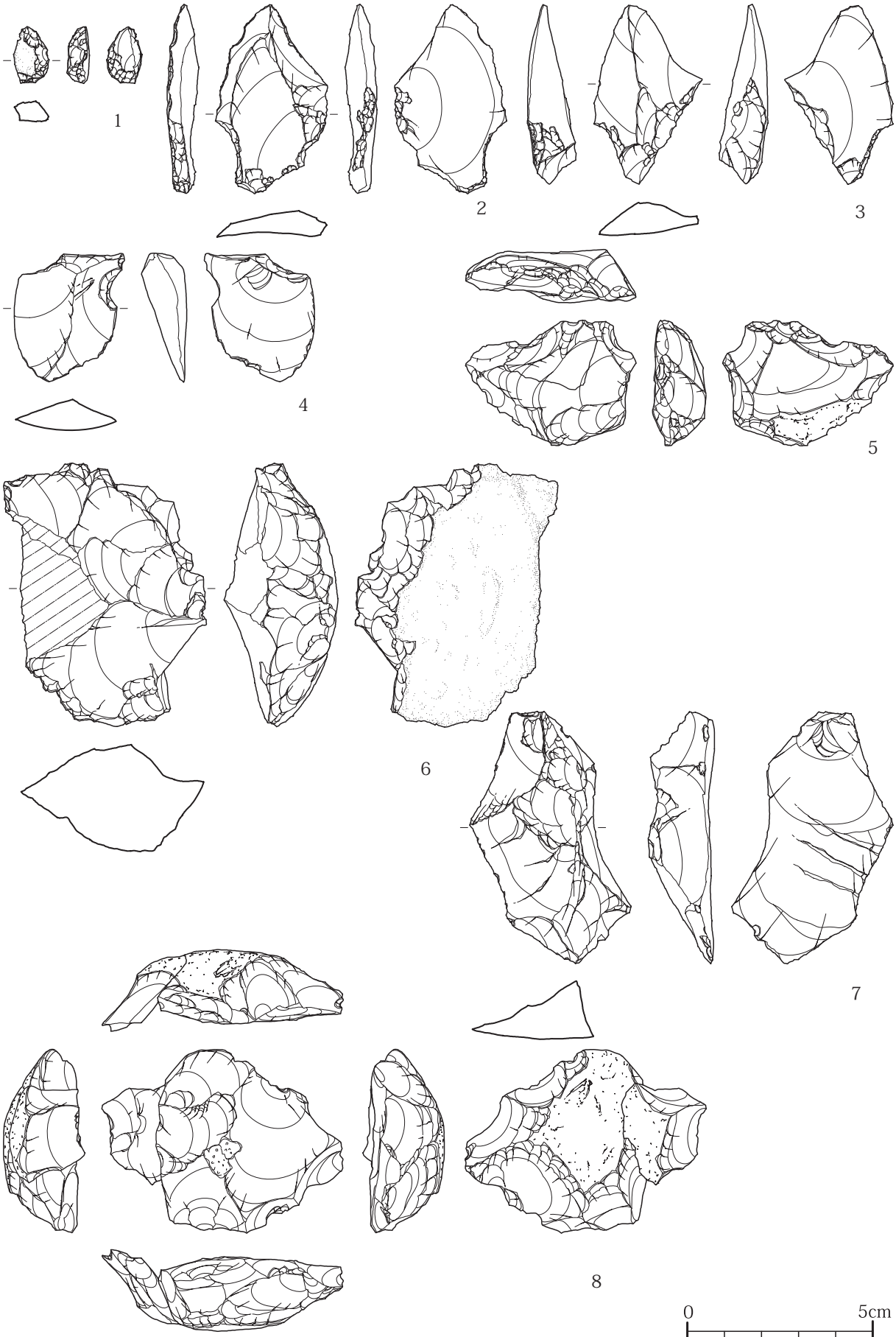
２・３はいわゆる今峠型ナイフ形石器である。４の剥片、５の剥片同士の接合、６の石核はその生産に伴う資料と考えられる。

９は10～15の接合資料であり、14が石核である。15は打面調整らしきものも見られるが、アクシデンタルな割れによって生じた剥片であろう。16は17～19の接合資料であり、17が石核である。目的とした剥片のみどこかに移動されたのかもしれない。打面転移を介在し、不定形剥片が剥離されたと考えられる。

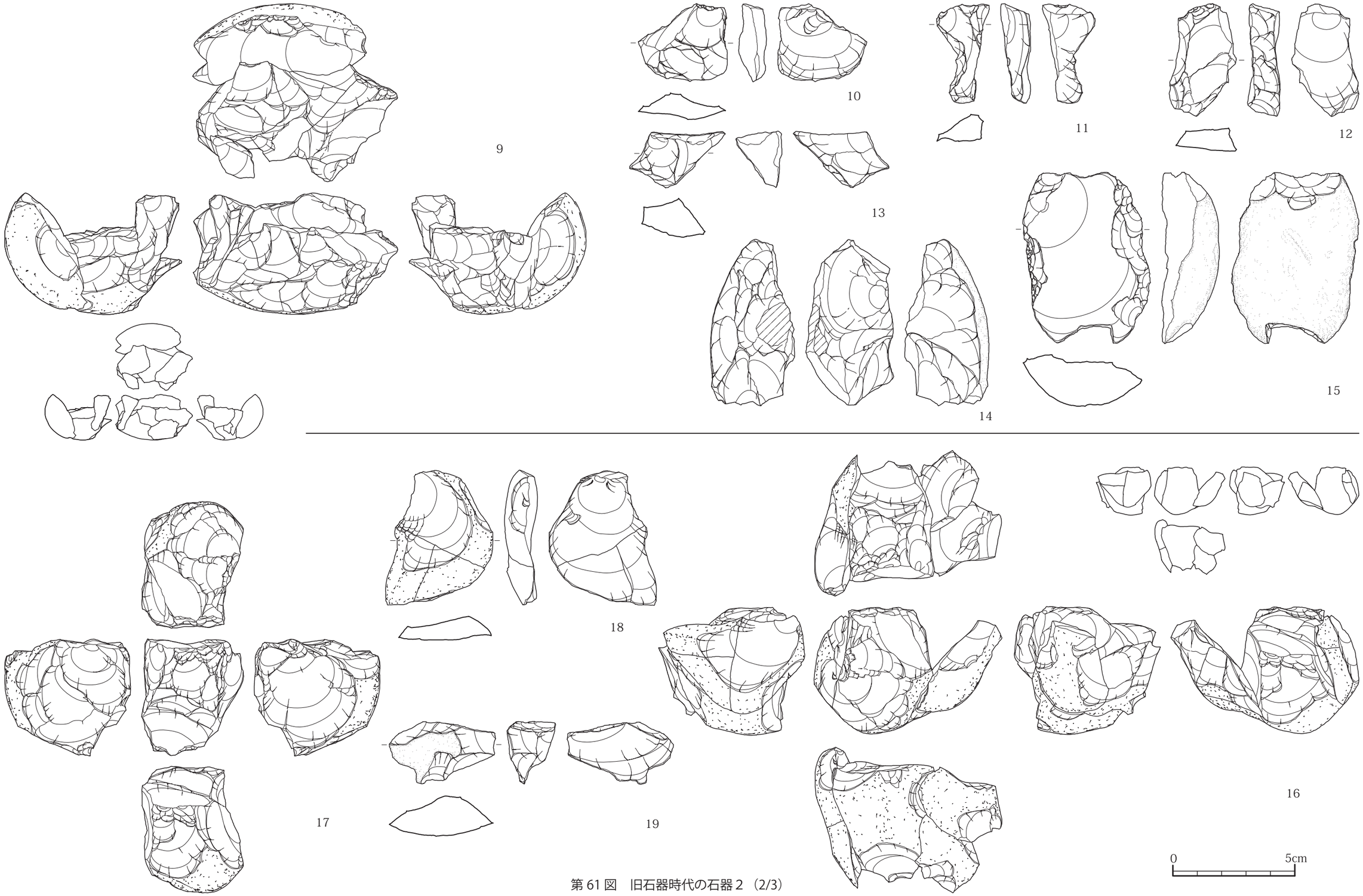
ホルンフェルスの一群は縦長剥片獲得を意識した接合資料と考えられる。ホルンフェルスの資料は風化が著しく、層を移動しているものは縄文時代期の遺物との弁別が難しかったが、形態より類推し旧石器と判断した。

第62図24は礫器で、他に同一母岩は見あたらなかった。25は尾鈴山酸性岩類の意識的な剥片と判断した。26は表面のすべらかな砂岩である。敲石か磨石であったろうと考えられるが、両端が欠損しているため詳細は不明である。

第59図　SI16実測図（1/20）



第 60 図　旧石器時代の石器 1（2/3）



第 61 図　旧石器時代の石器 2（2/3）

第 62 図　旧石器時代の石器３（2/3・1/2）

第５節　縄文時代

Ⅲ～Ⅳ層にかけて集石遺構と土器、石器類を検出した。ほとんどが早期の所産であり、遺構は調査区外にも広がっている様子が、壁面から観察できた。アカホヤ降灰以降の遺物は、表土中からで、姫島産黒曜石の石鏃等が出土している（第65図27）。

縄文時代早期

遺構は散礫を伴う集石遺構15基が検出された。遺物は土器、チャート、頁岩製の打製石鏃、剥片獲得に伴うホルンフェルス製石器、敲石等の礫石器類が出土した。

【集石遺構】（第７表参照）

散礫と集石遺構はすべてⅣ層で検出された。散礫はＢ区北部側とＡ区南部端側に密集しており、それらの下部にある集石遺構は散礫除去後に認定を行った。散礫除去前から、特に礫が密集しており、下部に集石遺構があると推定される箇所も、周囲と一律に礫を一定の厚さで取り除いた。散礫の疎な部分は集石遺構の範囲が明らかであったため、そのまま認定した。そのため、図化時の平面形態が散礫の粗密による影響を受けている。

集石遺構埋土と周辺の土色に変化がなく、掘込みを認識するのは困難であった。そこで、礫を全て取り除いた後にできたくぼみを、掘込みとして記録した。構成礫の配置等から、少なくとも一部に関しては確実に掘込みが存在していたことが予想されたからである。

SI3は調査区外にさらに伸びている可能性があったが、１基全ての範囲を検出しているものとして、図化した。図中の、SI12の破線は掘込みの予想ラインである。

集石遺構同士の切り合いはなく、検出面からも積極的な時期差の可能性は見いだせなかった。礫材は全て尾鈴山酸性岩類の拳～幼児頭大の礫を利用していた。円～亜角礫が中心であり、河原石の転石利用であろう。集石遺構内からは別府原式土器が出土している。

SI14は、その形態と検出状況が他と異なっていることから、単独で、時期差を持って存在していた可能性がある。

【遺物】

打製石鏃

チャート製と流紋岩製がみられる。チャートは数種の母岩が見受けられるが、それぞれに対応した素材剥片、二次加工剥片、砕片が出土している。目立った石核がみられないため、剥片状態での搬入か、再加工の場であろう。流紋岩は薄い剥片の周囲を調整して中心に素材面を残すものと、全面加工のものがある。製品のみの確認であり、搬入品である可能性が高い。

37は石錐であり、39は35と同じ母岩の二次加工剥片であるが、削器の可能性もある。

ホルンフェルス製石器

剥片が多く出土した。微細剥離、二次加工等があるかもしれないが、粉がふくような著しい風化のため観察できない。そのため、図化もほとんど行っていない。46・47は石核であり、球心状に剥離されている。剥片獲得に伴った石核と考えられる。46は礫器又は、スクレイパー的な要素も残す。

削器

48は頁岩製の削器である。

磨石・敲石

磨石は質の良い緻密な尾鈴山酸性岩類を利用しており、表面は丁寧に磨かれ、一部赤化している。敲石は砂岩で、SI1を構成していた礫のひとつであった。周囲の礫に比べ、目立って赤化度が低く、SI1を検出後すぐに認識できた。

土器

Ⅲ層、Ⅳ層から縄文土器が出土した。小片が多く、口縁部から底部まで復元される物はなかった。土器の個々の詳細な観察は土器観察表にゆずる。

第69図52～67は胎土に１㎝前後の繊維痕を含む無文の一群である。

52～63は明赤褐色を呈した無文土器である。条痕調整の後丁寧なナデを施し、明瞭な指頭痕が残る。口縁部は端部を丸く成形したものと、とがるように作り出すものとがある。出土個体それぞれは非常に似通っており、胴部のみだと一見同一個体であるかの様であるが、口縁部の形状から数個体あることがわかる。３㎝程度残存した底部より、尖底の砲弾形

第７表　集石遺構観察表

遺構名	Gr.	層	最大長（m）	最大幅（m）	掘込（m）	検出状況 認定方法	礫の状態	その他の所見
SI1	A	Ⅳ層上面	1.0	0.9	0.08	散礫除去前	破損した尾鈴山酸性岩類で構成。	別府原式底部伴出
SI2	A	Ⅳ層上面	1.0	0.7	0.14	上部から密集部が推定できたため、集石の範囲を残すように意識しながら、散礫を除去した。	破損した尾鈴山酸性岩で構成	別府原式伴出
SI3	A	Ⅳ層上面	0.8	0.6		散礫除去前だが、調査区外に続いている礫の部分があったため、正確な形態は不明。	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI4	B	Ⅳ層上面	1.2	1.0	1.00	散礫除去前	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI5	B	Ⅳ層上面	0.6	0.4		散礫除去後に認定	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI6	B	Ⅳ層上面	1.0	1.0	0.28	散礫除去前から認識していたが散礫除去後に図化した。	比較的完形に近い円礫が掘込みに沿って敷き詰められている。	
SI7	B	Ⅳ層上面	1.1	1.0	0.15	散礫除去前に認定	破損した尾鈴山酸性岩で構成	別府原式伴出
SI8	B	Ⅳ層上面	0.8	0.7	0.20	散礫除去後に認定	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI9	B	Ⅳ層上面	1.2	1.0	0.18	散礫除去後に認定したが輪郭は除去前から意識していた。	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI10	B	Ⅳ層上面	1.4	1.0	0.24	散礫除去後に認定したが輪郭は除去前から意識していた。	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI11	B	Ⅳ層上面	1.1	1.0	0.18	散礫除去後	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI12	B	Ⅳ層上面	1.4	1.1		散礫除去後	集石内を太い竹根が通っており、大部分が破壊されていたが石の並びから集石遺構と判断した。本来はSI9やSI10等と同じ形態だったと思われる。	
SI13	B	Ⅳ層上面	0.7	0.5		散礫除去後	破損した尾鈴山酸性岩で構成	
SI14	B	Ⅳ層中	0.5	0.5	0.18	Ⅳ層掘削中。Ⅳ層上面では検出できず。	掘込み中にまばらに礫が浮いた状態で出土。礫は破砕した10㎝前後の小片数個。	黒色埋土１層。微細な炭化物を含む。
SI15	B	Ⅳ層上面	0.6	0.4	0.08	散礫除去後	破損した尾鈴山酸性岩で構成	

の器形をしていたことがうかがえる。大分県域でいう陽弓式に相当する土器と考えられる。

65～67は52～63に比べると色調が暗く、薄手で条痕調整が明瞭である。図示した物は全て同一個体であろう。64は無文の一群ととらえたが、胎土や色調はむしろ68・69に近い。条痕調整が明瞭に残る。

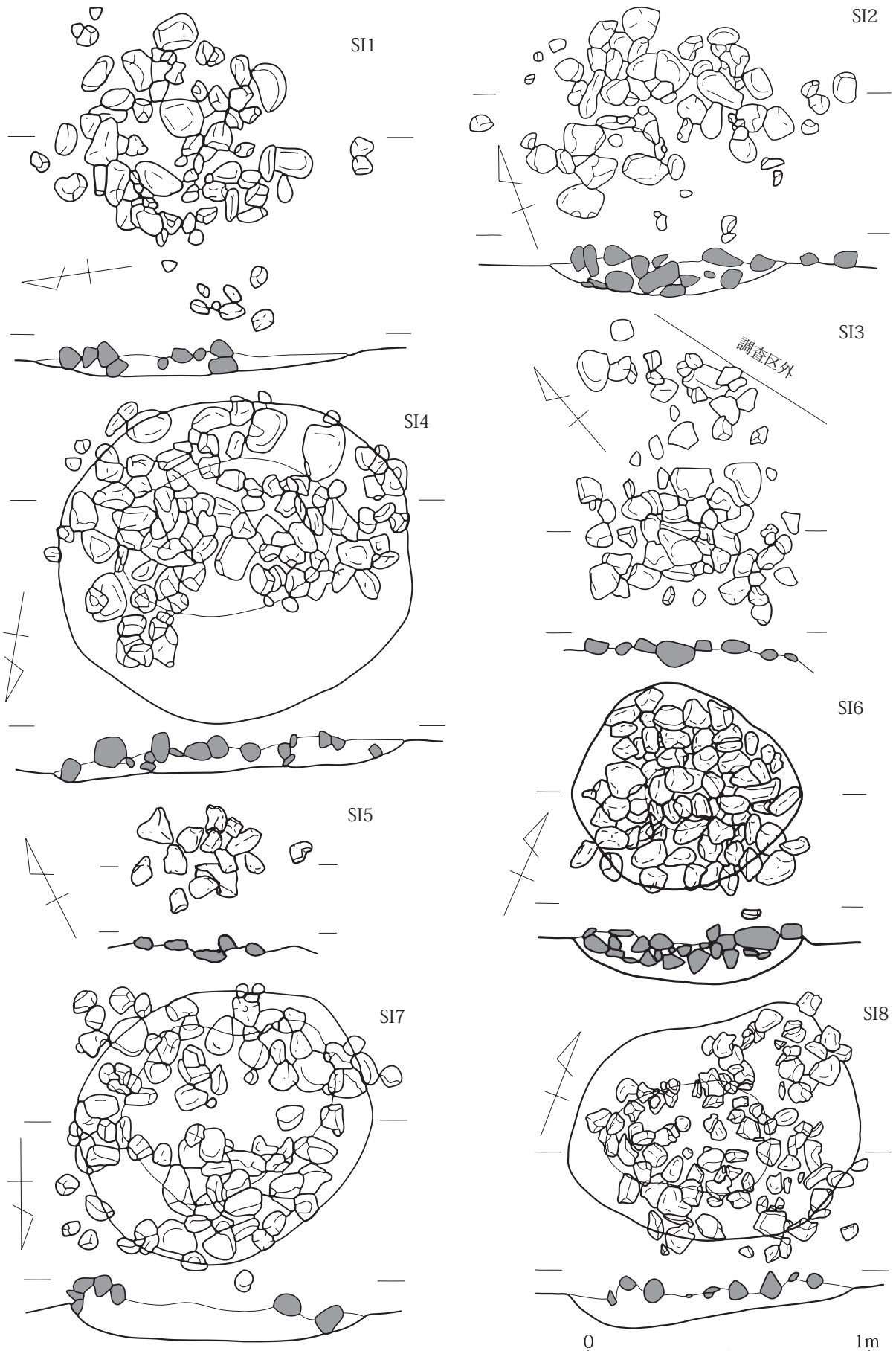
68・69は小片であるが、下部に撚糸の痕跡があり、器壁の薄い塞ノ神式土器である。

第70図70～79は貝殻条痕を持ち、いわゆる別府原式土器と呼ばれる一群である。本遺跡の集石遺構に伴う型式と考えられる。外器面は横位または斜位の貝殻条痕、内器面は丁寧なナデで調整されている。胎土がやわらかく摩滅が激しい。図示した口縁部は全て別個体である。貝殻腹縁による刺突、棒状工具による刺突等のバリエーションがみられる。

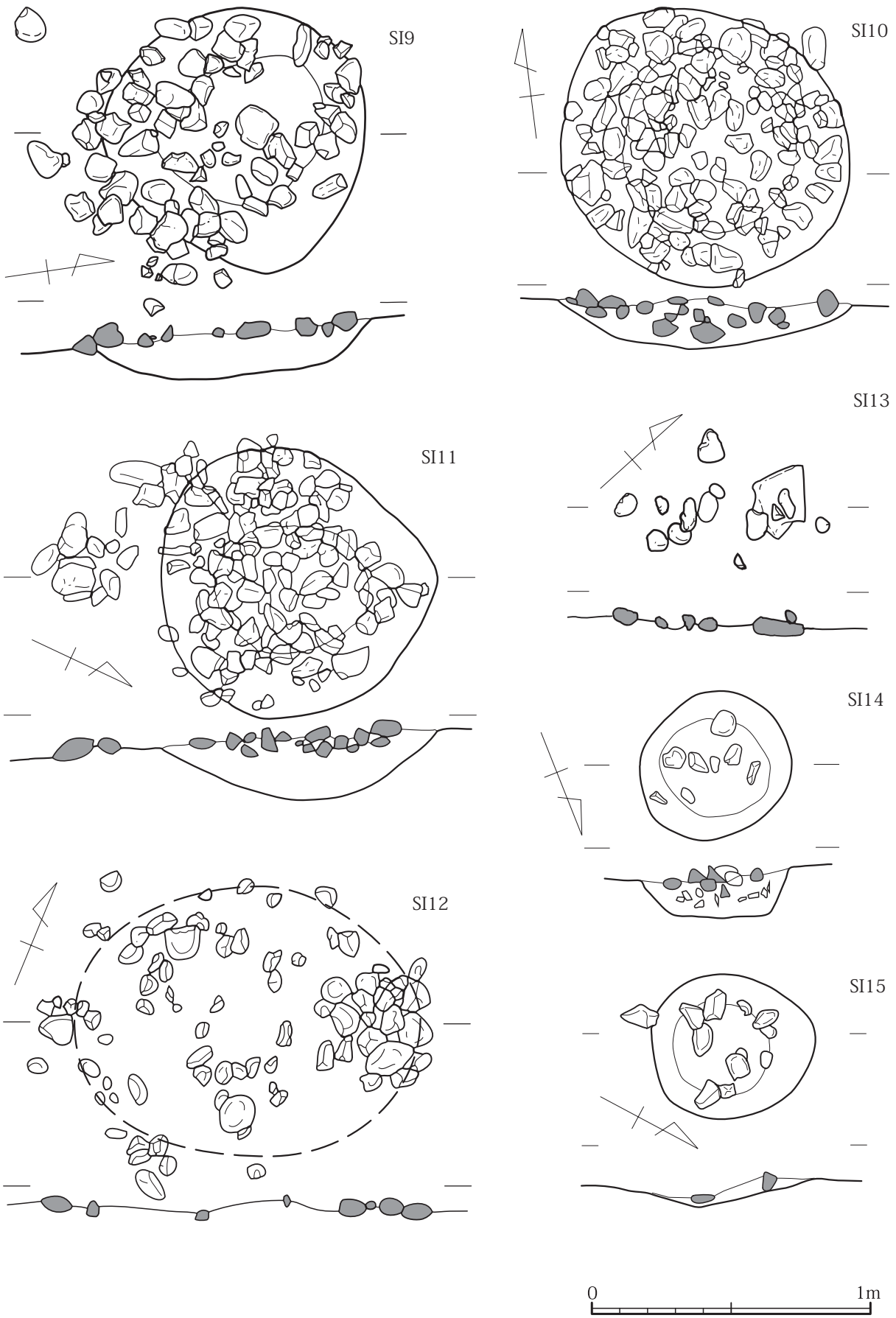
明赤褐色を呈する繊維を含む無文の一群は、別府原式土器群の平面分布とは、異なる箇所で出土した印象を受けた。また、取り上げの際出土層位も若干、別府原式土器よりも下部にあったような感触を、調査者は持っている。

しかし、ドットデータではなく一括して取り上げたため、出土レベルの詳細なデータが残っていない。

出土層位（Ⅲ・Ⅳ層）による全体重量の比較を試みたところ、明赤褐色の無文土器の方が数十ｇ重かった。とはいえ、二次移動や、土器の重量による分析に対する厳密性の問題もあり、決定的要素にはならないのが残念である。

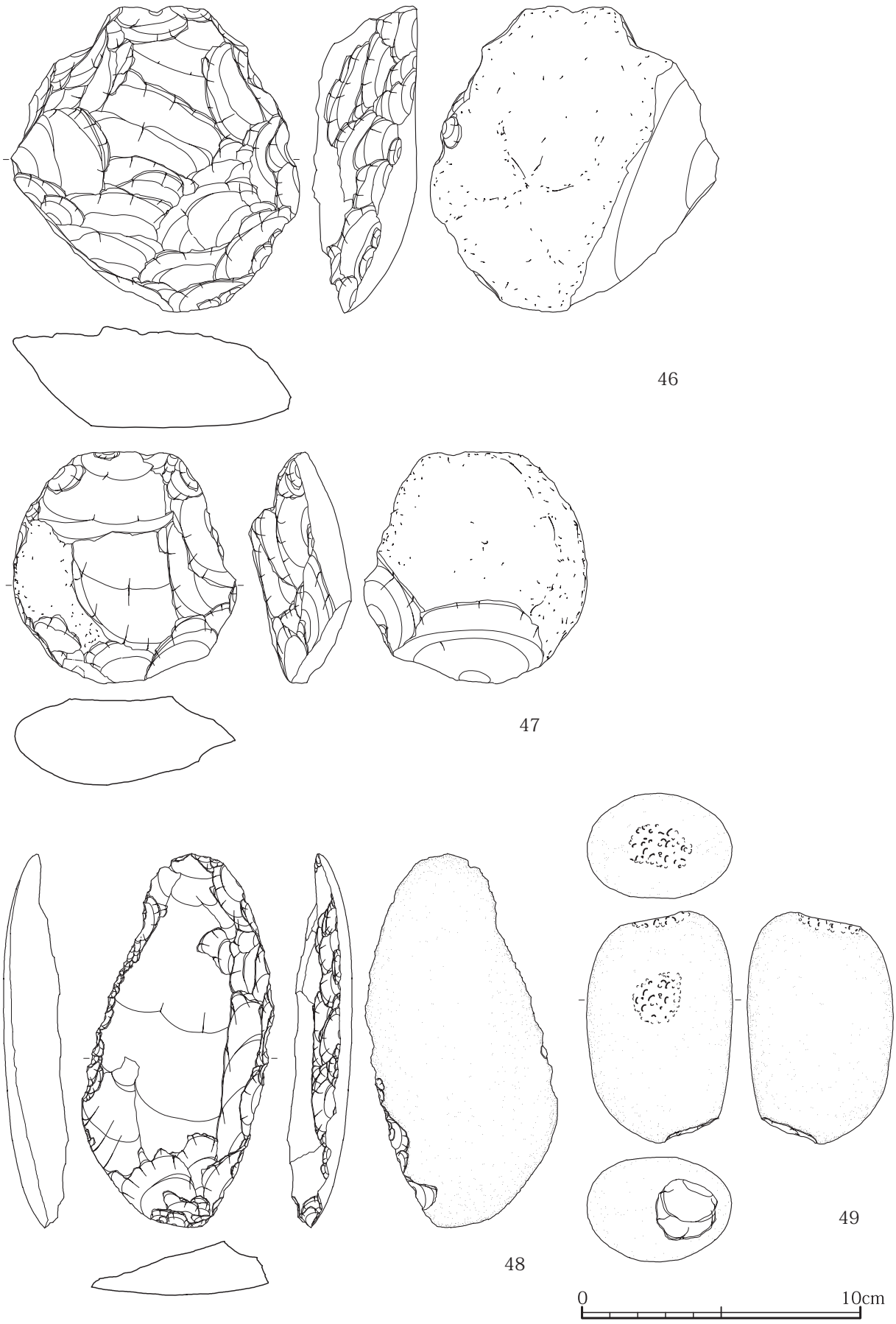


第 63 図　集石遺構実測図 1 （1 /20）

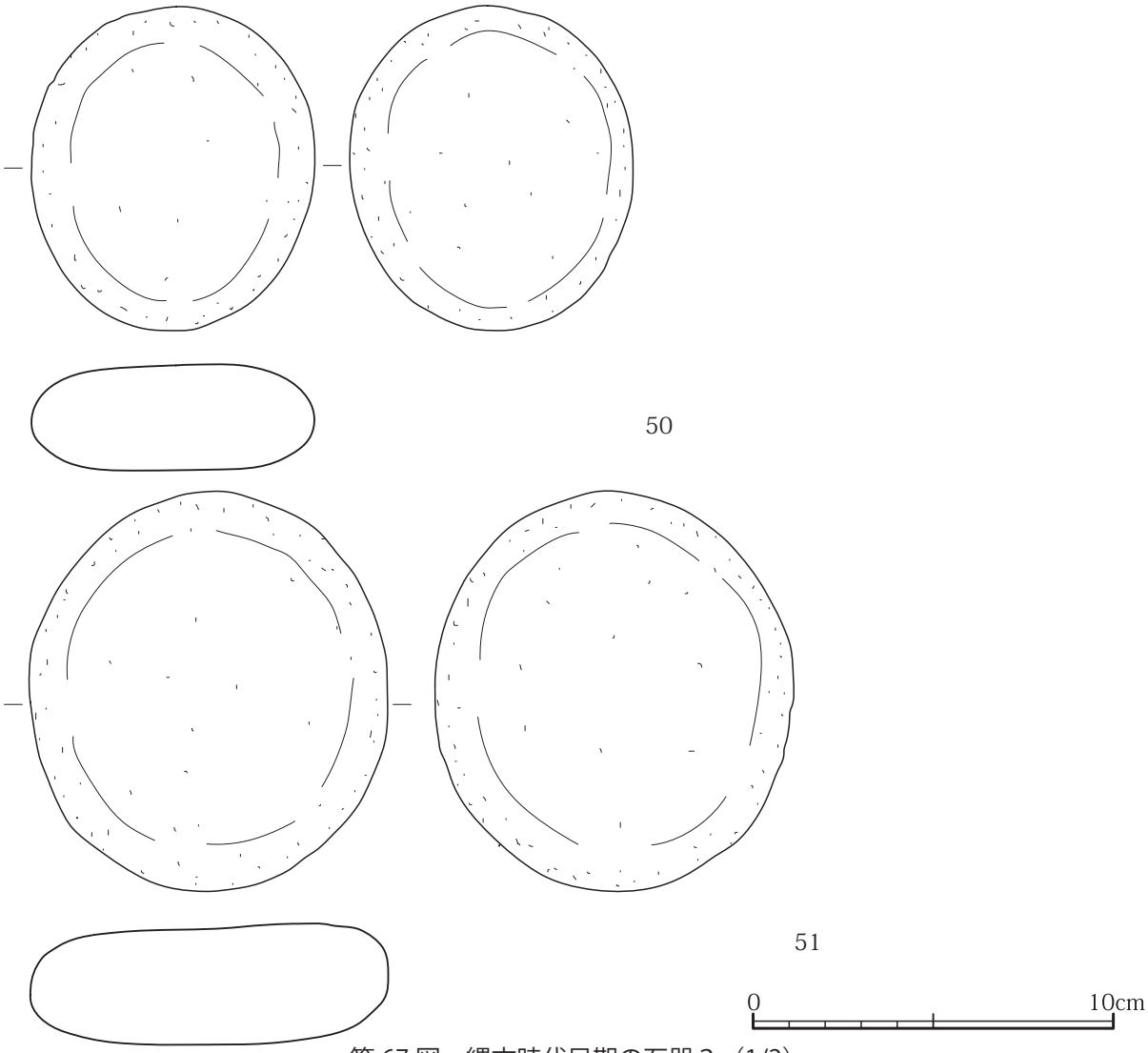


第 64 図　集石遺構実測図２（1/20）

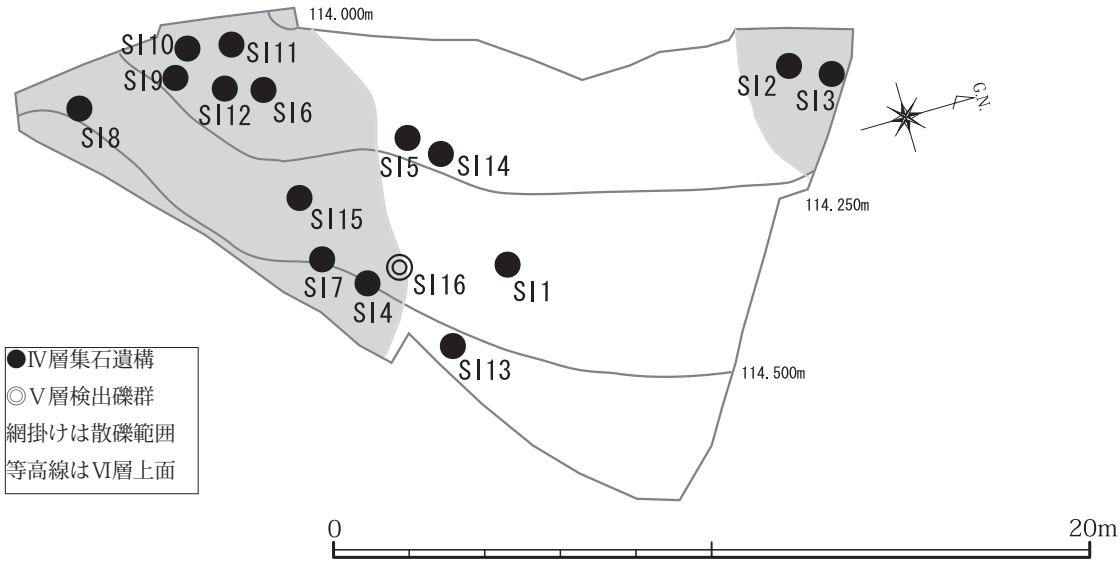
第 65 図　縄文時代早期の石器 1 （2/3・1/2）　(42・44)



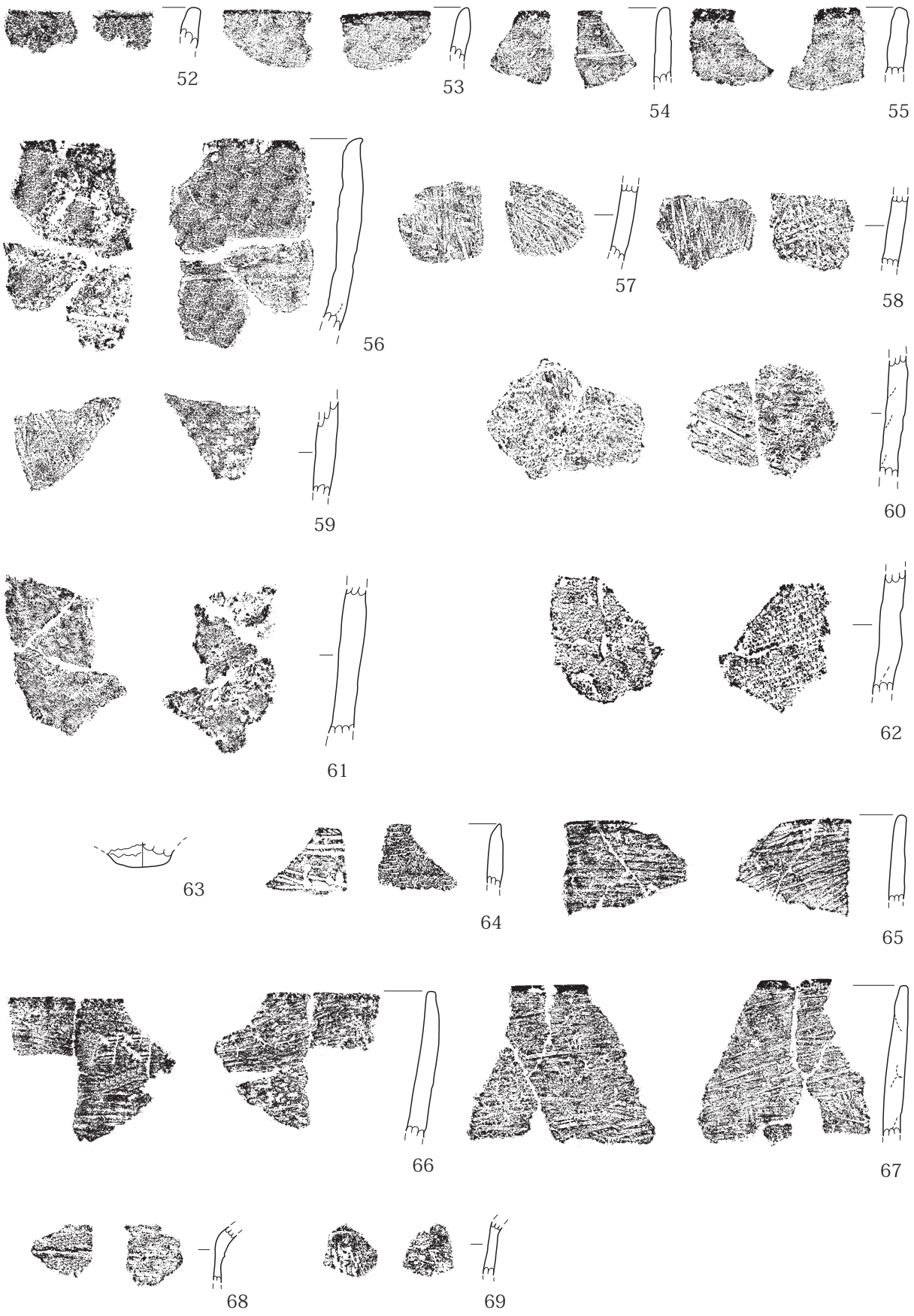
第 66 図　縄文時代早期の石器２（1/2）



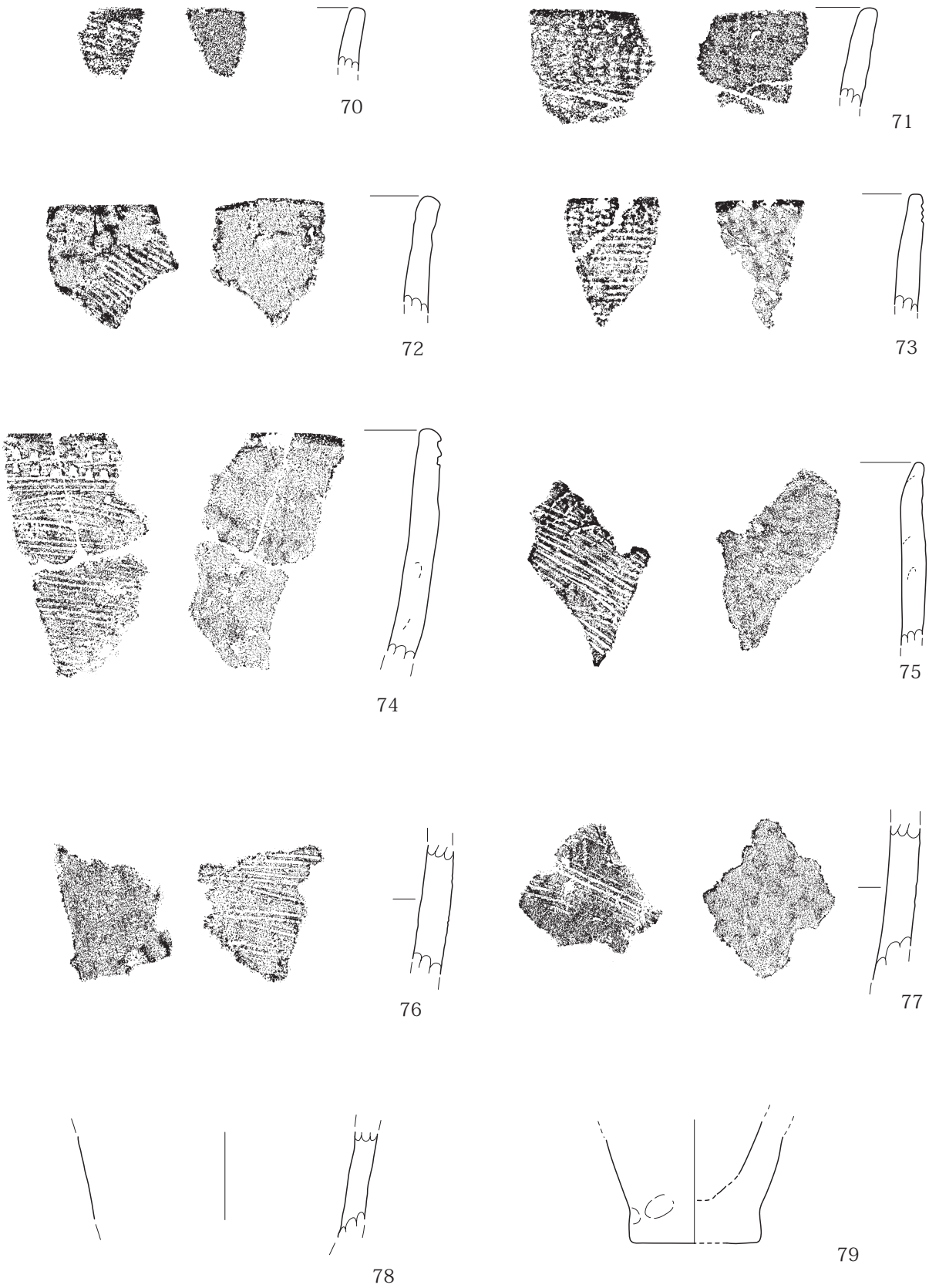
第 67 図　縄文時代早期の石器 3 （1/2）



第 68 図　遺構配置図（1/200）



第 69 図　縄文時代早期の土器 1 （1/3）



第 70 図　縄文時代早期の土器２（1/3）

第6節　小結

立野第２遺跡では後期旧石器時代から縄文時代早期にかけての良好な包含層が確認された。約200㎡足らずの調査区のため、調査はさらに広範な遺跡の一端を表しているにすぎないと考えられるが、遺構・遺物の密度は高かった。ここにその成果を概略する。

【旧石器時代】

旧石器時代の資料はＢ区にかたまって出土した。単独時期で存在しているように思われる。礫群の周囲からは石器は見つかっていないが、検出層位は同じである。しかし、同時期性は明言できない。

遺物は今峠型ナイフ形石器に関係する資料が出土した。第60図２は横剥ぎで刃部に加工が入り、高鍋町北牛牧第５遺跡でみられるような典型的な今峠型とは様相が異なっている。

石器石材は黒色系の流紋岩が主体となり、白色系流紋岩には大きな剥片が見られないというのは、注目すべき点である。

ホルンフェルスの利用状況は、調査面積の関係もあり、明らかではない。

【縄文時代】

縄文時代の調査は、集石遺構が台地の端部又は斜面地に密集するという、宮崎県の縄文時代早期遺跡のあり方と重なるものであった。本遺跡のそれらはおそらく、別府原式土器期に存在しており、全てが同時に存在していないにしても、形成スパンはかなりの短期間であったと考えられる。

出土した石器は石鏃が中心であった。石核が見られず、欠損品や剥片が主体であった。このことから、本遺跡が石鏃の再加工の場であったか、或いは獲物処理する場であった可能性が高いだろう。

他に、剥片生産に伴うホルンフェルス製石器が多量に出土した。剥片は風化のため、使用痕や二次加工を観察する事が著しく困難である。けれども、石核２点に対しての剥片量の多さと、上記の石鏃からみた場の利用の観点から、刃器としての利用を積極的に想定したい。剥片を生産後、すぐにその場で使用する状況であったということも十分考えられるだろう。

また、検出されている集石遺構の礫材は、尾鈴山酸性岩類がほぼ100％を占めるにもかかわらず、剥片生産に伴う石器石材はホルンフェルスであった。利用目的により、明確な石材選択が行われていたことが推察される。

縄文時代早期の時期、名貫川は現在流れる箇所より、さらに遺跡に近い場所に位置していた。名貫川の河原から、目的に沿って石を採集してくる様が想像される。

明赤褐色を呈する無文土器と、黄白色を呈する貝殻条痕文土器については第５節で出土位置が分かれる可能性を指摘した。陽弓式に比定されるであろうこの土器は近年、押型文土器や貝殻条痕文系早期土器との分離や並行関係が議論されているところである。

本遺跡出土の土器は、県内では北部に多く、南部側に希薄な様相を呈している。都農町はその中間地点に位置するといえる。また、高千穂町古城遺跡出土土器に見られるようなコブを持つ土器の特徴と、とてもよく似ている。おそらく復元される器形は陽弓遺跡や古城遺跡出土のものより、小形である。

別府原式土器の編年的位置づけが、押型文土器に並行すると言われる無文土器の後にくるとすれば、別府原式土器が貝殻条痕円筒形土器と別系統に位置するという見解を支持することになる。また、無文土器が単独型式で存在するとも言える。

本遺跡の調査記録では、積極的に評価できない状況であるが、可能性は指摘しておきたい。

参考文献

綿貫俊一 1996「第４章　陽弓遺跡」『横手遺跡群発掘調査報告書』大分県文化財調査報告書第93集

九州縄文時代早期研究ノート 2004『縄文時代早期研究ノート』第２号

菅付和樹・福田泰典編 2003『布平遺跡　古城遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第74集

第Ⅴ章　立野第５遺跡と立野第２遺跡の調査を通して

今回、直線距離約200m、比高差約30mの隣り合った２遺跡を同時に発掘調査、整理作業をする機会に恵まれた。立野第５遺跡と立野第２遺跡は時期的に、旧石器時代と縄文時代早期という共通した要素を持っていた。両遺跡を同時に調査することで、ここは似ている、ここは違う、と比較する機会が自然と多かった。ここでは調査中、気になった点を中心にまとめてみたい。

【礫群、集石遺構の礫材について】

立野第５遺跡と立野第２遺跡では、礫を素材とする遺構がほとんどであった。これは東九州自動車道建設に伴う旧石器、縄文時代の調査では普遍的な状況といえる。ここでは両遺跡内に存在する礫の確保と利用についてまとめる。

両遺跡の集石遺構及び礫群に使用されていた石材は、90％以上が尾鈴山酸性岩類で残りがチャートという、石材分類の必要がない程、尾鈴山酸性岩類が主体であった。また、立野第２遺跡では、調査中に現場内での観察のみしか行っていないが、チャートすら混じっていなかった。

立野第５遺跡の礫材の組成は当地域の段丘礫層の構成と全く同じである。そして、使用されていた礫も質の悪い人頭大～１m前後の大きさを持っていた原形を、分割したような状態であった。立野第５遺跡の北東側には過去に段丘礫層の露頭であったろう部分が存在していた。従って、礫はここから（または掘り起こして）利用していた可能性が高い。

礫の整理中に多数観察されたのは、巨礫の皮面のみ、または、皮面が剥がされた中身のみ存在しているケースである。

石器を製作する時の石器石材採取の時、火を焚き露頭から石材を割って得る民族例がある。この種の礫の割れ方は、そのような採取のされかたも想定させる。これは後に述べる赤化度とも関連している。

立野第２遺跡では、立野第５遺跡で使用されていた礫よりも、質の良い尾鈴山酸性岩類が使用されていた。川を流れ、質の良い部分が比較的残った転石であろう。そして、ホルンフェルスが大量に石器石材に使われているにもかかわらず、集石遺構の材には混じっていなかった。名貫川の河原から選択的に採取されていたと考えられる。

この両遺跡の礫材差の解釈は、遺跡地点の差による要因が最も大きいと考えるのが妥当である。少なくとも時期差ではないのは明確である。なぜなら、立野第２遺跡では旧石器から縄文時代を通して河原石の利用であり、逆に立野第５遺跡はどの時期も段丘礫の利用が中心だからである。

遺跡内の礫について、しばしば、礫の大量搬入といったことが議論されるが、実際には、礫材を入手する場所はごく近くにあり、人自身が礫を確保しやすい場所に移動していた可能性の方が高いと言えるだろう。それが立野第５遺跡では露出した段丘礫層であり、立野第２遺跡では河原石であったのだと考えられる。

礫の赤化度について、両遺跡について共通して言えることは、質の良い尾鈴山酸性岩類ほど、赤化度が低いということである。そしてチャートは非常に赤化度が強くなる傾向にある。

礫の赤化度は被熱の割合にも左右されるだろうが、一方では礫材に制約されるとも考えられる。段丘礫層の皮面のようなもともと風化している粗い石材はより赤化しやすいとの結論を立野第５遺跡での礫整理で得た。再利用しているような傾向も認められた。また、石材の種類により赤化比率は変化する。石材種ごとの赤化度の判断が必要となってこよう。

東九州道自動車道の一連の調査は宮崎県内を縦断しており、近年は旧石器時代の礫も収蔵している。礫材の再検討を行うことが可能である。礫材の入手がどこにあるのか、各地点での石種を時期を問わず礫材の消長を検討することで、礫材の確保行動等の解明に今後つながっていくと考えられる。

※段丘礫と河原石について

厳密に言うと段丘礫も過去の河原石である。しかし、ここでは以下の定義としたい。

段丘礫は人類史以前に存在した河川の上流側の巨

礫のことを指す。河原石とは河川の河口側に行くにつれて河原に堆積する、岩石が摩滅した小形の転石のことを主に指す。

立野第５遺跡については、この人頭大以上の段丘礫を使用していると判断した。整理作業時の礫の接合作業による原形の復元を根拠としている。皮面という表現もそのために使用しており、それは数十万年の風化面を持つと考えられ、オレンジがかっている。皮面の内部も使用されており、中身という表現をとっている。

【石器石材について】

立野第５遺跡と立野第２遺跡では多くの石器が出土したが、その中心となるのは流紋岩であった。また、尾鈴山酸性岩類の石器も数多く見つかった。都農町は宮崎平野最後の北端部に位置し、宮崎県北部の要素が流れ込んでくる地域である。石器石材の傾向は、両遺跡共通していることから、このこともまた、その影響下にあると思われる。

確実な地元石材である尾鈴山酸性岩類の多用はその一端である。第Ⅳ章６節で、尾鈴山酸性岩類石器の特徴を述べたが、それらに利用されているのは質の良いものばかりである。礫群や集石遺構に使われる礫材と異なり、石器石材では遺跡外からの選択的搬入が想定される。

白色系流紋岩（以下白色系 Ryu）は県北部に特徴的な石材である。東九州道関連遺跡でも、調査地が北に移るにつれて黒色系の石材の中に白色系の石材が、ちらほらと見られるようになってくる。両遺跡では白色系 Ryu がかなりの割合で出土した。しかし、黒色系 Ryu に対し、白色系 Ryu には明確な石核が見受けられないのが注目される。大形のトゥールの存在に対し、対応する石核がないのである。

黒色系 Ryu は石核もあり、接合資料も多く存在し遺跡内生産が確実である。白色系 Ryu は二次加工剥片、或いは大形の剥片が素材となっているのが目立つ。

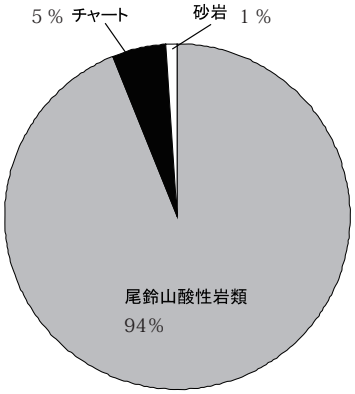
これらのことから当地域は白色系 Ryu の強い影響を受けながらも、搬入はまだ、分割礫状態での持ち込みに至らない地域であることがわかるのである。

参考文献

藤木　聡編 2006『唐木戸第４遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 126 集

徳永貞紹 1990「九州の縄文時代集石遺構」『肥後考古』第７号

宮崎県農政水産部農業振興課 1984『土地分類基本調査 - 都農 -』



立野第５遺跡礫材重量比率

第８表　石材分類表

大分類	小分類（略称）	特徴
流紋岩（黒色）系	Ryu1	黒褐色で、流れるような縞模様が入る。礫面はなめらか。
	Ryu2	黒色で、風化面にまだらの模様が入る。手触りはすべすべしている。
	Ryu3	漆黒を呈し、緻密。手触りはなめらか。従来頁岩とされていた種。
流紋岩（白色）系	Ryu4	白色。手触りはすべすべしているものと、風化の度合いによりわずかに粉をふくものがある。内部は黒色緻密。礫面はなめらかで、イトミミズのような溝が入る。
	Ryu5	白色。灰色の縞模様が入る。手触りはすべすべしている。
	Ryu6	灰白色。手触りはすべすべしている。内部は黒色緻密。
チャート	Ch1	緑色を呈し濃い、緑色の筋が網状にはしる。表面なめらか。
	Ch2	黒色を呈し、表面は光沢がある。不純物がなく非常に質がよい。
	Ch3	灰色に黒色の筋が網状に走る。表面なめらか。
	Ch4	層状の節理が多く走り、石器製作にはあまりむかない。色も数種混じる。
	Ch5	白色で表面は若干がさつく。日にかざすと半透明。質はよい。
	Ch6	灰緑色で半透明だが日にかざしても透けない。表面なめらか。ナイフ形石器１点のみ確認。
ホルンフェルス系		
	Ho1	明るい茶色を中心とした色調。粉をふいている。風化が著しく、表面は柔らかい。内部は黒灰色緻密。尾鈴山酸性岩類を捕獲しているものがある。
	Ho2	灰色を中心とした色調。粉をふいている。風化は著しいが、Ho1 より風化面は多少硬め。内部は黒灰色緻密。
	Ho3	その他のホルンフェルス
黒曜石	Ob1	飴色を呈し、硬質で透明度が高い。不純物はわずかだが、気泡を含む部分がある。礫面はざらざらしている。桑ノ木津留産に比定。
	Ob2	黒色で不純物を多く含む。日東産に比定。
	Ob3	黒色硬質で不純物が入らない。腰岳産か。
	Ob4	灰青色を呈し、風化面はがさがさしている。内部は灰黒色でにぶい光沢を発する。北部九州産と思われる。
	Ob5	乳白色を呈する。姫島産に比定。
尾鈴山酸性岩類	Os	
頁岩系	Sh1	黒灰色を中心とし、薄い層状に剥離する。ホルンフェルス化が進んでいるものもある。
	Sh2	赤色を中心とし、表面が薄い層状に剥離する。
砂岩	Sa	
泥岩		
珪質頁岩		チャートではないが、表面がなめらかで有機質なもの。
安山岩	An	風化面は白灰色、内部は黒灰色。表面ざらざら。

遺物観察表

立野第５遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	層	注記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
1	F4	Ⅷ	1981	Ryu1	Kn	3.0	1.1	0.4	1.1	製品。二側縁加工
2	E4	Ⅷ	2131	Ryu1	Kn	3.2	1.1	0.6	1.6	製品。二側縁加工
3	F4	Ⅷ	1925	Ryu1	Kn	4.0	1.0	0.5	1.6	製品。二側縁加工
4	E5	Ⅷ	1591	Ryu1	Kn	4.5	1.1	0.5	2.7	製品。二側縁加工
5	E5	Ⅷ	1633	Ryu1	Kn	3.2	0.9	0.4	1.2	製品。二側縁加工
6	F4	Ⅷ	2496	Ryu1	Kn	3.0	1.0	0.5	1.3	製品。先端部欠損。二側縁加工
7	E5	Ⅷ	1625	Ryu1	RF	2.6	2.1	0.5	2.9	ナイフ未製品か
8	E4	Ⅷ	1707	Ryu1	RF	2.6	2.1	0.8	5.0	
9	E5	Ⅷ	1603	Ryu1	RF	2.1	3.8	0.9	4.6	ナイフ未製品か
10	F4	Ⅷ	1928	Ryu1	RF	4.3	1.8	0.7	4.8	ナイフ未製品か
11	E5	Ⅷ	2547	Ryu1	Ｓｃ	6.3	3.2	0.8	19.8	縦長剥片素材。ノッチを持つ。末端が尖るように加工。
12		Ⅷ	1532・1533	Ryu1	Ｓｃ	6.3	4.1	1.7	29.6	接合資料 13 の一部。端部に礫面を残す。折れは作業時か。
13		Ⅷ	1532+1533+1888+1916 +2495	Ryu1	接合					縦長剥片素材。端部に微細剥離がめぐる。末端を尖るように加工。
14	F4	Ⅷ	1915	Ryu1	Ｓｃ	6.8	3.1	0.9	20.6	4 点接合。12 の背面に 2 点の小形剥片が接合する。
15		Ⅷ	1853+1898+1917+2105+ 2438+2487+1859	Ryu1	接合	4.3	5.9	2.4	32.5	縦長剥片が 7 点接合。礫面を残す
16		Ⅷ		Ryu3	RF	3.2	2.5	0.6	5.2	横長剥片
17		Ⅷ	1557+1559+1562	Ryu1	接合	5.0	4.9	5.2	114.3	石核に端正な縦長剥片が接合。石核は縦長又は幅広剥片を打面転移して剥離。
18		Ⅷ	1778+1922+2086+2121	Ryu1	接合	8.7	8.8	2.8	52.6	4 点接合。幅広剥片と端正な縦長剥片。頭部調整持つ。
19		Ⅷ		Ryu1	接合					24 点接合。20～31 を含む。縦長剥片を志向した大小の不定形剥片を剥離。
20	F4	Ⅷ	2442	Ryu1	Fl	2.5	2.3	0.8	2.2	
21		Ⅷ	1912	Ryu1	Fl	3.4	1.6	0.5	1.9	
22		Ⅷ	1850	Ryu1	Fl	3.1	2.1	0.7	3.5	
23		Ⅷ	1866	Ryu1	Fl	3.7	3.2	1.4	13.5	
24		Ⅷ	2507	Ryu1	Fl	3.3	3.8	1.2	13.4	
25		Ⅷ	2099	Ryu1	Fl	3.8	3.1	1.1	11.1	
26		Ⅷ	1882	Ryu1	Co	4.3	5.0	3.0	66.2	礫面を残す
27		Ⅷ	1920	Ryu1	Fl	4.3	2.5	1.3	12.4	
28		Ⅷ	890+1863	Ryu1	Fl	4.4	4.8	1.2	12.7	剥離時の偶発的割れによる接合
29		Ⅷ	2043	Ryu1	Fl	2.9	5.0	1.9	24.0	
30		Ⅷ	2523	Ryu1	Fl	5.5	4.8	1.7	37.6	幅広剥片。礫面残す
31		Ⅷ	2518	Ryu1	Fl	7.0	3.8	1.4	30.9	縦長剥片
32	E5	Ⅷ	1626	Ho1	Kn	2.0	0.6	0.6	0.8	製品。一側縁加工
33	F4	Ⅷ	1986	Ho1	Kn	2.3	0.8	0.6	0.9	製品。切断されているか。二側縁加工
34	F4	Ⅷ	1993	Ho1	Kn	2.3	1.0	0.4	1.0	製品。切断されているか。二側縁加工
35	F4	Ⅷ	1820	Ho1	Kn	2.3	1.0	0.6	1.4	製品。未製品の可能性を残す
36	E4	Ⅷ	2420	Ho1	Kn	2.3	1.3	0.5	2.0	先端部欠損の製品か未製品一側縁加工
37	F5	Ⅷ	1531	Ho1	Kn	3.0	1.1	0.9	3.1	湾曲した剥片を素材とする製品。二側縁加工
38	E5	Ⅷ	2687	Ho1	Kn	3.6	1.2	0.6	2.0	製品。二側縁加工
39	D5	Ⅷ	2560	Ho1	Kn	2.6	1.6	0.7	3.8	ナイフ未製品か。
40	F4	Ⅷ	1971	Ho1	RF	2.1	1.2	0.3	1.3	
41	F4	Ⅷ	1979	Ho1	RF	2.5	1.3	0.6	2.5	
42	F4	Ⅷ	1977	Ho1	RF	3.7	1.9	0.6	5.6	縦長剥片
43	F4	Ⅷ	2085	Ho1	RF	2.8	1.5	1.3	5.2	
44	E4	Ⅷ	1718	Ho1	RF	4.4	1.5	0.6	3.5	製品の可能性もある。
45	F4	Ⅷ	2018	Ho1	RF	4.3	1.8	1.0	6.8	ナイフ未製品か
46	F4	Ⅷ	1988	Ho1	RF	4.3	1.1	0.6	2.5	
47	D4	Ⅷ	817	Ho1	RF	4.7	1.3	0.7	3.8	
48	E4	Ⅷ	1763	Ho1	RF	2.3	1.4	0.6	2.7	未製品。先端部の折れた製品とも考えられる。
49	E5	Ⅷ	2426	Ho1	Fl	6.5	2.6	2.3	38.2	縦長剥片
50	E5	Ⅷ	1615	Ho1	Fl	2.2	0.9	0.5	0.9	
51	F4	Ⅷ	1910	Ho1	Fl	2.7	1.6	0.9	2.4	打面再生剥片
52	F4	Ⅷ	1802	Ho1	Fl	4.7	1.3	1.1	6.0	縦長剥片
53	F4	Ⅷ	1995	Ho1	Fl	2.7	0.8	0.4	1.1	縦長剥片
54	E4	Ⅷ	1672	Ho1	Fl	3.3	1.7	0.6	3.3	縦長剥片
55	F4	Ⅷ	1846	Ho1	RF	6.4	2.7	0.6	8.5	大きめの剥片を大きく二次加工で改変
56	E4	Ⅷ	2468	Ho1	Fl	4.0	2.7	0.4	4.7	縦長剥片
57		Ⅷ	1749+1847+2450	Ho1	接合	4.1	5.6	1.2	23.0	幅広剥片２点接合。節理面での剥離が見られる
58	E5	Ⅷ	2511	Ho1	Fl	5.7	1.8	0.8	12.2	縦長剥片
59	E5	Ⅷ	1601	Ho1	Fl	4.3	3.2	1.2	15.8	
60		Ⅷ	2549+2454	Ho1	接合	3.9	5.0	1.5	15.9	縦長剥片２点接合

立野第５遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	層	注記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
61		Ⅷ	1827+2039	Ho1	接合	6.6	4.1	1.5	27.3	剥片どうしの接合
62	E5	Ⅷ	2550	Ho1	Fl	3.7	5.1	1.3	24.0	幅広剥片
63	F4	Ⅷ	1803	Ho1	Fl	4.9	2.8	1.8	20.2	腹面側に湾曲した縦長剥片
64	E3	Ⅷ	1755	Ho1	Fl	5.4	3.0	0.8	13.6	腹面側に湾曲した縦長剥片
65	E4	Ⅷ	1768	Ho1	Fl	6.2	4.4	1.5	37.7	腹面側に湾曲した縦長剥片
66	E6	Ⅷ	2692	Ho1	Fl	5.9	3.0	1.7	27.5	断面三角形の縦長剥片
67	E5	Ⅷ	2688	Ho1	Ｓｃ	4.5	4.0	1.1	24.2	65 のような剥片を成形したと思われる
68	F4	Ⅷ	2031	Ho1	Co	3.5	2.6	1.8	15.2	縦長剥片
69	D5	Ⅷ	1647	Ho1	Co	5.6	2.9	1.8	31.0	縦長剥片
70	F4	Ⅷ	1988	Ho1	Co	4.3	1.1	0.6	2.5	
71	F4	Ⅷ	1919	Ho1	Co	3.2	1.5	1.4	8.7	
72	F4	Ⅷ	2117	Ho1	Co	4.3	3.7	2.2	39.7	
73	F4	Ⅷ	2436	Ho1	Co	4.5	2.2	1.7	16.2	
74		Ⅷ	1597+1783	Ho1	接合	3.4	6.2	3.2	72.8	偶発的な割れによる接合か
75	D5	Ⅷ	2657	Ho1	Ｓｃ	5.3	7.0	1.8	55.0	横長剥片素材
76		Ⅷ	2664+2657	Ho1	接合	6.8	7.9	2.1	62.3	76 と剥片との接合
77	D4	Ⅷ	2269	Ho1	Fl	6.7	8.0	1.4	62.9	節理により横長風
78		Ⅷ	2660+2567+2649+2647	Ho2	接合	6.5	5.1	1.5	28.5	端正な縦長剥片どうしの接合
79		Ⅷ	2557+2559+2656	Ho2	接合	6.6	4.1	1.5	27.3	縦長剥片の接合
80		Ⅷ		Ryu3	接合					81 ～ 83 の接合資料
81		Ⅷ		Ryu3	Fl					縦長剥片
82		Ⅷ		Ryu3	Fl					縦長剥片
83	D4	Ⅷ	1651	Ryu3	Co	4.8	4.2	5.1	112.0	礫面を下に残す
84	E6	Ⅷ	2694	Sh	Ｓｃ	10.3	7.3	2.0	198.1	礫面を大きく残す。末端部を加工。頭部調整
85	E6	Ⅷ	2695	Ch	Fl	5.9	2.4	0.9	17.5	縦長剥片
86		Ⅷ		Ch	UF					縦長剥片素材。
87		Ⅷ	2464+1762+2475	Ryu4	RF	6.6	8.2	2.4	68.8	3 点接合。横長剥片素材。
88		Ⅷ		Ryu5	Fl					横長剥片
89	D5	Ⅷ	2745	Ryu6	RF	6.6	4.6	2.7	78.9	掻器の可能性
90	E4	Ⅷ	2536	Ho2	RF	8.0	4.0	3.4	103.5	
91	F4	Ⅷ	2522	Ho2	RF	7.7	5.2	2.0	91.8	縦長剥片
92	D4	Ⅷ	2737	Sa	Ha	9.5	8.0	3.0	342.5	
93	D5	Ⅷ	2541	Sa	Fl	6.3	4.0	1.8	36.4	礫面を残す
94	F5	Ⅷ	1554	Sa	Ha	11.5	6.1	4.2	353.0	
95		Ⅷ		Os	Rf					
96		Ⅷ	1161+1612+1720	Sa	台石					
97	E6		1369	Ho1	Tr	2.6	1.7	0.7	3.0	製品
98	E5		1056	Ho1	Tr	3.3	2.0	0.7	3.7	製品
99	E6		1069	Ho1	Tr	2.8	2.1	0.8	4.0	製品
100	E6		1171	Ryu4	Tr	2.6	1.5	0.7	2.4	製品。横剥ぎ素材か
101	E6		1178	Ryu4	Tr	2.7	1.6	0.7	2.3	製品
102	E6		958	Ryu4	Tr	2.8	2.2	0.8	3.6	製品。横剥ぎ素材か
103	E6		1390	Ryu4	Tr	3.0	1.6	0.8	3.2	製品。横剥ぎ素材か
104	E6		2208	Ryu4	Tr	3.5	1.4	0.7	3.0	製品
105	E6		1336	Ryu4	Tr	3.0	2.1	0.7	3.6	製品
106	D4		503	Ryu4	Tr	3.5	2.0	0.9	4.4	製品
107	E6		1241	Ryu4	Tr	2.5	1.8	0.8	4.0	製品。制作時の折れか
108	E6		1343	Ryu4	Tr	3.5	2.0	1.0	5.4	製品。先端部に加工または使用痕持つ製品。
109	E6		1152	Ryu4	Tr	3.4	1.7	0.9	6.0	製品。
110	E4		1106	Ryu4	Tr	4.8	1.5	1.0	6.7	製品。先端の微細剥離は使用痕か。
111	E6		942	Ryu4	Tr	4.2	2.3	0.9	6.3	製品
112	E6		2592	Ryu4	Tr	5.0	3.0	1.1	10.1	製品。斜軸、横剥ぎ素材か
113				Ryu4	UF					切り出し型で、先端に微細剥離を持つ。
114	E5		1586	Ho3	Kn	3.5	1.5	0.9	3.3	製品。狸谷型。Ⅶ層出土だが、Ⅶ層上位の文化層に属すると判断。
115	E6		1377	Ryu4	Kn	3.7	1.6	0.6	3.4	製品。狸谷型
116	D6		2399	Ryu4	Kn	5.3	2.2	0.7	8.0	製品。端正な縦長剥片の基部を加工。剥片尖頭器の可能性もある。
117	E5		907	Ryu4	Kn	9.2	2.6	1.8	40.0	製品
118	D5		2746	Ryu4	Co	3.0	3.1	2.1	23.0	製品
119			一括	Ryu4	RF	2.7	2.0	0.7	3.8	縦長剥片素材
120			T14	Ryu4	RF	3.8	2.0	0.8	5.8	縦長剥片素材
121	D3		348	Ryu4	RF	5.3	2.7	1.1	20.8	縦長剥片素材

立野第５遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	層	注記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
122	E6		929	Ryu4	Co	5.1	2.8	22.0	28.1	石刃剥離の痕跡
123	E5		961	Ryu4	RF	9.3	4.9	1.8	81.4	縦長剥片
124			一括	Ryu4	Ｓｃ	3.9	4.2	2.0	30.7	礫面を残す。石核掻器
125	F4		13	Ryu5	Fl	5.3	3.5	1.6	29.9	
126	E5		1048	Ryu6	Fl	3.3	7.0	1.4	21.7	横長剥片
127	E3		1481	Ryu4	Fl	4.2	2.9	1.8	15.5	打面再生剥片
128	C4		1499	Ryu4	RF	5.0	4.3	1.5	30.9	
129	E6		1335	Ryu5	Fl	4.4	4.7	1.8	39.9	幅広剥片
130		Ⅵ	2600	Ryu1	Co	5.3	4.7	3.9	83.8	縦長剥片剥離
131		Ⅵ		Ryu1	Kn	3.5	1.2	0.4	1.5	二側縁加工。未製品か
132				Ryu1	Kn	3.3	1.0	0.6	2.0	製品。二側縁加工
133				Ryu1	Kn	2.8	1.4	0.3	1.2	製品二側縁加工
134				Ryu1	Kn	3.0	1.0	0.6	1.6	製品。二側縁加工
135				Ryu1	Kn	3.1	1.3	0.3	1.8	製品。二側縁加工
136				Ryu3	Fl					石刃
137		Ⅵ		Ryu1	Kn	3.3	1.3	0.4	1.8	製品。二側縁加工
138		Ⅵ		Ryu3	接合					縦長剥片を剥離した後打面再生をこころみる
139		Ⅵ		Ryu2	Co	4.8	6.6	4.6	162.8	140 の石核。幅広、縦長剥片を剥離
140		Ⅵ		Ryu2	接合					139 に剥片が接合。
141	E6		955	Ryu2	Co	5.0	5.2	5.2	142.7	
142	E3		337	Ryu2	RF	3.4	1.4	0.5	3.1	
143	F4		604	Ryu2	RF	2.4	2.5	0.8	4.1	斜軸剥片素材。今峠型の可能性も
144	E6		1415	Ryu2	RF	1.8	3.0	0.7	3.7	斜軸剥片を素材。先端部を横切る形で細かな剥離が入る。今峠型の可能性も
145	F2		1313	Ryu2	RF	3.9	1.8	0.9	6.2	
146	F5		264	Ryu2	RF	4.4	2.0	1.0	9.2	
147	E5		2212	Ryu2	Kn	3.9	2.0	0.8	5.4	製品
148	E3		707	Ryu2	Kn	4.9	1.6	1.0	7.8	製品
149	D4		808	Ryu2	Kn	5.6	1.7	1.3	16.1	製品
150	D6	Ⅵ	2730	Ryu2	Kn	5.6	1.7	1.0	7.4	製品。打留除去
151	D6	Ⅴ	2153	Ryu2	Kn	5.3	1.7	0.8	6.8	製品。礫面を残す。
152	F5		454	Ryu2	UF	5.8	2.7	1.3	12.1	側縁、端部に微細剥離が巡る。掻器的要素
153	E5		209	Ryu2	Kn	5.2	2.2	1.0	9.9	製品
154	F4		204	Ryu2	Fl	4.2	4.2	1.1	13.7	礫面を残す、幅広剥片
155			T14	Ryu2	Kn	4.1	1.8	10.0	5.8	
156	E6		1151	Ryu2	Ka	4.1	2.0	1.8	14.7	未製品
157	D3		373	Ryu1	Ka	4.5	2.3	1.8	14.9	折れ
158	E5		1096	Sh2	FP	5.2	2.7	1.3	14.9	先端部折れ
159	F4		17	Ryu1	FP	5.8	3.1	1.9	32.8	先端部折れ
160	F5		467	Ryu1	Ｓｃ	6.3	4.0	1.4	35.5	縦長剥片素材
161	D5		772	Ryu1	RF	7.7	2.5	2.2	23.5	
162			726+844	Ryu2	Ｓｃ	7.6	3.7	1.0	22.8	端正な縦長剥片素材。側縁、端部を微細剥離が巡る。掻器的要素。
163			2571	Ryu1	RF	7.1	2.4	2.7	25.8	
164			571	Ryu1	Co	7.4	3.0	3.1	76.9	
165			777+768+2571	Ryu1	接合	8.1	7.9	3.0	112.3	3 点接合。163 を含む。
166	E3		690	Ryu1	Ｓｃ	6.4	4.4	1.6	28.4	
167				Ryu2	Ｓｃ					
168				Sh2	FP					
169				Ryu6	Kn					
170				Ryu2	Rf					
171				Ryu2	Rf					
172	E6		1006	珪質	Kn	2.7	0.7	3.9	1.0	製品。二側縁加工
173			536	Ryu2	Kn	2.0	0.9	0.3	1.0	製品。二側縁加工。打留を残す
174	E4		111	珪質	Kn	1.9	1.0	0.4	1.0	未製品か
175	F4		66	Ryu3	Co	6.5	6.2	5.5	234.4	
176	F4		4	Ch	Kn	2.4	1.1	0.4	1.3	178 と同一母岩。製品。
177	E5		1418	Ch	Kn	2.5	1.1	0.3	1.1	製品。
178			121+457	Ch	接合	2.6	6.3	4.4	62.6	石核と剥片 1 点接合。176 と同一母岩。
179	C3		731	珪質	Tr	2.9	1.5	0.6	3.5	
180	D6		2134	Ch	Ka	4.3	1.4	1.1	8.1	製品と未製品の可能性を残す
181	D6		2161	Ch	Ka	1.4	1.4	0.8	2.3	角錐状石器かナイフ形石器の未製品の可能性

立野第５遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	層	注記 No.	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	所見
182			T13	珪質	Ka	6.4	3.1	2.1	38.1	未製品
183	F5		265	Ch	Kn	6.9	1.8	1.1	14.1	
184	F3		908		Co	4.7	4.7	2.8	49.8	多方向から幅広剥片を剥離。
185	E6		2622	Ho3	Kn	4.0	1.2	0.5	2.4	製品。二側縁加工
186			先行トレンチ	Ho3	Kn	3.2	1.2	0.5	1.6	製品。二側縁加工
187	E6		1337	Ho3	Fl	6.7	2.6	1.4	33.5	縦長剥片
188			2325+2327+ 仮	Ho3	接合	2.8	8.5	3.9	63.1	
189	D3		1493	Ho2	FP	6.2	2.8	1.6	24.6	先端部欠損
190			T18	Ho2	Ka	6.4	2.1	1.5	14.9	
191	D6		2586	Ho2	FP	7.3	3.1	1.1	23.5	
192	E5		489	Ho2	RF	5.4	3.2	1.2	23.7	縦長剥片
193	D3		381	Ho2	Ka	7.0	3.3	2.8	64.5	
194	E6		1330	Ho2	RF	7.4	4.6	1.6	50.1	縦長剥片
195	E4		43	Ho2	Fl	4.5	4.7	3.4	61.1	
196			T13	Ho2	Fl	5.8	4.8	1.9	47.8	
197	D4		2273	Ho2	Co	6.6	4.8	2.9	107.7	
198			一括	Ho2	Co	1.8	3.0	0.7	3.7	礫器の可能性も持つ。
199	F5		2313	Ho2	RF	6.7	5.4	2.3	69.4	
200	F4		5	Ho2	Co	6.2	5.2	5.3	207.2	
201	D5		746	Ho1	FP	5.7	2.7	1.3	20.7	
202	F6		1023	Ho1	FP	6.4	4.2	1.9	49.7	
203	D6		2329	Ho1	FP	7.4	3.3	1.3	33.8	
204	D5		2243	Ho1	FP	5.7	2.4	1.7	24.9	
205	E2		722	Ho1	Fl	9.1	6.6	3.1	192.7	縦長剥片
206	E6		1373	Ho1	Fl	8.4	3.2	1.2	30.5	縦長剥片
207	E6		2193	Ho1	FO	12.6	3.6	1.3	53.9	大形の縦長剥片素材。打点側を粗く調整して基部をつくる。
208	F4		15	Ho1	Co	6.5	6.0	4.0	210.8	
209			594	Ho1	Fl	4.2	6.0	1.9	37.7	横長剥片
210			352+1209	Ho1	接合	4.1	7.6	5.7	149.3	石核に剥片 1 点接合。幅広剥片を多方向から剥離
211	F4		145	Ho1	Co	5.0	4.3	3.8	99.3	
212	D6		2326	Ho1	Co	5.2	3.6	3.9	97.4	
213			T13+T8	Ho1	接合	8.5	6.5	4.7	193.0	石核に剥片 1 点接合
214			496+2257	Ho1	接合	5.4	8.1	2.1	79.5	
215	D6		2729	Ho1	UF	5.5	8.4	1.9	63.1	横長剥片素材。礫面を残し、打面調整らしきものがみられる。
216	E6		1341	Ho1	Fl	3.3	5.4	2.4	39.5	
217	F4		140	Ho1	Co	5.0	4.0	3.5	74.9	
218	D2		1518	Ob1	Co	1.5	2.1	1.1	3.7	幅広剥片を多方向から剥離。礫面残る
219	E6		959	Ob1	Fl	1.7	2.3	0.5	2.5	打面調整をもつ二次加工剥片
220	D5		774	Ob1	RF	2.0	2.1	0.7	2.7	
221				Ob1	MB					
222				Ob1	MB					
223				Ob1	MB					
224	D5		441	Ob1	MC	1.8	1.6	1.0	2.6	
225	D6		2135	Ob1	MC	1.8	0.8	0.6	1.5	
226			一括	Ob1	MC	1.4	1.4	1.6	1.0	
227	F4		1310	Ob1	MC	1.4	1.1	0.6	1.3	
228	F5		1119	Ob1	MC	1.1	0.8	0.6	1.3	
229	E5		867	Ob1	MC	1.7	1.5	0.5	2.4	
230				Ob1	MC					
231				Ob1	MC					
232	E6		2731	Ob1	MC	1.5	1.1	0.7	2.1	
233				Ob1	MC					
234	E6		1274	Ob1	MC	1.7	1.2	0.7	2.8	
235	E5		88	Ob1	MC	1.4	1.6	1.1	2.9	
236	E5		94	Ob1	MC	2.5	1.0	0.9	3.2	
237	D3		1496	Ob1	MC	1.8	1.6	1.1	3.2	
238	E4		418	Ob1	MC	2.5	1.5	1.1	5.0	
239	F5		298	Ob1	MC	2.7	1.5	1.8	8.3	
240				Ob4	MC					
241				Ryu3	MB					
242				Ryu3	MB					

立野第５遺跡出土石器計測表

No.	Gr.	層	注記 No.	石材	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	所見
243					MB					
244	E5		471	Ryu3	MC	2.0	2.5	2.2	12.3	
245	E4		415	Ryu3	MC	1.8	3.9	2.7	21.7	
246	D6		2144	Ryu3	MC	1.8	2.0	3.0	14.0	
247				泥岩	MC					畦原型。玉砂利を分割したような素材。西海技法の影響
248	F5		446	Ryu1	MC	2.1	3.7	1.2	10.0	
249				Ryu4	MB					
250				Ryu4	MB					
251				Ryu4	MB					
252	E3		831	Ryu4	MC	1.3	2.4	2.2	4.2	
253	E6		1387	Ryu4	MC	1.8	1.7	2.2	7.2	
254			一括	Ryu4	MC	2.7	3.0	1.8	12.6	打面転移を介在。礫面を残す
255	E3		838	Ryu4	MC	2.1	2.7	2.4	18.1	
256			T13	Ryu4	MC	3.1	2.9	1.8	7.5	
257	D6		2137	Ryu4	MC	1.4	2.5	2.5	23.0	
258	E3		347	Ryu4	MC	3.0	2.5	1.5	12.6	
259	D5		683	Ryu4	MB	2.9	4.8	2.9	41.1	
260	D6		1446	珪質	MC	1.5	1.9	2.0	8.6	
261				珪質	MB	2.8	1.4	0.3	1.2	
262	D3		664	Ho3	MC	2.1	2.9	2.7	22.4	
263	E6		957	HO3	MC	2.8	3.7	2.4	29.1	
264			一括	Os	Fl					縦長剥片
265			727+1227	Os	接合	5.0	5.8	2.3	63.6	縦長剥片２点接合。礫面残す。
266	F5		260	Os	RF	6.8	3.6	1.5	43.3	縦長剥片素材
267	E4		107	Os	Co	8.0	5.8	3.1	147.5	
268			51+45	Os	接合	8.3	6.3	3.6	184.9	２点接合
269	F4		2253	Os	Co	1.4	1.4	0.3	0.5	
270	E6		1079	Os	Co	7.5	6.8	4.8	304.8	縦長剥片剥離か。礫器の可能性も
271			2410+2573+2726	Os	接合					石核に剥片２点接合。不定形剥片を多方向から剥離。
272	F6		1452	Os	Co	1.9	5.1	1.0	8.8	礫器の可能性
273	F4		207	Os	礫器	13.2	9.6	5.1	829.5	礫面を多く残し、互い違いの１回の打撃を与えている
274	E4		38	Os	Co	10.0	6.6	3.6	252.1	礫器の可能性
275			298	Os	礫器					
276	D5		642	Sa	Ha	7.3	2.2	1.4	33.8	使用痕が明瞭でなく、全面すべらか。
277	D3		377	Sa	Ha	1.1	1.7	0.3	0.5	
278	D5		2682	Sa	Ha	2.5	1.5	0.6	1.3	
279	D5		851	Sa	Ha	6.0	3.7	3.6	123.1	
280			T16	泥岩	Ha					
281	E6		1010	Sa	Ha	7.0	5.4	3.6	205.4	折れている
282	F4		267	Sa	Ha	6.7	4.3	3.5	126.5	折れている
283			一括	Ryu3	Ar	2.1	1.6	0.5	1.3	製品。末端部欠損
284			一括	Ryu3	Ar	2.0	2.3	0.4	1.3	製品。先端部欠損。
285				Ch	Ar	1.2	2.3	0.5	2.4	製品。全面押圧剥離
286	D5		423	Ho 1	Ar	3.1	1.8	0.5	3.3	全面風化で剥離が明瞭でない
287	D6		964	A n	Ar	1.8	4.2	0.9	5.1	横型。基部はがじりにより欠損

凡例

剥片…Fl、二次加工剥片…RF、微細剥離のある剥片…UF、石核…Co、ナイフ形石器…Kn、台形石器…Tr、剥片尖頭器…FP、角錐状石器…Ka、石鏃…Ar、敲石…Ha、細石刃…MB、細石刃核…MC、掻器・削器…Sc

立野第２遺跡出土石器計測表

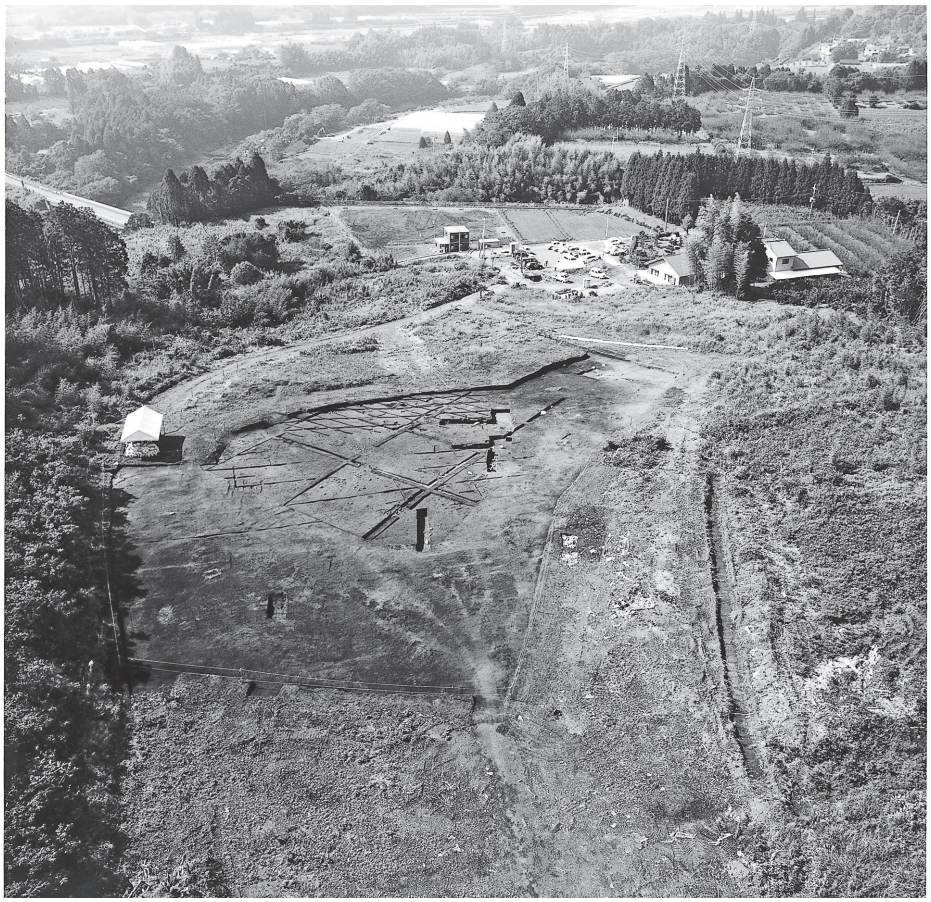
No.	区	層	注記 No	石材	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	所見
1	A	Ⅳ	115	Ob2	楔形石器	1.5	1.0	0.58	0.8	欠損
2	B	Ⅴ	284	Ryu 1	ナイフ形石器	5.1	3.0	0.83	9.0	今峠
3	B	Ⅴ	400	Ryu2	ナイフ形石器	4.8	2.9	1.29	10.6	今峠
4	B	Ⅴ	306	Ryu2	二次加工	3.4	2.9	1.19	6.3	今峠に関連する
5	B		428・432	Ryu2	接合					今峠に関連する
6	B	Ⅴ	387	Ryu 1	石核	7.1	5.4	3.03	94.2	今峠に関連する
7	A	Ⅴ	149	Ryu 1	剥片	6.7	4.3	1.75	31.4	
8	B		426・438	Ryu 1	接合					
9	B		294・301 ～ 303・308・383・395・396・454	Ryu 1	接合					
10	B	Ⅴ	301	Ryu 1	剥片	3.1	3.6	1.10	10.9	
11	B	Ⅴ	454	Ryu 1	剥片	4.0	2.1	1.20	6.9	
12	B	Ⅴ	294	Ryu 1	剥片	4.6	2.7	1.30	17.3	
13	B	Ⅴ	395	Ryu 1	剥片	2.3	3.9	1.85	9.9	
14	B	Ⅴ	303	Ryu 1	石核	6.8	3.6	3.43	90.8	
15	B	Ⅴ	302	Ryu 1	剥片	7.0	5.2	2.33	95.5	
16	B		214・370・347・423・443・444	Ryu 1	接合					
17	B	Ⅴ	397	Ryu 1	石核	4.7	4.1	5.12	129.5	
18	B		214・443・444	Ryu 1	剥片	5.5	4.4	1.32	25.4	
19	B	Ⅴ	370	Ryu 1	剥片	1.8	4.3	2.69	16.6	
20				Ryu 1	剥片					
21				Ryu 1	剥片					
22	B		217・264・320	Ho1	接合					
23	B		364・376	Ho1	接合					縦長剥片
24	B	Ⅴ	304	Os	剥片	9.5	5.7	3.67	184.7	
25	B	Ⅳ	271	Ryu 1	礫器	5.9	4.3	1.72	24.9	
26				Sa	磨石？					両端部欠損。表面滑らか
27			K1	Ob5	石鏃	2.8	2.3	0.46	1.6	
28	2T	Ⅲ	K3		石鏃	2.3	1.7	0.36	0.9	欠損
29	A	Ⅲ	5	Ryu 1	石鏃	2.9	2.3	0.48	2.3	欠損
30	A	Ⅳ	141	Ryu 1	石鏃	2.1	1.7	0.37	0.8	
31	A	Ⅳ	52	Ch	石鏃	1.0	1.6	0.38	0.5	欠損
32	B	Ⅳ	258	Ch	石鏃	1.6	1.4	0.39	0.7	
33	A	Ⅲ	128	Ch	石鏃	2.7	1.7	0.52	1.5	欠損
34	B	Ⅳ	215	Ch	石鏃	2.9	2.0	0.83	3.3	未製品
35	A	Ⅳ	135	Ch	石鏃	1.8	1.3	0.41	0.7	欠損
36	B	Ⅳ	324	Ch	石鏃	2.2	2.1	0.74	2.6	未製品
37	2T	Ⅲ	K1	Ob5	石錐	2.2	1.8	0.68	1.6	二次加工の可能性も
38	2T	Ⅲ	K2	Ch	剥片	2.8	2.4	0.79	2.6	石鏃生産に関連
39	A	Ⅲ	33	Ch	二次加工	4.0	2.8	0.84	9.7	削器か。石鏃生産に関連か
40	B	Ⅲ	177	Ch	二次加工	3.5	2.3	0.62	2.6	石鏃生産に関連
41				Ch	剥片					石鏃生産に関連
42	A	Ⅲ	125	Ho1	剥片	7.7	5.0	2.30	82.7	Ho 剥片生産に関連
43				Ch	剥片					石鏃生産に関連
44	A	Ⅲ	42	Ho1	剥片	7.4	7.7	1.62	77.6	Ho 剥片生産に関連
45	B	Ⅲ	172	Ch	剥片	4.2	3.3	1.26	12.0	石鏃生産に関連
46	B	Ⅳ	196	Ho1	石核	11.0	10.3	3.73	474.0	Ho 剥片生産に伴う
47	B	Ⅳ	238	Ho1	石核	8.3	8.0	3.61	234.7	Ho 剥片生産に伴う
48	A	Ⅳ	158	Sh	削器	13.4	7.0	2.30	169.7	礫面残す
49	A	Ⅳ	SI1	Sa	敲石	8.3	5.2	3.74	202.3	
50				Os	磨石					一部赤化
51				Os	磨石					一部赤化

立野第２遺跡出土縄文土器観察表

No.	出土区 層位	器種	部位	胎土	焼成	色調（内面） （外面）	調整（外面）	調整（内面）	繊維	備考
52	A Ⅲ	深鉢	口縁部	～0.5mmの透明、白色、黒色光沢、金色粒	良好	明赤褐色 赤褐色	ナデ	ナデ	○	
53	3T Ⅲ	深鉢	口縁部	～1mmの透明、白色、黒色光沢、1～3mmの茶色粒	良好	褐色 にぶい黄褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ、指頭痕	○	
54	B Ⅳ	深鉢	口縁部	～2mmの透明、白色、灰白色、黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
55	B Ⅳ	深鉢	口縁部	～2mmの透明、白色、灰白色黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
56	A Ⅳ A Ⅴ	深鉢	口縁～胴部	～1mmの白色、透明、1mmの黒色鋭光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	ナデ、指頭痕	○	
57	3T Ⅲ	深鉢	胴部	～1mmの透明、3mmの白黄色、赤褐色粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
58	3T Ⅲ	深鉢	胴部	～2mmの白黄色、1mmの白色粒	良好	橙色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
59	一括	深鉢	胴部	1mmの白色、黒色光沢、～1mmの灰白色、白黄色粒	良好	明赤褐色 にぶい黄褐色	条痕後あらいナデ	条痕後ナデ	○	
60	B Ⅲ	深鉢	胴部	～2mmの透明、白色、～1mmの黒色光沢粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
61	A Ⅳ	深鉢	胴部	～1mmの透明、灰白色、茶褐色粒	良好	明赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ	条痕後ナデ	○	
62	A Ⅳ	深鉢	胴部	～0.5mmの透明、白色、黒色光沢粒	良好	にぶい赤褐色 明赤褐色	条痕後ナデ、指頭痕	条痕後ナデ、指頭痕	○	
63	2T	深鉢	底部	～2mmの茶色粒	良好	褐色 褐色	ナデ		○	内面残存か？
64	3T Ⅲ	深鉢	口縁部	微細な白色、黒色光沢粒	良好	明褐色 明褐色	横ナデ	条痕後あらいナデ		摩滅
65	1T Ⅲ	深鉢	口縁部	～1mmの透明、～2mmの茶色粒	良好	赤褐色 赤褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ、指頭痕	○	
66	B Ⅲ・Ⅳ	深鉢	口縁部	～2mmの黄褐色、赤褐色、黒色粒	良好	にぶい黄褐色 褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ	○	外面スス付着
67	1T Ⅲ	深鉢	口縁部	1～2mmの黄褐色、茶色、～2mmの透明、黒色光沢粒	良好	にぶい黄褐色 赤褐色	貝殻条痕後あらいナデ	貝殻条痕後あらいナデ	○	
68	3T Ⅲ	深鉢	胴部	～1mmの透明、白色、黒色光沢粒		明黄褐色 にぶい黄橙色	ナデ撚糸	ナデ		
69	3T Ⅲ	深鉢	胴部	～1mmの透明、白色、黒色光沢粒		橙色 明黄褐色	ナデ撚糸	ナデ		
70	B Ⅳ	深鉢	口縁部	～0,5mmの白色粒		黒褐色 黒褐色	貝殻条痕	ナデ		摩滅、貝殻復縁押引文？
71	Ⅳ	深鉢	口縁部	1mmの灰白色、微細な黒色光沢粒	良好	明黄褐色 浅黄色	横位貝殻条痕、貝殻腹縁刺突	ナデ		摩滅
72	A Ⅳ	深鉢	口縁部	1～2mmの透明、白色、1mmの金色粒	良好	明黄褐色 にぶい黄褐色	斜位の貝殻条痕、口縁部付近ナデ	ナデ		摩滅
73	B Ⅲ	深鉢	口縁部	～1mm白色、金色粒	良好	明黄褐色 にぶい黄橙色	横位貝殻条痕、縦３列の刺突（工具不明）	ナデ		外面スス付着、摩滅
74	A Ⅳ B Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	1mmの透明、白色粒	良好	明黄褐色　にぶい黄橙色	横位貝殻条痕後あらいナデ、縦２列の棒状工具による刺突	ナデ、指頭痕		外面スス付着、摩滅
75	A Ⅲ	深鉢	口縁付近胴部	～1mm白色、赤褐色、黒色光沢	良好	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	貝殻条痕、斜位の貝殻腹縁刺突	ナデ		穿孔あり、外面スス付着
76	A Ⅳ	深鉢	胴部	～2mmの透明、白色、黒色光沢粒	良好	浅黄色 灰黄色	貝殻条痕後あらいナデ	ナデ		
77	A Ⅳ	深鉢	胴部	～3mmの灰白色、1mmの透明、白色粒	良好	明黄褐色 にぶい黄褐色	貝殻条痕後あらいナデ	ナデ、一部ミガキ？		
78	B Ⅲ 3T Ⅲ	深鉢	底部付近	～2mmの透明、白色、灰白色粒		明黄褐色 浅黄色		ナデか		摩滅著しく、外面剥離
79	A SI1 Ⅳ	深鉢	底部		良好	にぶい黄橙色 灰黄褐色	ナデ	ナデ		

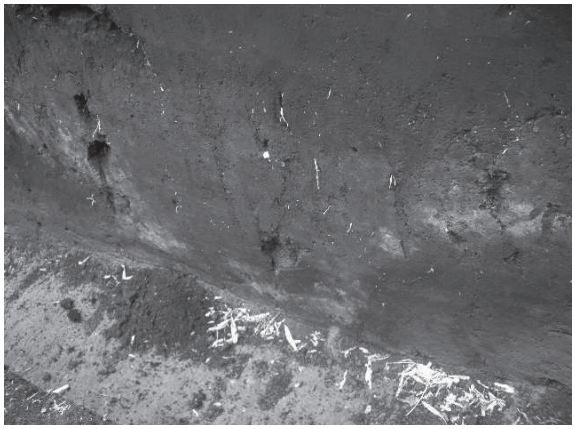
図版

図版1



立野第５遺跡調査区近景（北東側より）

調査区全景（写真下部が北）



遺跡北東側 K-Ah 落ち込み

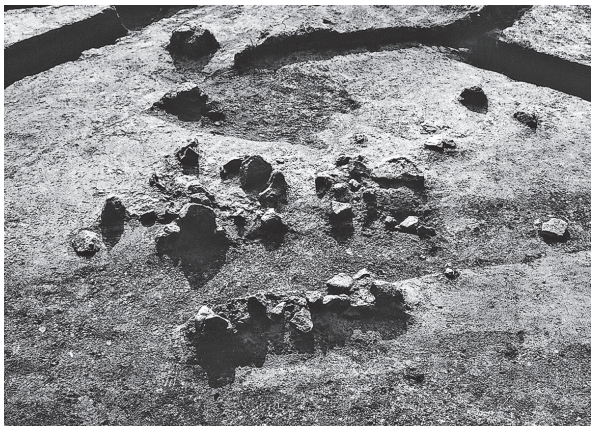
確認調査風景

二次堆積黒色土堆積範囲

SI2（北西側より）

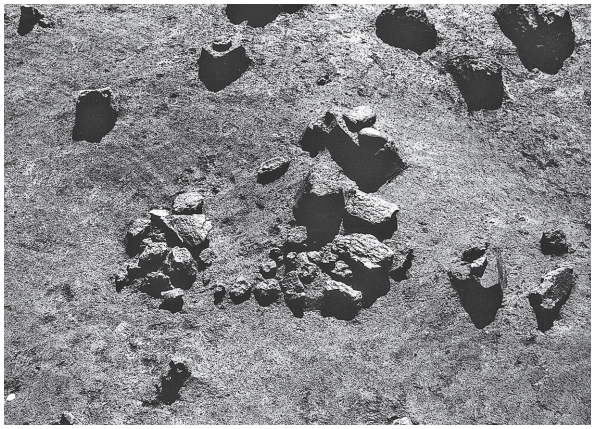
SZ1 半截状況（東側より）

SI22 半截状況（西側より）



SI3（東側より）

SI14（西側より）　　礫群の痕跡



SI27（北側より）

SI13（北東側より）

SI23（東側より）